

#### 四、青年訓練所

青年訓練所は大正十五年四月二十日、勅令第七十號、青年訓練所令の公布によりて全國一齋に是れが設立實施を見たる社會教育施設にして、同日附文部省令第十六號を以て定められたる青年訓練所規定第六條に依り既改の實業補習學校を以て青年訓練所に充用することを得たるが故に本郡に於ては各町村に於て、既設の實業補習學校を充用して青年訓練所とす而して青年訓練所に於て訓練を受くることを得るものは概ね十六歳より二十歳迄の男子にして、是によりて青年の心身を鍛鍊して國民たるの資質を向上せしむるを以て目的とす。

訓練項目は、修身及公民科、教練、普通學科、職業科とし、訓練時数は、四ヶ年を通じて修身及公民科百時、教練四百時、普通學科二百時、職業科百時を下らざるものとせらる。而して青年訓練所に充用せる實業補習學校に於ては青年訓練所生徒としての取扱ひを受くるに至りてより、右規定に達する訓練を受けたる者に對しては、大正十五年五月七日附普通學務局長通牒四ノ二に依りて證明書を交附する事とせられたり。

青年訓練所職員は主事及指導員にして、青年訓練所規定第十六條に「公立青年訓練所の主事は實業補習學校長又は小學校に、指導員は實業補習學校又は小學校の教員、在郷軍人其の他適當と認めたる者に地方長官之を囑託す」と定められた其後昭和十年四月一日青年學校令の發布により従來の實業補習學校と青年訓練所を廢して新たに青年學校を設立することとなれり。

(桑原委員)

#### 五、幼稚園、托兒所

##### 一、岩島恒心幼稚園

本園は岩島村大字岩下の篤志家浦野判平氏の獨力奉仕の經營にかゝるものにして、昭和三年六月一日創立岩下一圓及附近の幼兒を收容し通年無報酬にて兒童を教養しつゝあり、職員として同氏の長男素二氏之にあたり、其他家族一同之に従ふ、幼兒數常に二十名乃至四十名、郷黨之を徳とす。

(桑原委員)

##### 二、中之條幼稚園

本園は中島修氏の獨力經營にかゝるものにして、昭和六年八月一日創立なり、園兒現在二十八名にして、通年之を教養しつゝあり、職員は同氏及家族獻身的之に従ふ。

(桑原委員)

##### 三、太田村農繁托兒所

愛國婦人會群馬支部の施設にかゝり、太田小學校に附設す。昭和三年六月十六日の創設にかかる。所長は學校長にして職員は小學校及役場職員之に當る。昭和三年年度の收容兒童數八十四名なりしが漸次其成績を認められ、昭和九年度の兒童數は百二十六を算す。

(太田校報)

#### 六、草津祖師堂

——日蓮宗草津教會所——

延享三年<sup>二四</sup>〇六湯本治雄の妻恒子深く妙教を信仰し十人の僧伽を屈請して法華經千部を讀誦し以て法界に供養す。降りて弘化年間<sup>二五</sup>〇四——<sup>二五</sup>〇七山本十右衛門湯本安兵衛等佛像佛具を寄進し、安兵衛に温泉鬼門際の爲め自己の所有地の一部を寄進し、本山久遠寺の聽許を得て淨行庵と稱する庵室を建立す。是れ即ち現祖師堂の濫觴なり。其の後湯本先々代は宗祖日



蓮大士の尊像を、又湯本平内は清正公出陣の像を各寄進す。安政四年<sup>二五</sup>山本十右衛門の妻下總國中山の法華經寺に天井張り資金三百六十五兩寄附の旌賞として同寺より法寶の鬼子母神像一軀を淨行庵に附與せらる。現に祖師堂別殿に奉安す。當時下總國中山より中仙道宿場役人に宛てたる先觸狀左の如し。

覺

一、引戸箱 壹挺

一、長持 壹棹

一、兩掛 貳荷

一、輕尻 壹足

右は今般下總中山より中仙道板橋宿本壽院へ用向有之候に付罷越候右用濟の上明廿九日本壽院出立の上更に武州上州表末寺溫泉場草津淨行庵まで罷越候間船川宿々人馬相對賃錢を以て繰出可給候 以上

安政五年七月十六日

下總國中山

法華經寺 役僧

板橋宿 蕨宿 浦和宿 大宮宿 上尾宿 桶川宿 鴻巣宿

熊谷宿 深谷宿 本庄宿 新町宿 倉ヶ野宿 高崎宿 神山宿 三ノ倉宿 大戸宿 須ヶ尾宿 長野宿 草津宿 問屋

役人中

以上

此先觸の品々草津淨行庵に差置申可候  
昭和三年一月三十日蓮宗草津教會所と改稱して認可を稟請し同年五月九日附を以て許可指令あり。現勢の大要左の如し。

名 稱 日蓮宗草津教會所

教育、宗教



設立年月日 昭和三年五月九日

維持方法 教信徒淨財喜捨

創立者 大野日貞外世話人

擔任教師 遠藤寛照

教信徒數 教徒六名

信徒百二十名

(祖師堂内執筆報告)

### 七、眞宗大谷派草津説教所

草津町湯ノ澤字落合にあり。是れが開基に不惜身命の努力を拂はれしは、兒玉信義氏なり。兒玉氏は關西の人、明治三十八年頃より、病みて當地に隱棲す。資性濃厚篤實然かも絶對他力の信仰に燃え剛毅不屈の人なり。當時湯の澤に於ける病者の心理及び生活状態は放縱怠惰自暴自棄に流れ、靈肉共に蝕れ、其の弊風實に粟然たるものあり。是を目撃せる氏は此の暗雲を一掃して精神的に安心の殿堂を樹つるには、須らく宗教信念に俟たざるべからずと思ひ同信共鳴の士を求む。この時に當り三重縣人下間徹氏を得たり。氏は俠骨稜々たる快男子にして克く兒玉氏を補佐す。是等信教信者は小數なりと雖、純信鞏固にして氏の零團氣の裡に超然として信仰を維持し遂次指導融和せしめんとし茲に門徒會なるものを設立せり。爾來幾多の波瀾に遭遇し會堂設置の必要を生し焦慮凝議す。偶々大阪の人佐伯正氏小壯氣銳にして、惻隱同情の念深く、健康者にして度々不幸の病者を慰問接觸する内、兒玉氏の計畫に賛同して積極的運動を試んとし、上京して眞宗大谷派の權威一世の高徳文學士近角常觀師、並に癩患者の慈父と仰がる、光田兼輔氏、東京養老院長安達憲忠氏等の深甚なる同情を得て廣く社會の博愛人士に訴へて義捐を募り之に信者の寄附本山より下附金により漸く起工の緒につくに至れり。

明治四十五年七月十九日、縣に申請し、坂田松五郎氏の寄附に係はる土地地均しに着手せり。爾來日を経るに隨ひ、理解ある町當局信仰に燃ゆる同志の努力の結晶は、木造板葺二五坪五合の説教場竣工せり。依て兒玉氏の持佛阿彌陀如來を本尊とし、大正元年十一月遷座式を舉行せり。次で大正二年九月十二日認可あり。爾來教師は近角師を初代とし、本多慧孝師、藤井宗教師、森川祐忠師、和光堅正師、藤本再生師に至る。此の間光明會設立、樂泉園慰問布教、日曜學校、火葬場並に墓地の新設、無料宿泊部、醫療部を設くる等社會的事業として、成績見るべき多し。

附記 維持方法 教信徒の淨財喜捨  
 教信徒數 教徒一八名 信徒八四名 (説教所内執筆報告の要領並に草津委員報)

### 八、草津弘法大師教會所

大正九年大師信者某氏生活上のため基督教に轉宗し從來捧持せる大師の尊像一軀を湯川に放擲せんとするを傳へ聞きたる信者等恐惶し該像を乞ひ受け草津字落合二百八十四番の山林中に方九尺の小堂を建立して安置す、これ今日の教會所の緣起なり。大正拾壹年夏大澤利助氏、該山林參千六百餘坪を買ひ受け教會所建立並に四國八十八ヶ所の靈場を勸請せんことを發願して其の敷地として寄附す、信者一同隨喜し有縁の人士又喜捨聲援を吝まず忽ち宿願満足せり。是より先き草津町光泉寺住職豊山派僧正中村林盛師は大澤利助氏其他信徒の大願成就のために高野山に登り大師の足跡と遺業を偲び、參籠し祈禱す感應いよくあらたかなるに勇躍し尋いて四國に渡り八十八ヶ所の靈場に詣て一々の靈佛に觀請の懇念を祈願し各靈場の聖き土砂一掬宛を捧持し歸り靈地に該當せる番毎に淨砂を石像の下に埋没し以つて四國の靈場に擬せるなり。教會所は大正拾貳年八月二十九日群馬縣の認可を得草津山四國八十八ヶ所弘法大師教會所と公稱し草津溫泉新名所の一として名高し。



爾來香花のたむくる人の絶間なく廣漠たる地域に常盤木灌木の繁れる間を縫ひて蜿蜒長蛇の形を成せる路傍の兩側に八十八番の本尊並に大師の兩石像の併立せる前に蹲踞せる老岩男女が南無大師遍照金剛と高らかに唱へるを觀るは誠に喜ばしき限りなり。

本堂は不動明王を本尊とす。元東京市牛込區笹笠町南藏院の法寶たりしを本堂建立と同時に遷座奉安す。其後大阪の富豪奥村某氏湯治に來草して偶々參詣し大師堂改築の寄附を申出られ茲に昭和二年秋再建せり。

大澤氏其他主なる信徒逝去せるも信者一同其の遺志を繼ぎ益興隆の路を辿りつゝあるは蓋しこれ大師の鴻徳と光泉寺現住職鈴木賢治氏の誠意の賜なりとす。  
(草津弘法大師説教所誌)

### 九、寶玉山光原寺の觀世音について

#### 一、原の觀音

昔、原町が、平川戸町といふ名で、岩櫃城下、今の字上の宿にありました頃は、この原町市街のある處は勿論、その北裏の田圃まで、たゞ、一面草花々たる野原で、この野原の中、今の上の町の寶屋商店の邊に當る處に、何時の頃からとも知れず一つの觀音堂がありましたので、原の名は、自然、「觀音原」といはれ、觀音様は、「原の觀音」といはれました。この觀音様の功德あらたかたで、闇夜に光明を放たれたと傳へられるところから、觀音様の寺號を、寶玉山光原寺と申したといふこととあります。

「人皇三十一代、用明天皇の王子聖德太子御正作なり。郡中第一の古佛にして、千百四十年來の靈佛なり。昔、闇夜に光を顯はし玉ふ。依つて光原寺と觀音の寺號を申すなり」(享保五年——二百三十三年前——圓聖法印著再編吾妻記の一節)

「吾妻三十三番觀音札所の第十三番、原町、しやうくの光を放つ光原寺 あきらかなれや闇を照らさむ」(寛放十年——百三十五

年前——三島村澤尻觀音別當所の記録による)

#### 二、原の觀音を御殿の東へ引く

今から約三百年前、慶長十九、元和元、同二年の三ヶ年に亘つて岩櫃の御城は取り拂はれ、城下町であつた平川戸町は、觀音原へ引き移され、その原の町の北裏へ新たに郡代役所と御殿とが建てられたのでありまして、この時觀音堂は今この處へ引かれたのであります。是等の事を斷行致しましたのは、眞田伊豆守信幸(昌幸の子)の家老で、當時、吾妻郡代であつた。出浦對馬守幸久といふ、七十歳ばかりの老人でありました。

「原町初の事。本は平川戸町といひて、岩櫃城下の町なり。今は上野宿といふ。元和二丙辰年、信州上田眞田伊豆守信幸の時代今の原町へ引移す。吾妻一郡の中なりといふ。平川戸の町を繪圖にして其の屋敷主に段々割渡す。奉行出浦對馬守則ち當郡の郡代なり。

其の頃今の原町は田畑もなき芝野なり。觀音原といふ。其の故は、原町上の町に、いてふやといふ小名所あり、其の所に觀音堂あり何れの頃よりありといふ事知れず。右の觀音夜々光明あるに依りて寺號を光原寺と號すとなり。今は顯徳寺院内に安置す。町割の時引くとなり」(元祿八年——二百三十八年前——上原政右衛門の著書吾妻郡略記の一節)

「元和二年に至りて岩櫃の城を破却して今の原町へ引き屋形を建つ。四方百間餘堀を掘り土手つき柵塀をかけ内に本殿並に役所を建て則ち一郡の仕置先々の通り原町にて相行はる。本殿は眞田信幸信州より沼田通路の休所なり」此の時の郡代出浦對馬守此の所に居す。(同書の一節)

#### 三、御本尊の御尊像

御本尊聖觀世音菩薩の御本像は、御丈二尺六寸、壹座合せて四尺一寸あり、丈五尺の御厨子の中に納められた、金色燦爛たる御尊像で、左手に蓮華を持ち、右手に法瓶を傾け持たれる、優麗典雅な姿態、慈悲無量福德圓滿の御相恰は、拜し奉る人をして自ら頭の下るを覺えしめます。



天保十一年の火災の時に、下の町の新井善兵衛といふ人が、早速馳けつけ、御厨子諸共背負ひ出して、裏の畑へ御移し申した爲に、幸に、無難であつたと承つて居ります。

この御尊像は、今より三百六十三年前に、圓翁海老上人の造つたもので、聖徳太子御正作の靈像は、その胸の中に籠め奉つてあつたとの事でありませぬ。圓翁海老は、顯徳寺の開山上人であります。

「一、聖觀世音木像一體

御丈二尺六寸、臺座一尺四寸五分、厨子丈五尺。

往昔は寶玉山光原寺と稱す。其時圓翁海老上人此の觀音尊像を造り聖徳太子御作の靈像を胸間に籠め奉ると云。元龜元年庚午年五月十八日」

(顯徳寺記録)

四、永代常燈明奉獻勸進の事

明和六年と申せば、今から百六十四年前に當りますが、その九月某日に、觀音別當顯徳寺住職の發願、當原町の名主、年寄、組頭等の世話で、永代常燈明奉獻の勸進、即ち、寄附募集をした事がありました。その時の帳面は、今も顯徳寺に保存してありまして、別當の書いた趣意書と、淨財寄附の賛助者であつた、原町中皆様の祖先の名とを見ることが出来ま

す。「抑當觀世音菩薩は、人皇三十一代用明天皇の皇子聖徳太子の御御影にて靈驗顯たかの尊像なり。此菩薩は(中略)無縁濟度慈悲冥顯無窮なり依て永代常燈明を献じ奉り(中略)若十方檀那の合力有らば争か願望を果さざらんや(中略)仍て勸進の趣件のことし。

明和六年巳丑九月吉日

名主三郎左衛門 年寄五郎兵衛 年寄六兵衛 年寄太右衛門  
組頭善兵衛 組頭伊兵衛 (顯徳寺藏同寄附帳)

五、石燈籠、鐵燈籠の寄進

前述の、永代常燈明奉獻勸進より五年前に當る明和元年には、觀音講中の人々が、石燈籠を寄進しました。即ち、今、石橋の側にあるのがあれでありまして、燈籠の脚に、皆様の祖先の名が鮮かに刻みつけてあります。西の方に刻みつけてある文字を讀んでみますと、

奉獻觀音講供養 明和元年申歲十二月吉日

作兵衛 孫右工門 六兵工 茂右工門 三良兵工 玄順 惣兵工 作右工門 茂兵工 權助 武右工門 善右工門  
七右工門 金兵工 市良右工門 半兵工 清右工門 好庵 伊右工門 六郎治 忠右工門 伊兵工 治助 半七  
清重 半左工門 平助 藤七 三良左工門 三左工門 與一兵工 オクメ 半兵工 善右工門 清吉 重右工門  
七五工門 長三郎 徳左工門 清兵工

とあり、東の方には、

普明 明和元年甲申願主 小四郎 文平  
嘉永壬子三月再建 下之町中

世話人 木檜半兵衛 河野長右衛門

とあります。此の二つは同年に出來た同形同質同大のものでありまして、正に一對を成して居ります。東の方の一度倒壊したのを、嘉永五年に修理再建したのであります。

因に、此の一對の燈籠は、元、大門口にありましたのを、近年現在の處に移したのであります。それから御堂の前、櫻の木の傍に、一基の鐵燈籠があります。これには、願主田村七左衛門とありますが、現在、下之町小島七平氏の祖先(小島氏本姓田村)が寄進したものであると承つて居ります。惜しいかな年代は判りませぬ。



六、大磐若經轉讀大法會の事

當觀音の大磐若經轉讀大法會は、何時から始まつたものか判然致しませんが、只今顯徳寺倉庫にある鐵眼版大船若經六百卷が、今より百七十六年前、寶曆七年九月山口六兵衛氏の寄進のものである處から推して、古く見ても百七十六年來の事ではなからうかと思はれます。それが、今より九十年前天保の火災に、御堂が焼失してからといふものは、御經は幸ひ倉庫に保管してありましたから残りしましたが、幾年か轉讀法會の修行が出来ませんでした。それを復興しましたのは、別當良覺で、良覺の書いた越意書と、合力助成した人々、即ち皆様の祖先の方々の名との載つて居る帳面が、今も顯徳寺に残つて居ります。

「岩櫃の城主武威遠近に振ひしころは普代の面々服心の輩は言に不及土豪農民に至る迄城内に家居し此地は觀音原となへ原中に一字の精舎あつて寶玉山光原寺と號し聖徳太子の御作正觀世音の尊像を安置し奉り武臣農夫四時不怠香華を捧げ敵味方戦死の亡靈に手向け且は四海無異に歸しいつか太平の恩波に浴せんと朝夕祈り奉りしに時なる哉元和偃武の頃出浦對馬守深く此の尊に歸依し領主眞田侯の命を奉じ今の地に移し奉る無利不現身の誓ひむなしからず日に月に利益新にして既に二百餘年の星霜を経たりしにはからず佛殿灰燼となりしかば大阿じや梨良惠之をなげき再建の志を興し又除病延命里中安穩水火消除の爲に大磐若轉讀の大會を修せんと欲す然るに年月移りて發起の志を續き諸人隨喜の力によつて佛殿は形の如く造立したりと雖もいまだ大磐若會を修するいとまあらず故に此度高門有信の善男女をかたらひ法會を興行せんとす仰願くば力を等しくして予が志みたす此の行をとげしめ玉はば世間出世間一切勝事得皆成就富貴安樂福德知惠壽命長久二世悉地疑なからむと云密教山顯徳寺良覺(華押)「永代大磐若經轉讀大法會興行趣意書」

右の趣意書には、良覺の華押も据つて居りますから、同人自筆のものでめらうと思ひますが、年號やその他一、二了解に苦しむ處があります。又、右趣意書の文中に、復興とか續行とかいふ意味は見えて居りませんから、轉讀大法會の事は

ことによるとこの頃から始まつたのかも知れません。さうすると、八、九十年來の事になります。

七、天保の火災と堂宇の復興

天保十一年<sup>九十三</sup>正月八日、不慮の火災に罹つて、由緒古き御堂の焼失しました事は、誠に残念であります。前述の如く、その時逸早く駆けつけた新井善兵衛氏懸命の働きにより、御本尊が御厨子の儘裏の畑(今、藤)に移されて無難でありました事は、有り難い事でありました。その後數年を経て、山田村字清水の豪家、町田三右衛門方の彌陀堂を譲り受けることになり、之を移して建てたのが、即ち現在の御堂でありまして、時は、焼失から十二年を経た、嘉永五年<sup>八十一</sup>年以前でありました。

(表 札 棟)

奉再造聖觀世音菩薩御堂宇

聖主天中天 大檀那大梵天王  
迦陵頻伽聲

哀愍衆生者 勸進者帝釋天王  
我等今敬禮

上野國我妻郡原町  
顯徳寺八世大阿じや梨法印良惠  
發願主 整性院一蓬遊營居士木橋英休

嘉永五年壬子年四月吉辰  
當山兼實相院瑞範

世話 本檀佐兵衛善政  
施主 原 町 中

(裏 札 棟)

一切日皆善一切宿皆賢諸佛皆威徳  
羅漢皆斷漏以斯誠實言願我成吉祥

嘉玉山光原寺

從山田村御堂買取之節世話人  
山田村善福寺隱住宜譽和尚  
郷原村本龍院 辨了

大工棟梁 四萬村田村若狭藤原喜之  
原町安原喜兵衛  
脇棟梁 四萬村田村輝之進  
土方棟梁在組眞下武右衛門

妙音院慈悲坊



之を見ますと、現在の御堂は、顯徳寺住職と須郷澤の木檜氏(しちや)とが發願主といふ格で、原町中、即ち皆様の祖先の方々が施主になり、善福寺の隠居と本龍院の法印との周旋で山田村から買ひ取り四萬原町の大工土方の手で建て上げられた事が一目瞭然であります。棟札には四月とありますが、顯徳寺の記録には、八月となつて居ります。多分、落成が八月であつたのでありませう。

因に、現在の観音堂は、柱梁鴨居敷居須彌壇彫物等櫛ぞつきのすばらしいもので、内陣外陣の、境の欄間の彫物は、まん中が鳳凰左右が麒麟のすかし彫り、向拜(こはい)の柱や梁の上の彫物は正面まん中が龍の透し彫り左右が唐獅子に象の對と牡丹の透し彫りの對とで誠に立派なものであります。此の堂は前文にもあります様に山田村の豪家町田第六代三右衛門貞英が自分の家の彌陀堂として建立した寶曆十年(百七十三年前)八月十六日上棟のものであります。其の時の大工棟梁は群馬郡室田村の今井嘉兵衛正綱といふもので、彫物師は江戸神田の水守七五郎光長といふ名手でありました。原町へ移した時の大工田村若狹といふのは今井嘉兵の弟子であつたと申します。

八、鰐口の奉納

御堂の正面向拜に懸けてあります大鰐口は、御堂移建のその年の十二月に、須郷澤のちやで奉納したもので、之も誠に大きく立派なものであります。その銘を讀んでみますと、

(表) 福聚海無量

(裏) 吾家累世敬信圓通菩薩 日奉香火

造金鼓一口以易之 是則先人之志也

嘉永五年壬子十二月吉日 願主 新井淺右衛門正純

と、あります。福聚海無量は、觀音經の中にある句、圓通菩薩は觀音様の事、金鼓一口は、鰐口一つといふ事でありま

す。

九、白雲齋青嶂筆の奉納繪額

御堂の外陣に、堅二尺五寸、横四尺位の大きな繪額が二面掲げてありまして、その一つは、平忠盛が祇園の怪僧を捉へる圖で、之には「奉獻御寶前、干時文久二年龍集壬戌二月下浣穀旦、願主白雲齋寫」と書いて、青嶂といふ印が押してあり、他の一つは、勿來關の八幡太郎義家を描いたもので「文久壬戌三月吉日 願主當山十一世良範母」と書いて、やはり白雲齋青嶂の落款があります。どちらも、構圖といひ筆力といひ、筆勢といひ、筆致といひ、稀に見る立派なものであります。外陣合天井の花鳥の繪も、大部分は青嶂畫伯の筆であります。是等の繪は確かに同畫伯の傑作で、寶物としての値打あるものと信じます。

青嶂畫伯は館林方面の人で、晩年原町に住んで居りました。觀音堂の直ぐ後ろにその墓があります。

一〇、再建後の屋根替へと今回の大改造

嘉永五年に、山田村から移し建て、から十八年目に、當る明治八年には、屋根替がありました。この期間が聊か短か過ぎるやうであります。再建當時は恰も夏であつたので、好い葺葺が得られず、假りに葺いて置いたものではなかつたのでせうか。この明治八年の大葺替の後、四十二年を経た大正八年に小修繕を加へまして、今年、即ち昭和八年迄保たせたのであります。屋根の手入れが、明治八年、大正八年、昭和八年と、八年ごろひとなりましては、偶然とは申しながら奇觀でありまして、何か因縁でもありさうに思はれます。明治八年の大葺替から今年迄は已に五十九年にもなりますから途中で麥桿を挿した位では、保ち難くなりましたのも無理はありません。今回、トタン葺に改造する爲に葺を取り除けました處、ぐしの木材に次の文字が記されました。

干時明治八乙亥載

教育、宗教

大工 山口徳三郎

河野谷藏

木檜嘉平



屋根師 越後國高田在棟梁 山崎幸吉  
脇棟梁 塚田金作

世話人 木檜喜平次 妙音院十二世佐伯亮尊代

この明治八年の大葺替の時には、定めし町中皆様の非常なる御助力に預つた事と存じますが、その當時の記録が見當りません。大正八年の時にも、例に依つて町中檀那の合力に預りましたが、この事は、未だ記憶に新たなる處であり且つ十餘年間中門の扉の上に明細に掲示致して置きましたから、各位の已に御諒承下さる事と字じます。更に今回の大改造に就きましては、一般不況の際なるにもかかはらず御願ひを申し出で、各位の御配慮御盡力に預りました事を恐縮に存じます。併し、御助成の御蔭を以て、朝夕眺めては久しく焦心苦慮して居りました腐朽甚しかつた御堂の屋根が耐久性不燃焼質の材料を用ひた立派な屋根となりまして、私は誠に嬉しく存する次第であります。

(新井信示)

### 一〇、三原三十四番靈場御詠歌

- 第一番 長野原、造道、正觀音菩薩  
夢の世にぼだひの種をつくりみ ちちかひもふかきたに川の音
- 第二番 與喜屋、萩原、觀音菩薩  
鹿の聲きけば花さくはやきはらの 佛をたのむあきの夕ぐれ
- 第三番 與喜屋、觀音  
後の世もよきやときけばたのもしや ころろのあかをすく熊川
- 第四番 應桑、熊川、岩谷堂(馬頭觀音菩薩)  
もふできて何を佛にいわや堂 たゞひとすじにたのむのちの世

- 第五番 應桑、小宿寺、觀世音  
過去より未來へ通る小宿寺 ちかひもらざじのちの世のみち
- 第六番 應乘、穴谷堂、觀音  
たづねきてそのかみきけばたのもしや ちかひもふかきあなや堂かな
- 第七番 芦生田、觀音堂  
あしうだもよしや浪速のことはも たゞひとすぢにたのむくかんをん
- 第八番 鎌原堂  
かまはらやうき世のちりをかりのけて ころろの月はくもりあらしな
- 第九番 干俣堂、觀音堂  
のちの世をなげきてそでやしぼるらん 今ほしまたとときぞうれしき
- 第十番 門貝、觀音堂  
ころろをばまろくもまろくいのるべし、かどがひなればさわりあるべし
- 第十一番 大笹寺  
あかはねやとびきしあとをたづねきて おやのちぎりにこゝで大笹
- 第十二番 岩井堂(三原)  
あらたかにこゝでほとけにいはいはるどう むつのちまたのつじにまよはじ
- 第十三番 袋倉、觀音  
ひとすぢにいのればかなふくろぐら 未來はなほもたすけたまへや

教育、宗教



第十四番 今宮堂(現在今井村)

あらたかにいまみやさまとをがむべし 大悲のかけやくもりあらじな

第十五番 羽根尾寺澤

てらさはやながれぞなき觀世音 だいひのかけやなほもさやけき

第十六番 草木原堂(大津)

くさぎはらをしわけたづねきてみれば ほとけはここにありあけの月

第十七番 立石寺 (大津)

としつきもおもはずしらすたつしいや たすけたまひや大悲觀音

第十八番 桑井、矢場堂(大津)

あづさ弓ねがひのきしにあたるべし よきやばどうときくぞうれしき

第十九番 洞口堂(大津)

ほらぐちはいづくなるらんおそさわの ちかひもふかくひとくたきつせ

第二十番 草津、御座の湯

あらたかにほとけはここにござのゆや まいる人みな利生あるべし

第二十一番 日影、あふみ堂

たづねきてここでほとけにあふみどう 二世あんらくの身こそたのもし

第二十二番 日影、くはぞの(桑園)堂

あらたかにゆいりておがむくはんぜをん くはぞのまゝにせうどなるべし

第二十三番 小雨寺

ありがたや小さめにぬるゝみなれども だいじだいひのかけにやどらん

第二十四番 小雨、金藏堂

ひとすじにいのる利生のあらはれて こんぞうどうときくぞうれしき

第二十五番 沼尾寺

くはんをんの救世いのふぬにさをさして 苦界のぬまをわたるうれしき

第二十六番 赤岩堂

くはんをんのだいひのいけやあかいわの あさ日もてらすゆふひかどやく

第二十七番 中村井、貝瀬、つかま堂

うちこしのまつふく風かことのねか つかまにひとくたに川のをと

第二十八番 権壁、小倉堂

ひとすじに南無くはんをんとおがむべし こぐらきみちもひかりかどやく

第二十九番 横壁堂

よこかべやすぐにといのるくはんぜをん まよいはらふきつくまもなし

第三十番 湯原寺(川原湯)

たゞたのめだいひあらたのうすがすみ はなのゆばらにむらさきの雲

第三十一番 川原畑三つ堂

身のはてをおもひいるかのやまのはを だいひのかけやくもりあらじな



第三十二番 はやし寺(林)

いそがれてつきひのたつもはやしでら みのりあいをたのむくはんをん

第三十三番 下田堂(林)

はるばるとまいるしもだのくはんぜをん ふかきちかいにあふぞうれしき

第三十四番 龍澤寺

たきのさはうきみのあかをすゝぐかな だいひのかげややどりもやせん

番外 今井横堂

あらはさでをけどいまるのくはんぜをん ちかひもふかきあまづみかな

南無大慈大悲觀世音菩薩

慈悲の目にくしと思ふものはなし つみある人はあわれまします

種々重罪五逆消滅自他平等即身成佛

願以此功德普及一切我等興衆生皆共成佛道

唵阿呂黎迦娑婆可

(長野原町委員)

#### (四) 保健衛生

##### 一、高沼の榮養改善

澤田村大字山田字高沼戸數二十一戸(人員一三九)は縣指導の下に榮養改善部落として昭和八年十一月二十日より一ヶ月間山田、坂本、兩技手指導の下に實施せり其後年と共に効果の大なるものを認めつゝあり。尙、右に關聯して澤田校に於

ては兒童の榮養給食を企圖し昭和九年六月一日より第三分教場に、同十年二月一日より第五分教場に、實施したるが、全校に實施の日も近きにあらんとす。  
(澤田村委員報告)

##### 二、高津の臺所改善

一、位置 名久田村大字横尾字高津

一、飲用 水道ノ設置

イ、給水戸數 部落全十九戸

ロ、起工 昭和二年二月十八日 竣工同三月十五日

ハ、經費 金壹千貳百拾八圓貳拾錢也

ニ、人夫 延人員 四百貳拾壹人 使役馬匠延頭數 五十六頭

ホ、五經費支辨之方法

(一) 金六百九拾圓 縣補助金

(二) 金拾六圓八拾錢也 特別負擔金(一戸ニテ給水栓二ヶ所以上取付ケタルモノヨリ實費徴收ス)

(三) 金五百拾壹圓四拾貳錢 農家組合資産ヨリ

ヘ、六水道基本財産蓄積 水道使用料 一戸ニ付月拾錢徴收

一、臺所ノ改善

イ、縣農會住宅改善獎勵規定ニ準據シ實施ス

ロ、視察 勢多郡粕川村金子與十郎氏方、群馬郡清里村前原農事組合、新田郡笠憲村山際農家組合等ヲ視察シ縣農會内

田技師ノ指導ヲ受ケ實施ス

保健、衛生



- ハ、起工 昭和四年二月二十日 竣工 同年五月二十日
- ニ、實施戶數 部落全十九戶
- ホ、實施方法 農家組合ヨリ一戸ニ付三十圓補助金ヲ支給シ共同作業ニヨリ行フ
- ヘ、經費 最高貳百圓 最低三十圓 普通 五十圓

(名久田村委員報告)

### 三、長野原町の上水組合

#### 上水道

- 一、起工 昭和四年八月一日
- 二、竣工 昭和四年十月三十日
- 三、經費 金貳萬五百圓也
- 四、長サ 本線鐵管直徑三吋ニシテ延長六百九十八間二分  
支線(共同線個人線)四十七ヶ所  
防火設備線八ヶ所(高サ六十尺マデ上ル)  
妨積長サ二十五尺幅二十尺有水深十尺(五千五方尺)  
人口千ニ對スル給水量五立方及  
現人口ニ對シテ一・二五五  
年中不凍水ヲ配給スル
- 六、水源ハ地下(地上タンクハ海拔二・二二五尺)ノ地下百五十尺ノ所ニアル地下水ヲ濾過シテ電力ニテ吸ヒ上ゲタンクニ收容

七、需要人員及戶數  
人口八百五十人  
戶數百七十一戶

### (五) 土木、交通、通信

#### 一、序 說

吾妻郡誌發行以來、八年を経過したる今日、本郡の交通、通信は非常に變化し、就中自動車の發達は道路橋梁の改修を促し、更に昭和五年以來の農山村不況は救農土木事業を起し、路線の改修、路面の擴張となり、更に又、昨秋九月の大水害と十二月よりの省營バス運轉とは改修と擴張とを一段と促進し、本郡の交通は一新面目を改め、又其事業の繼續中のもの少なからず左に項を分つて、最近工事狀況を表記することとせり。

#### 二、府縣道改修工事

(昭和九年十二月調)

路線別	町	村	大字	長	竣工年月日	中之條上田線	大	大
高崎草津線	坂	上	萩生	三八〇〇米	九、五、二〇	同	御關所橋上	八六九、六八、一二、二五
同	同	同	本宿	一五〇〇	九、九、二五	同	大笹入會	三〇五、〇
草津東長倉線	長野原	羽根	桑尾	二〇、〇〇〇	八、一〇	同	田代	二四三、四
高崎草津線	同	大津	桑尾	一八〇〇	七、一〇	同	田代	六二三、六
花敷長野原線	同	貝	瀬	二〇〇〇	一〇、二	同	鳥居峠迄	七〇四、六
						停車場戀線	三	一二九、五
							原	九、三、三〇

土木、交通、通信

一九七















同

同

赤坂

一一〇、五〇一

一、五〇七、〇〇〇

九、一、八

九、三、二五

### 七、自動車自轉車數調

(昭和十年一月末調)

町村名	自動車		町村名	自動車	
	乗用	貨物		乗用	貨物
中之條	三四	二六	草薙	三	二
東田	二	四	津合	九	一
太田	一	一	澤田	三	四
原町	四	一四	伊田	一	一
岩島	六	三	名久	一	一
坂上	一	四	名山	一	一
坂野	七	五	高山	一	一

(以上一―六、佐藤、小池兩委員調)

### 八、自動車會社

一、群馬自動車株式會社

從來本郡の交通機關は東京電力株式會社の軌道によりて澁川、中之條間を電車によりて旅客を運び來りしが、自動車の發達により昭和二年二月一日群馬自動車株式會社設立せられ現在本社を中之條町に置き左の路線に運轉旅客を運搬しつゝあり。

イ、澁川、中之條、四萬線  
バ、中之條、澤渡線

四〇軒五  
一〇、  
ニ、中之條、原町、大戸線

五九、八  
一三、

尙鐵道省線と連帶運輸取扱をなし、其取扱驛は、中之條驛、四萬温泉驛、の二箇所なり。

近來、鐵道省の週末乗車運賃割引の爲、郡内温泉地、名勝地への觀光客及ハイキング、スキー客の來郡するもの四季を通じて多くなり、交通も繁劇を極む。  
(佐藤、小池兩委員調)

二、吾妻自動車株式會社

本郡西部長野原端戀を経て鳥居峠に至り、上田温泉電気株式會社と連絡して、長野縣上田市への交通を計るものに吾妻自動車株式會社あり、昭和五年十一月五日の營業開始にして長野原町、鳥居峠を一日三往復をなすと共に草鐵新鹿澤温泉口驛より新鹿澤温泉まで一日一往復をなす。  
(佐藤、小池兩委員調)

### 九、省營自動車吾妻線の開通と上信鐵道並吾妻馬車

#### 鐵道敷設請願當時の回顧

昭和十年十二月十一日から、澁川より中之條、原町、長野原町、鳥居峠等を過ぎて、長野縣眞田までの吾妻本線七十九軒、同線大津より分岐して草津までの上州草津線十五軒、此の計九十四軒の省營自動車吾妻線が開通し、同時に群馬自動車株式會社の澁川中之條線、中之條草津線の營業は廢止された。

澁川(群馬郡)、中之條、長野原、三原、草津、眞田(長野縣)の各驛には驛員が配置されてあつて、旅客、手荷物、小荷物、附屬小荷物、貨物並に旅客携帶品の一時預りをする。

甲里(群馬郡)及原町の兩驛は業務委託驛で、旅客、到着手荷物、到着附屬小荷物、小荷物及貨物の取扱をする。前記八驛以外は、驛員の配置も、指定運送取扱人も無く、只乗降客の爲めに停車する驛である。

願れば本郡原町の山口六平氏が、上信鐵道株式會社の設立を主唱し、小島文六(東京)、小泉信太郎(多野郡)、久貝源一

土木、交通、通信



(千葉縣)井上正貞(東京)木暮武太夫(伊香保)、竹中直行(東京)、吉村寛十郎(京都)、辻新次(東京)、小山田信義(東京)の九氏と共に、澁川を起點とし、本郡を東西に縦貫して長野に至り、信越線に連絡すべき私營汽車鐵道敷設の請願をしたのは明治二十九年七月十三日で、會社の發起人は前記十氏の外、佐々木一二、鹽谷五十足、小林宇六、土屋源三郎、干川多十郎、高平長卿其の他郡外二十三名の諸氏であつた。

山口氏は、上信鐵道敷設の請願をなしたる一方、更に澁川を起點とし、太田村大字植栗に至りて中之條町に渡り、それより原町岩下長野原を経て草津に至るべき馬車鐵道敷設をも計畫し、同志を糾合して明治二十九年五月六日を以て出願をして居り、更に翌三十年九月一日附を以て吾妻馬車鐵道株式會社の發起を申請し、同年十月七日附で農商務大臣伯爵大隈重信の認可を得た。併し株式應募意の如くならず、其の翌三十一年五月五日に、敷設區間を澁川原町間に改め、資本金六萬圓(初十八萬圓)の株式會社に變更し明治三十四年二月二十六日附を以て工事着手の届出をしたのであつたが、如何なる事情を有つてか遂に其の實現を見ることを得なかつたのは惜しむべきことである。今日其の日記が残つて居るが、此の間に於ける山口氏の奔走盡力は實に涙ぐましいものがある。山口氏が汽車鐵道敷設請願と並行して馬車鐵道敷設にも盡力したのは一見二鬼を追つた様にも思はれるが、山口氏としては、汽車鐵道敷設の階梯として馬車鐵道を先づ實現せしめんとしたものであらう。何れにいたせ本郡の爲めに交通の便を開かんとするの山口氏の努力は眞に多大なものであつたことを後人は永く記念すべきであらう。

其の後澁川四萬間に、温泉馬車といふものが通ひ始め、それが澁川中之條間の馬車鐵道となり、馬車鐵道は軌道電車となり、之と並んで群馬自動車株式會社の手廣い旅客運輸の營業があつたのであり、その軌道電車が昭和八年三月運轉を休止したので郡内町村長會の上信鐵道速成運動となり轉じて省營自動車運轉運動となつて、遂に其の開通を見るに至つた次第である。

然らば上信鐵道の方は如何といふに、山口氏の遺志を繼承して代議士木槍三四郎氏が衆議院に幾度となく建議し、其の容れる所とはなつて居るが、諸種の事情、未だ其の實現を見ること容易ならざるものがあるらしいのである(新井委員)。

## 一〇、交通に關する餘録

### 一、箱根土地株式會社専用道路

淺間山麓鬼押出の奇巖、六里ヶ原國境平の躑躅の觀光、鹿澤、萬座、草津の温泉、草津、鹿澤のスキー等西部吾妻の交通發展の爲、箱根土地株式會社は昭和六年七月工費四萬圓を投じて三原、沓掛間に幅員六米延長四里の自動車専用道路を開き一般に便せり、通過料金は乗用自動車一回一圓、貨物自動車一回二圓なり。(孺戀村委員)

### 二、電車の廢止

東京電力株式會社中之條出張所を中心として經營せられし、中之條、澁川間の軌道電車は、明治四十五年開始の軌道馬車時代より十數年其間電車に引直し營業し來りしが、昭和八年三月營業を休止せり(郡誌九二二頁參照)

### 三、鳥居峠の開通

上州と信州とを撃ぐ鳥居峠改修道路である。往時奥吾妻は鳥居峠を越えて馬背により信州上田、須坂方面との物資の交換をなした。が、草津電氣鐵道の開通するに及んでその勢力は奪はれた。然るに大正十五年現孺戀村長戸部彪平氏の經營による乗合自動車の設置を見、次いで昭和四年吾妻自動車株式會社の設立と共に、昭和八年八月群馬長野兩縣の改修道路は全く完成し、茲に再び兩縣の交通は完全に連絡するに至り、旅客の運搬は勿論奥吾妻の特産物たる馬鈴薯、野菜類及び上田方面よりの日用雜貨の運輸が頻繁である省營バス開通も近い日に實現されんとしてゐる。(深井氏報)

### 四、舊三國街道に就いて



三國街道は太古よりの通路にして諸書に見え日本古典たる萬葉集和歌(赤見山)あり又文中年間の北國紀行文明年間の四國雜記(薙刀坂の歌)猶關八州古戦録に永録四年三月上杉謙信三國越にて厩橋に入城北國大平記に天正十年織田勢瀧川儀太夫越後へ三國越にて亂入せんとせしも上杉に支へられ攻入ことならず引上げたること等及上杉と白井城との交通の要路なりしなり。

三國街道の宿驛は中仙道高崎驛より分岐し金古、澁川、金井、横堀、中山、塚原、須川、相俣、永井(以上上州)を經三國峠を越へ淺貝、二居、三俣とそれより多數の驛を経て長岡に至る然してこの街道により參勤交代をなしたる諸侯は大略左の如し、

伊井直政(與板) 柳澤光昭(三田市) 神原政恒(高田) 牧野忠雅(長岡)  
溝口直博(新發田) 堀直央(村松) 堀之教(稚谷) 糸魚川城主  
佐渡奉行 新潟奉行

徳川幕府に於て交通取締の爲め三國峠以南に關所を構へ通行人の取調を嚴にす各宿々の旅舎主は宿泊人に關所切手を交附し其通行を證明す中にも中山宿は兩關所の間なるを以て切手の交付最も大なり

柰の關所 三國通り金井宿と横堀宿の間、南牧にあり、元和年中徳川二代將軍秀忠公初めて柰の番所を置かる寛永二十年柰の橋關所と改む明治初年に至り廢關となる

猿ヶ京の關所 相俣、長井の關猿ヶ京にあり寛永八年四月徳川三代將軍家光公の設けたる處なり明治初年廢關となる。街道傳馬人足に付ては寛永十二年五街道宿驛の人馬を定む

東海道 百人 百匹 仲仙道 五十人 五十匹 其他 二十五人 二十五匹  
右の法により御用人馬中山宿は二十五人二十五匹は晝夜の別なく備へ置き臨時に差支なき様致置き諸侯小通行の節は村

内にて出勤し大通行のときは吾妻郡利根郡群馬郡の内十一ヶ村(吾妻郡五ヶ村 大塚村、平村、赤坂村、横尾村、枋久保村。利根郡五ヶ村 上川田村、下川田村、屋形原村、岩本村、今井村 群馬郡一ヶ村 尻高村)の助郷ありて御用人馬の必要に應じ各村名主へ問屋宿役人より通達するときは其時刻に遅れざる様名主自ら宰領となりて人夫を統率し隣驛横堀及塚原迄勤務せしものなり又其賃金は諸侯の支拂は半額にも不及次第なるを以て其不足は村内石高割にて徴收したるを以て石高を多く持ちたる百姓は殆ど窮狀を極めたり。

明治初年中山宿より布施驛に直通する切ヶ久保新道を開鑿したるを以て舊道に比し道程を減じ頗る便利となりたる爲め國道に列し新政府の施設せし郵便局も明治五年中山局を開設せられ新潟縣に通ずる郵便本線として高崎局より澁川局、中山局、永井局(以上群馬縣)を經、淺貝局(新潟縣)より順次新潟へ遞送する等實に繁榮をなしたり然るに明治十八年七月清水新道竣工し國道となりたるにより群馬郡北牧より(吾妻郡)布施に至る間の國道は廢せられ從て郵便本線も變更して澁川局持戻りとなり更に中之條局持戻り局となりたり。

一一、通信に關する調査 (昭和九年中)

局名	普通郵便		小包郵便		電報	
	引受數	配達數	引受數	配達數	引受數	配達數
中之條	三一、二八八	三七六、六三四	五、三六〇	九、六九〇	三、六五〇	三、六五〇
箱島	三、五八六	六、一〇二	五、八〇〇	一、二九五	四、〇〇〇	七、七〇〇
原町	一三八、四一七	一九四、一一七	二、二三〇	四、六一九	一、四一七	一、二八七
岩下	七四、六七四	一〇八、八三五	一、三〇一	一、六六九	九四六	一、三二九



大	長	川	大	三	大	草	四	澤	高
野	原	原	桑	原	笹	津	萬	渡	山
戸	原	湯	原	原	原	原	原	原	原
六、六五七	一〇二、四七三	二二、一九三	八〇、九四四	七〇、三七五	一〇、六八五	四一四、二七三	一五三、三八七	三、一六九	六五、三八三
八八、三三七	八七、一一〇	三〇、五一九	一一九、九一一	一〇三、七一九	一五、四六〇	三八八、五三六	一五四、五七七	四、二四五	七〇、四五二
一、〇三八	一、五二九	四九七	三、三九八	一、〇〇九	一、四五〇	七、六二六	一、八一八	五、一六	二、五九九
二、〇〇七	二、八六三	一、一二二	二、一六六	三、七八六	三、五一〇	一八、三五〇	四、八六三	一、三二五	一、〇六五
六九〇	九二二	四一〇	三九五	一、九三九	一、二一〇	七、三三二	一、一六五	四、七九	三、五〇
九六八	八九一	四八五	五二三	一、六五三	一、四二〇	六、五二〇	一、三四三	五〇三	四六二

(小池英委員調)

(六) 社會事業

一、國立癩療養所栗生樂泉園

一、位置 吾妻郡草津町

一、沿革 本園は昭和六年度に於て豫算十二萬圓を以て新營工事に著手し同年五月内務省と群馬縣と協力し敷地として草津町大字栗生、瀧尻ヶ原水の窪等に亘る土地十八萬餘坪を選定し地均工事、温泉導引、患者浴場及假事務所を建設し

又一部通路の開鑿を爲し同七年度に於て更に豫算十萬七千餘圓を以て水道布設、診療所、重病舎及集會場等の新築を了し同年十用國立癩療養所栗生樂泉園と稱名し同年十二月より收容を開始せり、次で同八年度に於て豫算十二萬圓を以て今日に至る。

一、事業

イ、昭和七年十二月より患者の診療を開始し主として草津町湯の澤區より漸次之を收容し現在收容患者數男百十九人女五十六人計百七十五人に及ぶ

ロ、其の他草津町湯の澤區の外來患者も隔日に診療しつつありて其の取扱數現在五十人内外なり。

ハ、尙他の療養所と異り敷地内の一部に自由地區を認定し有資力患者に自費を以て住宅を建設せしめ安住の地として移轉居住を慫慂中にして現在十四棟十七家族の移轉を見たり尙同地區内には群馬縣廳職員の寄附になる患者住宅一棟ありて二家族居住せり。

ニ、以上の事業に併せ財團法人癩豫防協會の事業として患者相談所を設置し患者の身上相談、一時入所、治療等を取扱ひつつありて現在建物二十七棟を有し男八十五人女三十一人計百十六人の患者を收容せり此の中には先般風水害の爲め壊滅せる大阪府所在の第三區府縣立外島保養院の遭難患者中當園に委託の者九十八人を包含す。

ホ、其の他癩患者の家庭に在る兒童中未感染者を其の家庭より分離保育する爲め栗生保育所を建設し之が委託を受けたるを以て昭和八年十一月より其の事業を開始せり。

栗生保育所は教育、保育、醫務の三部に分ち更に教育部の事業は之を草津町に委託し所内に草津尋常高等小學校栗生分教場を設置し又保育部の事業は之を日本救世軍に委託せり

保育兒童數は男八人女六人計一四人にして其の内學齡に達せるもの三人に對しては教育部に於て小學校令による教



育を授けつつあり。

一、設備

敷地 病舎地區 一二二、九六五坪 (内自田地區約一二、〇〇〇坪)  
 官舎地區 五七、三五〇坪  
 計 一八〇、二一五坪

其の他 二二  
 計 五三 九三、三  
 一、一四五、九七

建物

イ、栗生樂泉園

診療所 一棟 九九、九二  
 假事務所 一 三五、〇〇  
 集會場 一 四二、〇〇  
 炊事場 一 二三、〇〇  
 患者住宅 七 三二九、九〇  
 患者浴場 二 六四、七〇  
 消毒所 一 二六、五〇  
 洗濯所 一 二四、〇〇  
 官舎 一五 三七五、八七  
 官舎浴場 一 二五、七五

口、栗生相談所  
 患者住宅 二六棟 三四五、五〇  
 賣店 一 二〇、〇〇  
 其の他 一 七、〇〇  
 計 二八 三七二、五〇

ハ、自由地區

患者住宅 一五棟 一五二、七五

ニ、栗生保育所

教育部 一 一一五、〇〇  
 保育部 一 一二八、七〇  
 醫務部 一 二一、七五  
 計 三 二六五、四五  
 合計 九九 一、九三六、六七

二、職員

所長 醫學博士 古見 嘉

所長	一	醫官	二	醫官補	二	書記	三	調劑手	二	看護婦長	一	雇員	五	傭人	三	栗生保育職員所	九	計	五六
				(内囑託二)		(内兼務三)		(内囑託二)				(内囑託六)							

(栗生樂泉園報)

二、草津に勅使御差遣の御事

一、御使御差遣次第 (栗生樂泉園)

天皇陛下には陸軍特別大演習に際し特別の思召を以て當園に御使御差遣被遊癩豫防の施設状況に就て親しく御視察を賜はつたことは誠に恐懼感激の極みで光榮此の上もないことであつた。

皇室に於かせられては癩豫防事業に深く御軫念あらせられ従來屢々有難い思召を拜したのであるが昭和七年には 畏くも 皇太后陛下より「癩患者を慰めて」との御兼題のもとに

つれづれの友となりても慰めよ ゆくこと難き我にかはりて  
 とて病者の身に餘る有難い御歌を拜受し今回更に斯る特別の光榮に浴し無量の御仁慈に只管感泣の外はなかつた次第である。

御使御差遣の儀に關しては昭和九年十一月十六日海江田侍従を當園へ御差遣被遊同侍従には同日午後二時十五分御着所長の御先導にて約四十分間に亘り診療所、患者浴場、病舎及財團法人癩豫防協會の委託事業に係る患者相談所及兒童保育



所等につき詳細御巡覽遊ばされ又此の日奉送迎の爲所定の位置に整列せる職員及患者全員に對しては特に御立留りの上親しく擧手の禮を賜はり殊に兒童保育所御巡覽中には奉迎の爲整列せる幼兒の敬禮を御受け被遊慈みの御言葉さへ賜はり破格の光榮に浴し全員は此の無上の光榮に深き感激に充たされたる次第にて、御使には此の感激裡に御發遊ばされたのである。

三

侍従の御着を所定の御休憩室に御迎へ申し上げ所長以下伺候の後所長より約五分間に亘り業務を言上し次で園内御巡覽中に於ても隨所に於て夫々御説明申上げたのであるが、尙同日左の印刷物を御使迄奉呈申上げた。

記

一、國立癩療養所栗生樂泉園概況書寫

一、栗生樂泉園昭和八年々報

一、同 上 繪葉書

一、栗生保育所繪葉書

二、御使御差遣次第(聖バルナバ醫院)

(栗生樂泉園報)

昭和九年十一月十六日午後二時五十一分聖バルナバ教會館に御着、直ちに會館御休憩室にて御休憩を願ひ其の席に於て院主代理エム・ビー・マギル、院長鶴田一郎、牧師山中政三、保育主任アイ・エム・ネットルトンの四氏伺候の榮に浴し、尙ほ鶴田院長より業務概要を言上、それより職員及兒童御奉迎の中を御徒歩にて御見晴所へ向はせられ、診療所聖望學園、部落等を御覽になり、續いてステパノ館(男子收容所)正門まで御進みになられ、會館前に於て御乗車、午後三時十一分御奉送裡に御歸途に上らる。

(聖バルナバ醫院報)

(七) 史跡、名勝、天然記念物

一、原町の大樺

所在、吾妻郡原町大字原町字下之町

大樺は澁川より草津に至る縣道の道路敷に在り。最近本樹の東北側の荒蕪地を拓きて道路となせるより樹の周圍は凡べて道路に面することとなり。

樹の西北側は石垣を設け盛土をなせるも東南側は低し。盛土の高さは約一・六米なり。

高地面(盛土の北側)の土際の幹圍 約一六米八九

それより一・五米上の幹圍 約一〇米九七

低地(東側)の根元より約二米上の幹圍 約二二米四六

幹は略三角形を成し北側(幅約五米)及東南側(幅約五米)は凸凹するも西側(幅約四米)は凹入せり。

枝張(根元より)……東方約九米〇〇、東北方約二二米八〇、西方約一一米五〇、南方約一四米四〇、北方約一一米〇〇

主幹は低地面より高さ約六米にして六大支幹に分れ各更に分岐す。幹は瘤起多し。

本樹は俗にツキ又ツキノキと稱し古來の大樹なり。明治維新の頃岩鼻縣に於て本樹を伐らんとせるが地元の抗議によりて果さず唯東側の一大横枝を切取りて用材となせりと云ふ現に切痕の存するを見る。(昭和七年十月二十八日新井信示調査)

後記 原町の大樺は昭和八年四月天然記念物として指定せられたり。

史跡、名勝、天然記念物



## 二、原町の大櫨に關する史實傳説

### 一、町制の時、基準點となつた。

現時の原町市街地及び其の西北一帯の田圃東西南北各十數町の間は昔吾妻の原又は觀音原と云はれた二面の草原で此の草原の西に當つて聳える岩櫃山の中腹に、有名な岩櫃の城と其の城下町たる平川戸町とが有つた慶長十九年（三百十七年前）時の岩櫃城代で吾妻郡奉行であつた出浦對馬守幸久は領主眞田伊豆守信幸の命に依つて岩櫃城廓を破却し城下の平川戸町を觀音原に引下ろしたのである。其の移町の際、新規町割の基準線（街路の中心線）を岩櫃城の背後に聳えて居る夫婦岩といふ一巨巖と觀音原の東北端に鬱然として天を蔽ふ一老樹、即今回指定せられた大櫨とを連結する一直線に取り、此の直線上に延長七町餘幅員七間の街路を開き其の兩側に屋敷を割つたのである。今日原町役場の倉庫に保存する貞享の御水帳を見ると當時の屋敷割番號が知れるし又同役場保存の享保古圖に依ると原町市街の變遷がわかる。

### 二、町の鬼門除け鬼門塞ぎである。

原町は一本町で其の方向は南西から北東に眞直に延びて居る。それで北東端即ち鬼門に町割當時已に蒼鬱たる巨樹であつたこの大櫨を當てたのである。即ち北の大櫨で鬼門を塞いだのである。

### 三、切口から血が流れ出した。

明治元年岩鼻縣知事大音龍太郎が縣廳舎の門扉に充つる櫨の巨材を管内に求めて此の大櫨に着眼し、屬吏大島某といふものを遣はして之を伐せようとした。原町の古老は鬼門塞ぎの樹である旨を申立て、異議を唱へたが聽かれなかつた大

島某は官威を以て遂に鑿を加へ、先づ試に地上二丈許りの處にある大櫨を幹の附け根の處から伐り取らせた。ところが内部が空洞になつて居るといふ事が分つたので豫期の用を成さぬものとして伐採することを中止した。此の時切口から血液様の赤色液汁夥しく滲出したので、人々は之を木の血液だと喧傳して爾來一層聖視するに至つた。當時の實見者が今尙生存して居る。

### 四、大枝の切口の年輪八百餘

十數年前大枝の一つが枯れたので之を伐り取つた此の大櫨の所有者（町民八十餘名の共有であるが重立ち一人の名義にしておく）同町新井伊三郎氏が試に其の年輪を數へたら八百を數へて尙ほ一寸餘數へ得ない部分があつたと云ふ。

### 五、吾妻川河成段級の崖縁に生えたのである。

之は私の考察であるが、此の大櫨のあるところを地形上から觀ると吾妻川河成段級の崖縁であつて此の大櫨は初め外の雜木と共に段級の崖縁に生えたものであつたのだ。人文の發達に伴ひ河成段級のこの邊は雜木は伐り拂はれ、崖は崩され或は畑となつたところもあるし、屋敷となつた部分もある。かゝる變遷をそれからそれへと見續けて此の大櫨は生えたまゝの處に一千年を経過して今日に及んだものである。

（新井信示）

## 三、川原湯岩脈

昇龍岩及び臥龍岩（理學博士脇水鐵五郎氏命名）

所在地 吾妻郡長野原町大字林より大字川原湯に亘る。

交通及附近の地質 吾妻郡原町から吾妻川の左岸に沿うて西へ進むこと約十二軒で同郡岩島村大字松谷字上組に達する此の邊から長野原町大字川原畑字八場迄約二軒の間が有名な吾妻峽である。

史跡、名勝、天然記念物



これより更に川に沿うて左岸を上流に進むこと一軒八百米に隧道があつて此の隧道から西五十米の地點に岩脈がある。尙ほこの西約二百三十米の地點にも岩脈がある。此の二つの岩脈の内、東のものを昇龍岩西のものを臥龍岩といひ此の二岩脈を指して川原湯岩脈と稱する。

此の岩脈の貫通する附近の岩石は、概して新火山岩に屬する輝石安山岩質の集塊岩である。此の火山岩を噴出したる火山の所在は未詳なれども榛名火山又は白根火山でなく、恐らく川原湯北方標高一千三百四十二米の高間山等であらう。岩脈の岩質及結構、昇龍岩及臥龍岩共に吾妻川を南北に横つて川の左右及兩岸及川敷にも露はれて居る。恐らく榛名山噴出よりも更に古き時代に、北方の火山より此の地に集塊岩、集塊凝灰岩等を噴出して後地殻の變動により此處に裂罅を生じ此の地層の裂罅に輝石安山岩が逆入して岩脈を生成したものであらう。

昇龍岩(東方のもの) 吾妻川の左岸道路に接する部で幅四米之が北方の高さ約六百米の小山を貫いて略、南北の方向に走り道路から望見し得る所が約二十五米其の北方に更に約二百米は探查することが出来る。川敷に露出の箇所は幅四米長さ六米である。川の右岸で明かに觀察し得る箇所は幅四米長さ十米で走向は北三十度西である。岩脈面の傾斜は東へ六十度で柱狀節理が岩脈の側面に直角によく發達して居る。尙ほこの岩脈は川の左右兩岸のものが元來一脈として連続して居たものが川の浸蝕によつて川敷の部が洗ひ去られたものと思はれる。かく考へて通計すると岩脈の全長は三百六十米となる。

臥龍岩(西方のもの) 川の左岸縣道に接する處では幅十一米之が斜に北方の高さ約六百五十米の小山に沿うて北二十五度西の走向で連つて居り約百米は望見することが出来る。岩脈面の傾斜は東へ五十度である。更に北方に約百八十米は探查することが出来る。川敷のものは幅十一米長さ十五米である。此の岩脈も川の左右が一脈として連続して居たものが川の爲切斷されたものであらう。川敷を合せて全部通計すれば探查し得た所で約四百米に及んで居る。

本岩脈は昭和九年十二月二十八日天然紀念物として文部省より指定せられた。

(本縣史蹟名勝天然紀念物調査委員中曾根都太郎)

#### 四、名勝 吾妻峽

はしがき

吾妻峽は吾妻郡岩島村大字松谷字上組、雁が澤橋の南辨天島から吾妻川に沿うて上流に、同郡長野原町大字川原湯字下湯原の新大橋に至る舊道、道陸神峠の下、約三杆半に亘る峽谷を指稱する。大正元年秋地理學者志賀重昂氏は九州の耶馬溪に優ると激賞し、頼山陽が山國川の溪谷を耶馬溪と漢字的に呼びしに準じ、吾妻川の溪谷を錦繡、誠に畫圖の如き湖谷であるとして、吾妻に因み漢字的に嗚呼畫圖澗(又あゝがとかん)と呼んだ所であり、過般文部省囑託脇水鉄五郎博士は名勝として指定の價値十分と認められた所である。又俗稱關東耶溪の群馬郡小野上村大字村上鹽川の岩井洞附近より吾妻川に沿うて上流に吾妻峽を経て吾妻郡長野原町大字横壁の丸岩、御洞岩の邊迄約四十杆の吾妻川の溪流を汎稱する。吾妻峽は此の區域中の景觀最も優秀の部である。なほ吾妻峽十勝の名勝は、吾妻山岳會長田村丑十郎氏、地方の研究者新井信示氏、金澤佐平氏等と相謀り從來の呼稱、脇水博士の命名を參考として一應決定したものである。

#### 一、交通

吾妻川は始め吾妻郡の略々中央部を東流し後東南に派れて群馬縣澁川町で利根川に合流する。この澁川町にある上越南線澁川驛から乗合自動車の便がある。即ち吾妻川の右岸に沿うて上流に進み、吾妻郡原町の入口で左岸に移り吾妻峽の東の入口まで澁川驛から約三十杆である。草津電氣鐵道による場合は吾妻郡嬭戀村大字三原所在新鹿澤入口驛から吾妻川に



沿うて下流約十五軒で吾妻峽の西端新大橋に達する。此處にも乗合自動車の便がある。川原湯温泉は新大橋の西南約一軒半にあり草津温泉は、吾妻峽から長野原町を経て約二十軒、四萬温泉は原町、中之條町を経て約三十軒の處にある吾妻峽の東の入口に注ぐ雁が澤に沿うて西北に溯れば約五軒で川中温泉に達する。尙ほ吾妻峽に沿ふ現在の道路により澁川、長野縣上田間を連絡する省營バス開通も近く實現せんとして居る。

二、吾妻峽の概要

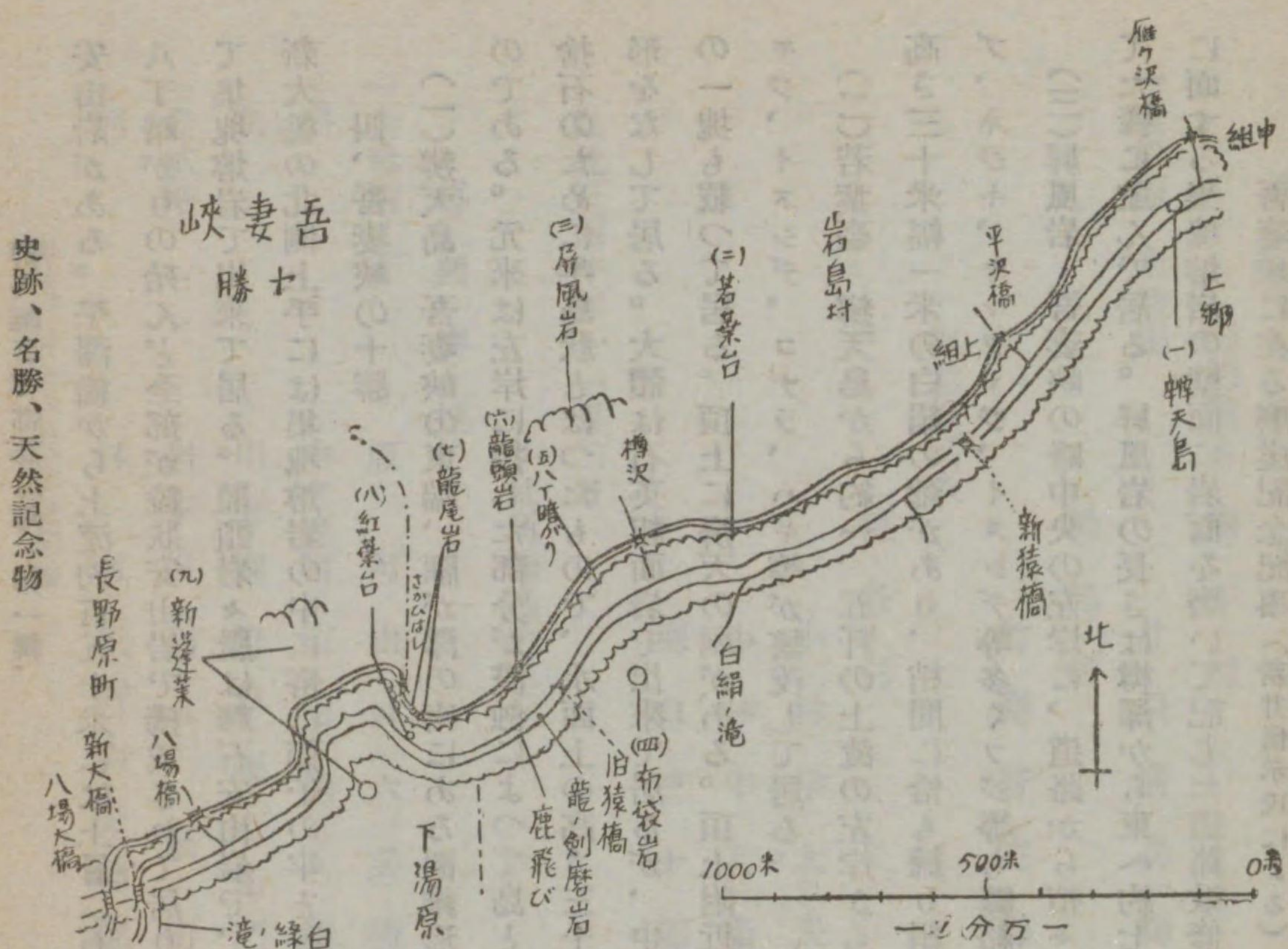
吾妻峽は大體火成岩に屬する石英粗面岩、粒狀安山岩、安山岩、集塊熔岩等から構成されて居るが、此等の岩石が甚だ複雑に配置せらるゝため流水の浸蝕にも變化があり概して深い峽谷をなすが、廣狹曲折變轉著しく溪流も或は急に或は緩かに、道路の兩岸には奇石怪峯相次で並び立つてゐる。而も道路は峽谷の中邊を通るので仰いでは危岩を見ると共に俯しては百仞の絶壁に臨むものである。

峽谷の兩岸にはカヘデ類クヌギ、イヌシデ、リヤウブ、サクラ類等の落葉潤葉の樹木多く樹下の岩上にはツ、ジの類が多い、何れも夏は鬱蒼として生茂り、所によつては晝なほ暗く森嚴幽邃深淵を覆ひ、冬は落葉して雪の溪谷美を呈する。春は若葉の新緑にツ、ジ類の紫紅を點じ秋は樹々紅葉して錦繡の活圖幅を擴げるなほこの地域には、大小幾多の岩脈があり、甌穴があり、對岸には數條の飛瀑も懸つて居る。斯くの如く四季を通じて誠に千態萬様の景觀に富む。茲に峽中特に景勝の部、著しい岩脈等下流より上流へ次の十景を選んで名所とする。

- (一) 辨天島 (二) 若葉臺 (三) 屏風岩 (四) 布袋岩 (五) 八丁暗がり (六) 龍頭岩 (七) 龍尾岩 (八) 紅葉臺 (九) 新蓬萊 (一〇) 白絲の瀧

三、吾妻峽の地質

天城、箱根、富士、八ヶ岳、立科等の諸山を連ぬる富士火山脈に並行してこの副脈として荒船、妙義、碓氷峠、鼻曲、



史跡、名勝、天然記念物

淺間隠、管峯(寒峯、大洞)王城、高間、暮坂峠、松岩山等を連ぬる碓氷峠火山脈が走つて居る。この火山脈の淺間隠山以南では、上信二國の國境や、吾妻・碓氷兩郡の郡界をなして居るが、それ以北では吾妻郡を截然東西兩郡に分つて居る。吾妻川は王城山高間山の南方でこの火山脈を横斷して深い横谷を造つて居るが此處に吾妻峽がある。碓氷峠火山脈に屬する山々は那須火山脈に屬する淺間山、草津白根山、赤城榛名、日光等より生成古く浸蝕が甚しく進んで居る。

吾妻峽兩岸の岩石は相對する部に於ては略同様で、岩質は粒狀安山より成る部が多いが、之に石英粗面岩、集塊熔岩、安山岩等を介在する下流より觀れば辨天島附近は石英粗面岩であるこの岩石は辨天島の近くで、吾妻川の左岸に注ぐ雁が澤を僅か上流の松の湯温泉、次で約四軒の川中温泉の邊にも分布する。辨天島の對岸たる右岸にも延び又辨天島から上流二百米邊迄達して居る。雁が澤橋から平澤橋に至る川の左岸畑地や丘陵地には豊富な泥流層があり泥流丘も散在する。辨天島の頂上にも集塊熔岩の一塊があるが、恐らく天明三年大噴火の際泥流に運ばれた一個の泥流丘であらう。平澤橋の下には美しい緑色の粒狀



安山岩がある。平澤橋から上流約百五十米には上層に石英粗面岩下層に粒状安山岩を見る。これから上流若葉臺附近から八丁暗がりの殆んど全部が粒状安山岩で構成されて居り、屏風岩、樽澤、新蓬萊、白糸の瀧附近新大橋の兩岸等は主として集塊熔岩で出来て居る。龍頭岩々脈は輝石安山岩で、母岩は粒状安山岩、龍尾岩々脈は岩脈も母岩も輝石安山岩である新大橋の北側上手には集塊熔岩の中に俗に獅子の牢と呼ばれる幅五米高さ三十五米の裂罅がある。

四、吾妻峽の十勝

(一)辨天島 吾妻峽の東端、雁が澤の南にある圓錐形の小丘で、一見溪谷中の島の様であるが底部は左岸に續いて居るのである。元來は左岸に接した部分が浸蝕によつて島となり、昭和二年に起工された群馬水電株式會社松谷發電所工事の捨石のために半島状とはつたもので、水面上の高さ三十二米、底部は東西二十五米南北二十米、頂上は六米に四米の大圓形をなして居る。大體は石英粗面岩で出来て居るが、中腹から頂上まで礫層があり頂上の西南側には徑一米半る集塊熔岩の一塊も載つて居る。頂上に辨天の祠がある。頂上附近に多數のアカマツ其他カヘデ、ヒメヤシヤブシ、ホツ、ジ、アナモジ、イヌシデ、コナラ、ハギ等が繁茂して居る。

(二)若葉臺 辨天島から約一、五料の上流の左岸から突出した臺地で高さ約四十米峽谷も急屈折をして居る。對岸には高さ三十米幅一米の白絹の瀧があり、梢間に恰も練り絹の様に懸つて居る。附近にはミヅナラ、コナラ、ケヤキ、リヤウブ、ネジキ、ヤマツ、ジ、イヌシデ等多くフジ等も纏絡して居り新緑の眺めの秀れた所である。

(三)屏風岩 吾妻峽の略中央の左岸に、道路から稍々離れて路面からの高さ二百米の奇峯が、東西に恰も六枚屏風を立てた様に並んで居る。屏風岩の長さは樽澤から東へ約七十米西へ約百三十米、全長約二百米である。樽澤橋の傍には道路に面する集塊熔岩の壁面に岩面を磨いて記した道路改修に關する磨崖の記念記事がある。全文は左の通りである。

吾妻峽に在る磨崖記念記事(新井信示氏による)

奉 寄 進

發起施主 岩 下 村

同

郷原村 菅谷 勘右衛門

一金拾兩 米拾俵

片 貝 清 兵 衛

同

岩 下 村 日 野 太 七 郎

松 尾 村

同

同 所 竹 内 次 右 衛 門

竹 淵 音 三 郎

同

同 所 越 中 麻 買 仲 間 中

地元世話人

同

信 州 油 仲 間 中

横 谷 村

一金壹兩

群馬郡石原村 高 橋 永 次 郎

小 林 半 太 夫

同

三 島 村 中 嘉 兵 衛

小 林 半 兵 衛

同

岩 下 邑 富 澤 重 兵 衛

堀 口 三 十 郎

同

同 所 西 山 太 郎 右 衛 門

弘化三丙午年十一月二日

同

同 所 岸 屋 太 藏

此所修造之

同

松 尾 村 竹 淵 音 三 郎

再 興 寄 進

同

長 野 原 町 間 屋 次 八 郎

一金參兩

原 町 山 口 六 兵 衛

同

信 州 福 井 尾 文 次 郎

同

中 之 條 町 町 田 儀 兵 衛

同

郷 原 邑 之 宿 越 中 麻 買 仲 間 中

同

川 原 畑 野 口 茂 左 衛 門

同

林 村 中

一金貳兩

岩 下 村 福 聚 山

同

川 原 湯 村 中

同

林 村 王 城 山 大 乘 院

同

横 谷 村 中

史跡、名勝、天然記念物



同	與喜屋村中	同	三島村高橋又左衛門
同	赤岩村中	同	大□小林折八
同	今井村中	同	同所富橋孫□
同	干俣村中	一金貳分	湯茂兵左衛門
同	大笹邑馬士中	同	西久保村中
同	信州高井郡丸木屋作藏	同	門貝村中
同	岩下村浦野奎右衛門	同	赤羽根村中
同	野口八	同	袋倉村中
同	江戸猿谷町高橋屋周助	一人足手傳	横谷村中
同	大前邑瀧澤八藏	元治元甲子年十月吉辰	
一金貳分	信州上田三島屋佐石衛門	世話人	岩下村片貝清兵衛
同	川原湯篠原傘	長野原町	宮崎周藏
同	原町原澤五兵衛	地元世話人	小林半太夫
同	松尾村水出惣兵衛		同半兵衛
同	信州上□叶屋文五郎	越後國刈羽郡野□邑	
同	三島邑小池理八郎	石工北原三吉	
同	原町新井三左衛門	同喜市郎	

(四)布袋岩 屏風岩と略相對する稍上流の右岸にある半球狀の奇峯で、高さは道路面から上に約七十米下に水邊約五十

米幅百米圓滿な布袋和尚の相を呈して居る。座した和尚の膝に當る部もある。この邊の左岸に俗に蠟燭岩と呼ばれる鋭い圓錐形の奇岩が相並んで聳立する大なるもの高さ十五米、幅六米である。この間にお助け水と稱する清水がある。

(五)八丁暗がり 若葉臺から上流に紅葉臺迄約九百米(約八丁)に亘る峽谷で、吾妻峽中兩岸の最も狭つた所である。この邊溪流は全く岩窟より迸出して又岩窟に入るの感がある。深い所は路面から四十七米を測る、この狭い處に昔鹿が飛んで往來したと言ふ川幅二三米の鹿飛びと呼ぶ所がある。草津電氣鐵道の通ずる以前は鹿が奥州地方から四萬に出で高間山を越えて比處に來り狹谷を飛び越えて碓氷峠方面へ移動した、猿も常に跳んで往來したなどと傳へて居る。この稍下流の右岸に龍の劍磨岩と言はれる甕穴其少しく下流に舊猿橋の跡がある。

(六)龍頭岩 鹿飛びの附近で道路の側壁に現れた輝石安山岩の著しい岩脈である。幅五米三十、高さ二十米走向は北四十度東、南東に八十度傾いて居る。岩脈の周週の母岩は粒狀安山岩である。

(七)龍尾岩 龍頭岩より上流へ約二百米、道路が急に北に屈曲する部で岩島村と長野原町との境界の境橋に近い所の對岸に輝石安山岩中に現れて居る同質の岩脈である。この岩脈は高さ約五十米、幅約五米上方は稍々狭く下方は水面近くで夫々幅二米程の二條に分れて水底に没して居る。この岩脈の連続は吾妻川を横ぎつて左岸にも現れて居る。道路より下の部は甚しい絶壁と草木繁茂の爲め測量困難であるが道路より上部の側壁には明かである。東の一枝は高さ見得る部分で約十五米、幅二米、走向は北三十度東、北東に七十二度傾斜して居る(尙この分岐岩脈の小分枝と見られるものが西の側邊にある。幅七十糎走向は北二十度東、略垂直の傾斜である)西の一枝は幅二米二十五、高さ約十五米、走向は北四乃至十度東、傾斜は北西に八十度乃至垂直である。

(八)紅葉臺 岩島村の西端長野原町に接する部の左岸で道路から峽谷に突出した臺地である。附近には楓類の巨樹も多く峽中第一の紅葉の名所である。この臺地の水面に近い部を上流から見れば恰も象の鼻狀に見えるので象ヶ鼻とも呼ばれ



てゐる。

(九)新蓬萊 紅葉臺の稍上流、長野原町の東部にある八丁暗がりと共に峽中の最も秀れた景勝の地で左兩右岸に對する穩かな圓錐形の岩峯と左岸から川に下る二個の集塊熔岩の臺地とから成立つて居る。左岸の岩峯は高さ百三十米右岸のものは高さ道路面から六十米、其以下水面迄三十米、幅は下部で六十米位である。臺地は水面から二十米の高さにあるが之は水底にあつたもので、水流削磨の跡も明に認められる。この部の峽谷は數回屈曲して居る。附近に普通の瓢穴の外横の瓢穴も見られる、幽邃な峽谷の情趣の深い所である。

(一〇)白絲の瀧 吾妻峽の西端新大橋の東で右岸に懸る三段に別れた美しい瀧である。上段は落口で幅二米高さ十二米五十、中段は幅三米高さ一米五十、下段は幅十米高さ八米である、附近に楓類多くクヌギ、イヌシデ、赤松等もあり梢間の眺めも奥ゆかしい。

五、吾妻峽の樹木

- 木犀科 アヲタゴ、イボタノキ
- エゴノキ科 エゴノキ、サハフタギ
- リヤウブ科 リヤウブ
- アヲキ科 ミブキ、ハナイカダ
- シナノキ科 シナノキ
- アヲカヅヲ科 アワブキ
- トチノキ科 トチノキ
- カヘデ科 ヤマモミヂ、トキハカヘデ、ウリカヘデ、チドリノキ、ハウチハカヘデ

- モチノキ科 アヲハダ
- ウルシ科 ヤマハゼ、ヤマウルシ、ウルシ(植栽)
- バラ科 イヌザクラ、ヤマザクラ、ヤマブキ、キイチゴ、エビガライチゴ
- クスノキ科 アブラチヤン
- 木蘭科 ホホノキ
- 楡科 ムクノキ、ケヤキ
- 殼斗科 クリ、クヌギ、コナラ、ブナノキ
- 樺木科 ミヤマハンノキ、イヌシデ、ヒメヤシヤブシ
- 松柏科 アカマツ、スギ(植栽)、カラマツ(植栽)
- 忍冬科 ウグヒスカグラ、コバノガマズミ
- クマツヅラ科 ムラサキシキブ
- 石南科 ヤマツ、ジ、ミツバツ、ジ、ムラサキヤマツ、ジ
- サルナシ科 マタタビ
- クロウメモドキ科 クロウメモドキ
- ニシキギ科 ツルマサキ、コマユミ、ツルウメモドキ
- 豆科 ヤマフチ、ハギ、キハギ
- アケビ科 アケビ、ミツバアケビ

結 び

史跡、名勝、天然記念物



吾妻川の沿岸には數十軒に亘つて奇岩妙峯峡谷等景勝の境域が多いが吾妻峽はこの中心部である、道路はこの峡谷の中腹を通ずるから仰いで数十米乃至二三百米の奇峯を眺め俯しては数十米の絶壁下に清瀟の溪流をみる。幅は狭き箇所は二、三米普通十米内外である。兩岸には岩脈甌穴等の著しいものもある。サクラ類、ツ、ジ類、カヘデ類、シデ類の外落葉潤葉樹に富み四季の眺望美しく特に紅葉の景観は優秀である。著しき峡谷なると共に急流深淵を伴ひ又學界の有力なる參考資料を包蔵する、近く名勝として指定せられるであらう。

(中曾根都太郎)

因に「吾妻峽」は昭和十年三月十九日文部省史蹟名勝天然記念物調査委員會の會議に於て「名勝」として指定する事に決定せられたのである。(新井信示附記)

## 五、淺間山鬼押出熔岩流

—附、淺間山の噴火—

はしがき

淺間山は那須火山脈に屬する活火山で、長野縣と群馬縣との間に雄大に聳え立つて居る。鬼押出熔岩流は天明三年淺間山頂の北方の低處から、群馬縣の地域に山腹を被ふて北方に幅一軒乃至二軒、長さ約五軒に亘つて流出して居り洵に壯大顯著なものである。噴出年代の明瞭な規模廣大の熔岩流として本邦稀有のものであるばかりでなく世界的にも珍らしいものである。熔岩上に地衣類始め其他の植物が次第に發生繁茂する有様は植物生態學上有力な資料である。附近に廣漠數百ヘクタールに亘る小松原の原野もあり、約一千ヘクタール(約一千町歩)以上に及ぶ蓮華躑躅の群落もあり高原的景観は洵に優秀である。

一、交 通

鬼押出熔岩流への交通は信越線沓掛驛(長野縣)から約八軒で峰の茶屋に達するが、此處を経て箱根土地株式會社で新に開設した鬼押出道路によつて西北に進むこと約六軒で達することが出来る。此の道路は押出茶屋の處で鬼押出熔岩に接し、次で吾妻郡嬭戀村鎌原を経て同村三原に通ずる、三原迄は約十二軒である。又嬭戀村大字大笹から(八軒)及び吾妻郡長野原町羽根尾から應桑を経て(約二十軒)の通路である。

草津電氣鐵道による場合は北澤井澤(舊名地藏川吾妻郡長野原町所在)から約六軒である。

### 二、淺間山の構造

淺間山は群馬縣吾妻郡と長野縣北佐久郡との間に聳ゆる標高二五四二米の活火山で熔岩、熔岩塊、火山灰、浮石等の累積によつて構成されて居る。其の熔岩は總て輝石安山岩に屬して居り次の様な種類がある。

(イ) 普通輝石のみを含む普通輝石安山岩、之が最も多い。

(ロ) 普通輝石の外、紫蘇輝石をも含む複雑輝石安山岩。

(ハ) 更に橄欖石の加はる橄欖複輝石安山岩。

輝石以外の合分には斜長石の外往々鱗石英を含んで居る。又新しい噴出物中には其の基底をなせる流紋岩質凝灰岩の變質して生じた草青石を含むものもある。

淺間山は三重式の火山で劍ヶ峯、牙山、黒斑山は最初の火山壁の一部即ち第一外輪山である。前掛山、東前掛山は第二次の火山壁の一部。即ち第二外輪山である。此の二重の外輪山の中に噴出したのが中央火口丘の本山で、その頂山が現在の火口である。此の火口壁の東側が淺間山の最高點である。火口は直徑東西三五〇米、南北三一〇米で最近の周圍は二五、六米である。深さは時によりて變化はあるが最近は百五十乃至百六十米である。

小淺間山は寄生火山である。

史跡、名勝、天然記念物



三、鬼押出熔岩流の規模

本熔岩流は天明三年淺間山大活動の最後の噴出として、噴火口の北壁の一部を破壊して山腹に沿ふて北方に流れ下り山麓迄達したもので、延長凡そ五千二百五十米面積約五百八十三ヘクタール(約五百九十町歩)頂上から左手を差出した様に延びて居る。

末端は數條に別れて居り湯元押出、ス、カズカ押出(里俗泥流及び熔岩流を稱して押出と言ふ)等の名稱がある。

四、鬼押出熔岩流の岩質

本熔岩の岩質は橄欖石を含む黒褐色の兩輝石(普通輝石紫蘇輝石)安山岩で表面は突瓦として凹凸甚だしく裂罅に富み鐵滓状を呈して居る部分も多い。本熔岩は噴出の際其の粘度が濃厚であつた爲めか、流動状態を示す波紋を現して居る箇所も少く發育の立派な熔岩鍾乳石繩状熔岩等も調査の範圍では洵に少い。

本熔岩は其の噴出の際一連一帯の熾熱の餘熱の熔岩流が冷却する際節理や裂隙によつて大小の熔岩塊となり之が轉落堆積して生成した箇所もある様に思はれる。

五、熔岩上の植物

本熔岩上の植物も他の熔岩上と同様最初は地衣類の發生を見、次で各種の種類を見るに至つたのである。現在(昭和八年五月)鬼押出熔岩の中程以上の岩上(南方の頂上に近き部)には僅かにミヤマハナゴケ等の地衣類を觀るのみであるが北方の山麓裾野に近くに從つて其の種類と分量を増し末端の熔岩上には殆んど普通の山林と同様針葉樹類、落葉樹類、灌木類等が盛んに繁茂して居る。又山麓裾野に近き部では周圍の山林原野から種々の植物が徐々に熔岩上に進出する狀を觀ることが出来る。頂上に近い數百米には植物を認めない。植物は大要左の通りである。

地衣類 ミヤマハナゴケ、エイランタイ

蘇台類 コスギゴケ、ヒカリゴケ(低所の洞穴中にある)

羊齒類 シシガシラ、ヒカゲノカタツラ、マンネンシギ

松杉科 アカマツ、カラマツ、ヒメコマツ

禾本科 コメス、キ

樺木科 シラカンバ、ヒメヤシヤブシ

蓼科 オンタデ

景天科 イハレンゲ

薔薇科 ヤマナ、カマド

岩高蘭科 ガンカウラン

石南科 ツガザクラ、コメバツガザクラ、クロマメノキ(アサマブドウ)、シロバナシヤクナゲ、シラタマノキ、

アカモノ、ミネヅワウ、ウスノキ、コケモ、

岩梅科 イハカヅミ (植物に關し詳細未調査)

六、天明三年大泥流及び鬼押出熔岩流の噴出

天明三年の淺間山の噴出は本邦火山史中稀に見る大噴出で淺間山でも有史以後の最大の活動であつた。此の歲から數年前(安永年間)に小噴出が有つた後は噴火口も殆んど埋つて、平地となり噴煙も絶えて居たのであるが天明三年五月九日、(陰曆四月九日)に噴煙を始め灰塵を飛ばし爾後噴出相續き最後の大活動を演じた八月五日(陰曆七月八日)迄八十八日を算する。

(イ) 大泥流の噴出



天明三年八月五日(晴天であつたが午前四時頃から大活動を始め、午前八時頃から十一時頃迄噴火の勢最も猛烈で東京(江戸)でも午前十時から正午頃迄は上空の火山灰のため薄暗くなつた程である。午前九時過火口から非常な大鳴響と共に熱泥流の大噴出があつて、北方群馬縣方面に大奔流となつて押し出し、熔岩の大小の岩塊岩片を交へて猛進し、裾野の六里ヶ原で大に其の廣さを増し、右翼は應桑村(現在の長野原町大字應桑)の西北二軒許の小宿(現長野原町地内)を掠め、左翼は大笹村(現嬭戀村大字大笹)の東方三軒の所に及び中央は鎌原(嬭戀村)の全村を埋没して吾妻川に突入した。泥流が吾妻川に落つると一時流水を止め、河水の逆流を起したが少時にして一瀉下流に向つて奔流し、其の勢甚だ激烈沿岸の村落四十有餘盡く其の災に罷つて居る。流出家屋實に一千〇六十六戸死者千五百一十一人を算する。今日も其の沿岸殊に峽漸の涯に於ては數米の厚さの當年の泥流の遺物を見る所がある。此の泥流層には黒褐色の所謂、吾妻式安山岩の塊を混在してゐる。泥流は非常の速度で進行し其の噴出後約四時間ばかりで午後一頃には約九十軒の下流なる埼玉縣深谷驛の東北中瀬村の利根川沿岸に達し、田畑を没すること二米に及んで居る。泥流中に混じた熔岩塊は長く内部の溫熱を保ち上州那波郡藤木(現在の佐波郡玉村町附近)に漂着したものは二十四、五日の間猶汽烟を放散したとのことである。利根川下流武藏幸手驛(現在埼玉縣北葛飾郡幸手町)の近傍では濁流が平水より高きこと一米餘に及び、利根の本流により犬吠岬から太平洋に注ぎ、支流江戸川により東京灣に入り其の餘波は伊豆の近海でも海水の汚濁を來した。泥流の速さは山崎直方博士の調査に依れば四時間に約九十軒一秒平均六、二五米である。

## (ロ) 鬼押出熔岩流の噴出

鬼押出熔岩流は八月五日に大泥流噴出の後熾熱した岩漿が數回に亘つて噴出したもので北方の山腹を被ひ山麓に達して居る。延長凡そ五千二百五十米に及び末端は數條に別れて居る。

元來淺間山の北方の山腹には約十數平方軒の地域に亘つて俗に柳(又は南木)の御林と言はれた原始林があつて、幹の周

圍約六、七米、高さ六、七十米に達する大木も少くなかつた。

此の密林は泥流と熔岩の押し出しに依つて大部分は蕩盡せられたが、鬼押出熔岩の東西兩側に一部分は熔岩樹型として密林の遺跡を止めて居る。押出茶屋附近の地中から天然木炭を産出する所もある樹種は松杉科のものが多く様である。

熔岩の溫度が能く久しき間保たれることは外國の火山で屢々實驗せられ、又近く大正三年一月櫻島噴出の熔岩で親しく經驗せられた様に、鬼押出熔岩に於ても數年の久しきに亘つて其の溫度が保たれた。即ち湯元押出(熔岩流の末端の邊)の畔から湧出する泉水は熔岩の溫度のために熱せられて温泉となり、泉を離るゝこと八軒許の大笹村の村民は之を導いて浴槽を設けて温泉を經營すること數年の長きに及んだ。

湯元押出の名も畢竟之に歸因するもので、温泉を導いた溝渠が今も猶六里ヶ原に残存する。又鎌原村に向つて流るゝ温泉の如きも三ヶ年の後迄微温を感じたとのことである。

## 附、淺間山噴火の歴史

## 一、天明三年以前の活動

1、天武天皇十三年三月(紀元一三四五年四月)是月、信濃國に灰零り草木皆枯る(日本書記)とあり、何れの火山が明かでないが淺間山の活動に由來するものと考へられる。

2、鳥羽天皇天仁元年七月より九月(紀元一七六八年十月頃)七月二十一日より(陽曆九月五日)(上野國司進解狀に云ふ)國中に高山有り麻間峯と稱す、治曆年間(紀元一七二五—一七二八)より峯中煙出で來り其後微々たり今年七月二十一日より猛火山嶺を燒き其の灰煙天に屬し砂礫、國に滿つ灰爐庭に積み國內の田畠之によつて滅亡す。一國の災未だ斯の如きことあらざるなり。稀にこれあり怪なるに依り記し置く所なり。(日本災異誌)

甲



- 3、享祿元年 (紀元二二八八) 噴火
- 4、天文元年 (紀元二二九二年) 同
- 乙
- 5、慶長元年七月廿六日 (紀元二三三五年) 噴火
- 6、同 三年 (紀元二三三八年) 同
- 7、同 十年十一月 (紀元二三六五年三月) 噴火月を踏え 熄む
- 丙
- 8、正保元年一月十三日 (紀元二三〇四年二月二〇日) 噴火
- 9、同 四年一月十四日 (紀元二三〇〇年二月 八日) 同
- 10、慶安元年 (紀元二三〇〇年) 同
- 11、同 四年二月廿二日 (紀元二三〇二年四月二二日) 同
- 12、明暦元年十月廿八日 (紀元二三一五年十一月二五日) 同
- 13、萬治元年六月廿四日 (紀元二三一八年六月二四日) 同
- 14、同 三年二月廿八日 (紀元二三二〇年四月八日) 同
- 15、寛文九年 (紀元二三二九年) 同
- 丁
- 16、寶永三年十月十六日 (紀元二三三六年十一月二〇日) 噴火
- 17、同 七年三月十五日 (紀元二三三七年四月一三日) 同

- 18、享保二年八月十九日 (紀元二三三七年九月二三日) 同
- 19、同 五年五月一日 (紀元二三三八年六月六日) 同
- 20、同 七年 (紀元二三三八年) 同
- 21、同 十三年十月九日 (紀元二三三八年二月一〇日) 同
- 22、同 十七年六月九日 (紀元二三三九年七月三〇日) 同
- 戊
- 23、天明三年 (紀元二四四三年) 大噴火

(以上小果島氏日本災異誌參照)

上記の噴火の中1、及び2、は年代古く従て回数や破裂の記事にも幾多の脱漏があらうが、3、享祿三年以後は噴火の記事も頗る精しい様に思はれる。同年から天明三年に至る迄の二十一回の噴火の年代を見るに多少規則正しい週期を示すもので申乙丙丁戊の五組に別けることが出来る。

組別	噴火回数	平均年代	平均生代順次の差
甲	二	紀元二一九〇—	七十年
乙	三	二二六〇年	五十四年
丙	八	二二一四年	六十六年
丁	七	一三八〇年	六十六年
戊	七	一四四三年	六十六年

甲の終回破裂と乙の初回破裂との年差は六十四年、同じく乙と丙とは三十九年、丙と丁とは五十七年丁と戊とは五十二年である。而して噴火の平均年代の差は各々七十年、五十四年、六十六年、六十六年である。即ち淺間山噴火の最も盛ん



なる時期は、享祿元年から天明三年に及ぶ間では、略六十三年目毎に有つたと認められる。天明三年の次は明治二十七年に大噴火があつたが此る年數差は百一年で前記平均年數六十三年の二倍に等しいものである。要するに淺間山の噴火は一時休止の状態に近かつたが近年再び活動の時期に入つたもの、様である。

三、天明三年の活動

天明三年の噴出は今日を去ること遠からず記録口碑の存するものも少くない。大森房吉博士、山崎直方學士が淺間山大變日記、淺間山大變記、天明信上變略記、信濃國淺間岳の記、地災撮要、淺間山燒開書、信濃奇勝錄、武江年表、其の他大笹村鎌原村の碑文、古老の口碑、當時の一枚摺畫等を參考として實地に淺間山を踏査して、震災豫防調査會報告第七十三號に報告せられた要領を記せば次の通りである。

五月九日(陰曆四月九日)久しい間の沈黙を破つて噴烟を始あ灰塵を飛ばした。

六月二十五日(陰曆五月二十六日)鳴動激烈なる噴出あり、噴出の汽烟灰塵は東方に靡く。

六月二十六日も鳴動噴烟、次で二十日ばかりは靜穩

七月十七日(陰曆六月)大噴出。

七月二十五日より連日鳴動噴烟

七月三十一日午前四時頃稍靜穩に歸したが山麓の裾野は既に火山岩礫を以て襲はれた。

八月一日(陰曆七月四日)午前八時大噴出がありその噴出物は北方に飛散した。

八月二日正午一回の噴出あり午後十時鳴動があつた。

八月三日午前零時山嶺火光焰々天を焦し、其の間電光閃々として屢々光を放ち轟然愈々盛にして、其の噴出物は東方に飛散し午前二時頃に至り漸く歇んだ。午後二時又一大噴出あり、激烈なる鳴動を伴ひ土地の震動甚しく、山嶺黒烟を吐き

其の間頻りに電光閃き、午後六時に至り愈甚だしく夜に入りても猶止まず、山上總て紅熾色を呈し燒石の噴出せらるゝ、狀恰も花火の如く高く時に舞上つて遂に裾野に雨下するの狀は壯絶悽絶名狀すべからざるものであつた。

八月四日噴出止まず。

八月五日(陰曆七月八日)活動其の極に達した。鳴動は宛然數萬の雷霆の鳴るが如く噴烟は多く東方に靡き、北東から南東の方向は總て暗黒で物色を辨ずることも出來ず電光頻りに天に閃き震動愈地に甚しく此の日午前九時頃より前述の如く大泥流と鬼押出熔岩とを噴出した。南麓に於ても土民の損害を蒙るもの少なからず。夜半に至り輕井澤の驛舎は燒石の墜下が原因で火を失し延燒五十六戸に及んだ。終期の大活動の際には前橋邊は元より東京(江戸)迄も火山灰に混じて長さ五糎乃至三十糎時に一米以上にも及ぶ火山毛を降らした。

此の日午後に至り噴出稍怠り之より甚しき噴出もなく、八月十三四日頃に至り山麓の村民も各々其の家に歸つた。

三、天明三年以後の活動

享和三年五月	(紀元二四六三年)	同	四十四年五月	(同 二五七一年)
文化十二年正月	(同 二四七五年)	同	大正元年十二月	(同 二五七二年)
明治二年九月	(同 二五二九年)	同	二年六月	(同 二五七三年)
同 八年六月	(同 二五三五年)	同	八年三月	(同 二五七九年)
同 十二年九月	(同 二五三九年)	同	九年十二月	(同 二五八〇年)
同 二十二年十二月	(同 二五四九年)	同	十年一月より六月	(紀元二五八一年) 大噴火
同 二十七年四月より六月	(紀元二五五四年) 大噴火	同	十一年三月	(紀元二五八二年)
同 三十三年一月より七月	(紀元二五六〇年)	同	昭和四年九月	(同 二五八九年)
同 四十二年一月より十二月	(紀元二五六九年) 大噴火	同	五年六月	(同 二五九〇年)
同 四十三年十月	(紀元二五七〇年)	同	六年七月	(同 二五九一年)



等に噴火爆發があつた。

附 浅間山噴火和讃

歸命頂來鎌原の

月に七日の念佛を

由來を委しく尋ねれば

天明三年卯の年の

四月初日と成りぬれば

日本に名高き浅間山

俄に鳴動はじまりて

七月二日は鳴強く

それより日増に鳴ひどき

砂石を飛ばす恐しさ

つひに八日の巳の刻に

天地も崩るるばかりにて

噴火とともに押出し

吾妻川邊に銚子迄

三十二ヶ村押通し

家数は五百三十餘

人間一千三百餘

村々あまたある中で

一のおはれは鎌原よ

人畜、田畑、家屋迄

みな泥海の下になり

牛馬の數を數ふれば

一百六十五頭なり

人間數を數ふれば

老若男女諸共に

四百七十七人が

十萬億土に誘はれて

夫に別れ子に別れ

あやめもわかぬ死出の旅

残りの人數九十三

悲しみさけぶあはれさよ

(中曾根都太郎)

七日七夜の其の間

飲まず食はずに泣明す

南無や大悲の觀世音

助け玉へと一心に

念願したるかひありて

結ぶ縁しもつきはてす

隣村有志の情けにて

妻なき人の妻となり

主なき人の主となり

細き煙りを營みて

泣くく月日を送わども

夜毎く泣聲は

こんばく此の土に留まりて

子供は親をしたひしか

親は子故に迷ひしか

悲鳴のこゑの恐ろしさ

夜毎くのことなれば

花のお江戸の御本山

東叡山にあひそして

聖りの救ひを乞ひしかば

數多の僧侶したがへて

ほどなく聖りも着給ひ

施餓鬼のだんを設くれれば

残りの人々集りて

皆諸共に合掌し

六字の名號唱ふれば

聖りは珠數を瓜ぐりて

御經を讀誦なし給ふ

念佛施餓鬼の供養にて

こんばく無明の闇もはれ

彌陀の淨土へ導かれ

蓮のうてなに招かれて

心のうちも開かれて

泣ぐえ止みし不思議なり

あはれ忘れぬ其の爲に

今で七日の念佛は

來世に傳はる供養也

つゝしみ深く唱ふべし

南無阿彌陀佛あみだ

### 六、四阿山的岩 一名屏風岩

位置 的岩岩脈は上信國境の吾妻山の南麓、約一軒の位置にある的岩山の頂上及び其處から吾妻山々麓に點在して居るもので鳥居峠から國境線に沿うて「をね」傳ひに登るを至便とする。鳥居峠から約二軒の道は傾斜が緩やかで附近一帶落葉松の植林であつて特別の登山路でなく防火線と思はれる小徑であるが容易に登ることが出来るがそれからはいよゝ傾斜が急になり熊笹も多く生じて居る植林は的岩山の頂上にまで及んでゐるが「をね」の西側のものは大きく東側のものは未だ一米前後のものである。的岩山の頂上は急坂になつた所から約二軒結局峠から約四軒の所にある。

岩脈の規模

1、主岩脈 岩脈中最も長く又高さも高いもので一大屏風の如く又一大防火壁の如く屹立して居る長さ百九十米東側で高さ二十五米三十纏である。このものは北二十五度東の方へ走つて居て横に發達した節理の爲恰も石垣の如く割目を生じ且岩脈の大部が八十度西へ傾いて居る爲節理の一部は西側へ大塊のまゝ、抜け落ちて居る隨つて上面も高低の起伏をなし中央に二ヶ所と其の兩側に夫々一つの都合四ヶ所高くなつた場所がある最も高く見える所は中央の二ヶ所の内北側のもので約二十米三十纏あるが之は地盤が高い爲めで實際露出部の地上よりの高さは其南側のが最も高く約二十五米三十纏である。

岩脈の幅は部分によつて多少の相異があるが狭い所で二米、廣い所で四米九十纏普通の所で二米五十纏である。中央の



北の高く見える部分の東側には、地上より三米五十糎の位置に直径一米の圓形の窪みがあるが、之は岩脈の迸出當時の母岩にかゝる形の堅い岩塊が存在して居た爲岩脈を生成した岩漿が凹形に其の部を避けて凝固し後に母岩の堅い岩塊は母岩の風化浸蝕に伴つて轉落し此處に凹形を残したものと思はれる。之が傳説によると握飯を打ちつけて凹ましたのだと云はれて居る。

2、南岩脈 主脈から約百米を南に離れた所に存在するもので長さは約六十米、走向は北三十度東であつて、主岩脈と之とを連結すれば直線でなしに半徑の非常に大きい圓の弧の様子をして居る。傾斜は西へ約八十度であるから節理によつて落石がやはり西側に多い。幅は最小三米、最も廣い所は六米五糎であるが、高さは主岩脈より低く東側で四米、西側では地盤の關係で十四米である。

3、北岩脈 主岩脈から北に約四百米離れた位置に存在するもので風化が甚しく奇形に浸蝕され又轉石が多く長さは測定困難である。中には恰も地藏尊の如き様子をなせるものもある。走向は北二十度東である。

成因 的岩山にはもとかなり厚く熔岩塊火山灰の堆積による集塊凝灰岩があつて岩脈を現在の上部よりも更に高く包んで居たものと思はれる。此の凝灰岩中に生じた一つの長く延長をもつた裂隙中に吾妻山を構成する岩石と同一の岩漿が迸出して來て其の儘冷え固まつて複輝石安山岩の岩脈が出来たものと思はれる。かくして出来た岩脈は其後周圍の凝灰岩が風化浸蝕を受けて崩壊したことによつて現在の如く地表に高く露出するに至つたものである。

岩脈上の植物 岩脈は既に長い間地上に露出して居たので其の岩上には種々の樹木が生育してゐる中には昔此の附近一帯に繁茂して大森林を構成して居たと思はれる。白樺クヌギ等あり、又南岩脈は地上の露出部が低いので樹木の繁茂にさして困難でなかつた爲めか地上十糎の邊の太さ二十糎の白樺が生じて居り現在は腐朽して居るが地上十糎の邊で圓三十五糎のもの一本一米十糎のものが一本存在して居る。一般にミヤマホツツジ、レンゲツツジ、ノリウツギ、ミヅナラ、オホ

カメノキ、ハクサンチミナヘシ、クロゴケ等が生じ南岩脈には此の外アカモノ、イハカガミ等が元氣に生育して居る。

(中曾根都太郎、尾崎良作兩氏)

### 七、淺間山の躑躅ヶ原

一、位置 長野原町大字應桑字かいらき及砂塚(淺間山東麓淺間牧場及附近一帶)

二、地積 三百萬坪に亘る。

三、交通 草津電氣鐵道國境驛より二軒、沓掛街道縣界より東へ百米より始まる地點

四、躑躅 樹種は蓮華躑躅にて赤城山に在るものと同種、然れども赤城山のものに比すれば樹齡若くして倭小、其の高さも一米内外、株を成して生ず。

五、景觀 淺間山を背景として展開せる此の躑躅ヶ原の六月中旬より下旬に於ける眺望は其の雄大壯觀艶麗、蓋し天下其の比尠なかるべし。

六、觀客 草津電鐵にて昭和六年より之が宣傳をなしたる結果、群馬長野兩縣人はいふに及ばず京濱地方よりの來觀者次第に其の數を増し、昭和九年草津電鐵に依るもの約五千五百、自動車に依るもの二千五百、徒歩のもの二千と推算せらる。

(嬭戀村委員報)

### 八、澤渡穴小屋

別名 仙人窟、千人窟、蝙蝠穴

史跡、名勝、天然記念物







## 九、浅間山麓の熔岩樹型

◎現 状 熔岩樹型は樹木の幹部等が火山から噴出する熔岩其の他の噴出物に包まれ、木質部は焼盡し、又は腐朽し、周囲の熔岩が元の樹木の形態を残して空洞として存在するものである。浅間山の北麓鬼押出熔岩流の東西兩側に此の溶岩樹型の數非常に多く、又分布區域も廣大にわたつてゐるのでこれを次の四區に分つ。

第一溶岩樹型區 嬭戀村大字鎌原字モロンコ 一〇五三ノ二六所在

第二溶岩樹型區 同

第三溶岩樹型區 同

第四溶岩樹型區 嬭戀村大字鎌原 一〇五三ノ二九所在

第一溶岩樹型區は鬼押出と上の舞臺との間、標高一四八〇内外の森林中に在る。附近一帶にはアカマツ、ヒメコマツ、カラマツ、ヒメヤシヤブシ、シロバナシヤクナゲ等の喬木乃至灌木及びガンコウラン、ミネズワウ、コケモモ等の倭小灌木密生して樹型を被ひ、或ひは全く埋めつくした處もあつて調査は頗る困難である。こゝでの實測數は二十七箇其中深さ七米のものがある。これは浅間山溶岩樹型中深いものである。此の樹型は口径東西五〇糎、南北三〇糎穴の入口より二三〇米は北五〇度東へ四五度傾き、下部は垂直に近い。又此の他口径四〇糎、深さ五米で傾斜せるもの、口径四〇糎、深さ一、二〇米で傾斜し、三又の枝を出せるもの等もある、其の他は多く深さ二米前後に埋没してゐる。中にヒカリゴケの生ずるものもある。

第二溶岩樹型區は第一區より東北、下の舞臺の西北自動車専用道路より三五〇米程西に入りたる處にあつて、樹型の實

測數は四十六箇其のうち深さ四米に達するもの六、箇最も深いもので四・四〇米である。穴の形には圓形なるものと楕圓形なるものがある。又縦穴もあれば傾斜して居るものもある。多くは上方即ち浅間山頂側に溶岩塊がある。其のうち最も形態の面白いのは別表の二十九號で、樹幹に流れ當つた溶岩が幹を圍んで流動したもの、如く、溶岩が流れ來た方向に高い縁を作つて突出し、丁度肘掛椅子狀を呈して居る。岩石は赤褐色で、高さは八五糎端の薄い所で三〇糎程ある。穴の深さは三、二〇米である。又十九號の樹型の上方は〇、五米の距離に二箇相對してゐる縦穴であるが、下部は合して一つになつてゐる、想ふにこれは二枝に分れた一本の樹から出來たものであらう。これを夫婦孔と云ふ。比の他の樹型中傾いてゐるものは八〇度前後であるが最も傾いてゐるものは十六號で六〇度である。

入口に生じてゐる植物としてはガンコウラン、クロマメノキ、ミネズワウ、コケモモ等が多いがこの他ノリウツギ、ミヤマナカマド、シロバメシヤクナゲ、シラタマノキ、赤松等である。

第三溶岩樹型區は下の舞臺の東北自動車専用道路の東北側に分布してゐる。下の舞臺の北方には幅約三百五十米に亘つて天明三年の泥流溶岩等が下の舞臺に支へられて流れなかつた所があり、此處には樹木がよく茂つて居る。第三區での實測數は四十八箇第一號は口径東西七五糎、南北六〇糎、深さ二・二〇米で北一〇度西へ八〇度傾斜して居る。入口にはイタドリ、クロマメノキ等が生じて居る。最も深いものは別表の二十號で六・二〇米で北四〇度東へ七〇度傾くのを兒見る。しかし一般に埋まりたるもの多く概して二米以下である。此處は樹型區中最も荒寥たる處で大きな樹木少く、クロマメノキ、ミネズワウ等の倭小灌木及びイタドリ等が多い。又四十號には底部にヒカリゴケが立派に生育してゐる。

別表中十八號は上方に灣曲してゐる溶岩塊があり、樹型は二又し其の支幹は口径東西二〇米、南北四〇米で深さ四〇糎の處で主幹と合してゐる。三十六號は南四度西へ五〇度傾いて此の區域の樹型中最も傾斜してゐるが、これは三十七號の支幹のやうである。



更に此の區の樹型の上方にある溶岩塊の大なるもの及び其の位置樹型で番號にて示す左の如し。

- 七號(巾一・五〇糎) 十三號(巾四米) 十五號(巾二・一〇米) 十六號(一・六〇米、高さ五五糎でや、肘掛状を呈す) 二十一號(高さ九〇糎、巾一・五〇米)

第四熔岩樹型區は鬼押出の西側で標高一三三〇米附近にある。鬼押出の西端に最も近いもので鬼押出迄約百米である。實測せるもの七十五箇此の第一號は氷穴と稱し底に萬年氷あり。東西一・四五米、南北一・八〇米、深さ四・二四米で北東へ八〇度傾いてゐる。此の區中で第一號より約一軒下方には深さ六・四〇糎、口径一米の大きなものがある。底には又常に消えざる氷雪がある。此の樹型の上部二・一〇米は北二〇度西へ八〇度傾き、それより下方は同方向へ六五度傾いてゐる入口にはクロマメノギ、イハヤギナ、イハカガミ等生じ上方にやゝ離れて熔岩塊がある。

尙ほ此の區中最も傾きのあるものは第十七號で西へ六五度である。又底部にヒカリゴケの生じてゐるのは所々に認められる。

◎生 成 淺間山麓には熔岩樹型が甚だしく多く且つ廣大な區域に涉つて分布して居るが、何れも其の周壁は主として集塊熔岩で圍まれ、之に火山彈や熔岩塊も混じて恰も石垣で圍まれた古井土の様になつてゐる。樹型は概して縦穴で第一區のものでは、北へ第二區では北東へ、第三區では北々西から北東へ第四區のものは西北へ傾いてゐるものが多い。即ち淺間の山頂から放射狀に熔岩が流出したと思はれる方向に傾いて居る又入口の上方即ち淺間山山の噴火口側には多くは熔岩塊を止めて居る。

有史以來淺間山が最も盛んに活動したのは天明三年であるが、この活動以前に淺間山の北方の山腹には「ナギの御林」と呼ばれた廣さ十數平方軒にも及ぶ。主に松柏類から成る大森林であつた。この密林の大部は天明三年中央火口丘から主として現在の鬼押出の方向に流れ出した大泥流、其の直後噴出した集塊熔岩流、熔岩塊、火山彈、天明三年最後の活動として

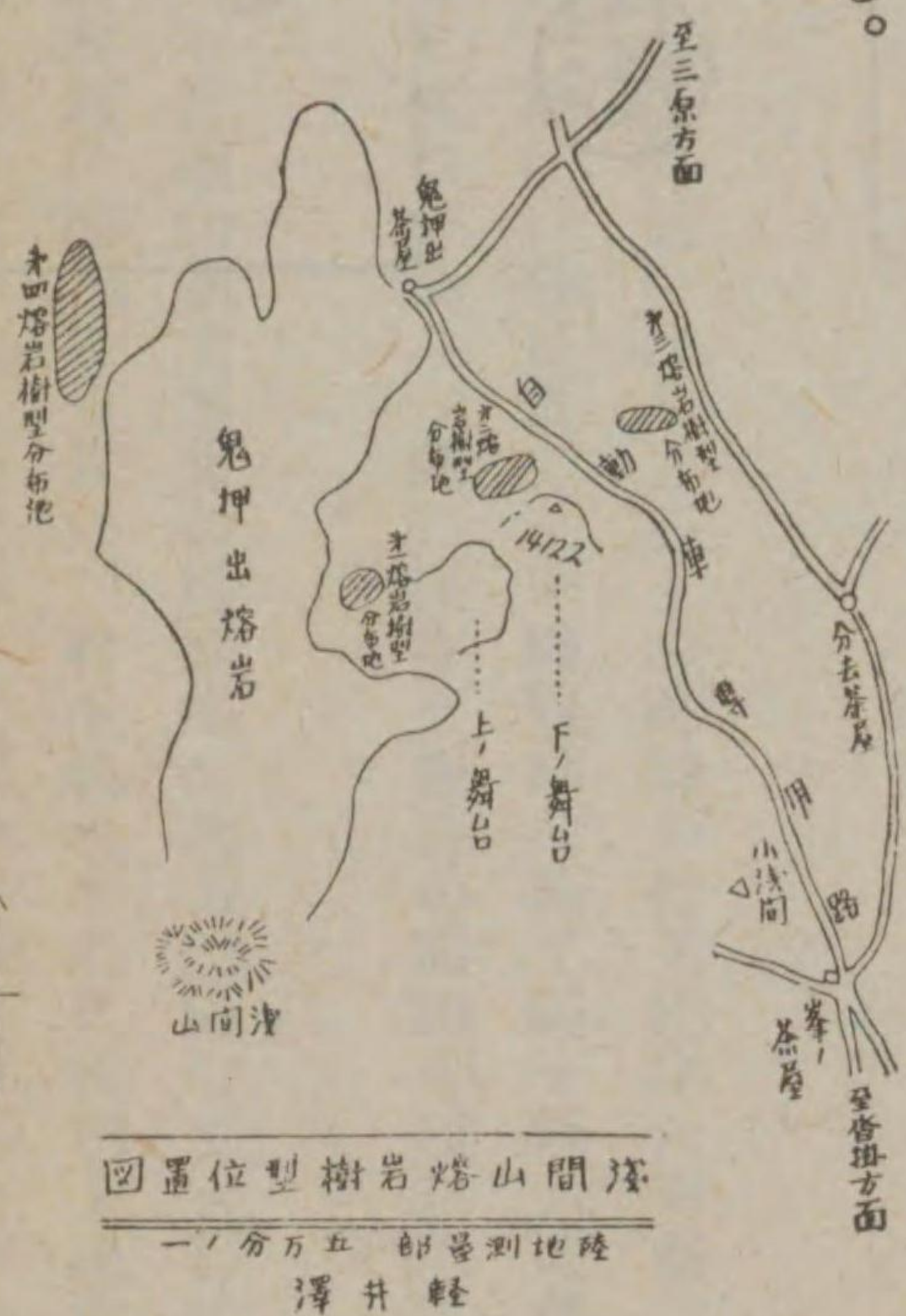
噴出した鬼押出岩等によつて蕩盡されるに至つたのであるが、鬼押出岩の東西兩側に熔岩樹型として一部名残を止めて居る。この區域の樹木特に大きな樹幹は噴出の熔岩を支へ熔岩は之を取圍み其處に樹幹の型を遺すことが出来たのである。この熔岩流の方向は鬼押出東方では既にこれ以前に出現した熔岩の臺地である。上下の舞臺によつてさへぎられ、熔岩はこれを圍んで流下し第一區では北、五十度東、第三區では北々西乃至北東第四區では殆んど北西で各區の樹型の傾斜せる方向と大體一致するもつとも地盤の起伏の關係も様々であり樹木の枝の方向も雜多であるから、樹型中には熔岩流の方向と一致せぬ方向に傾いてゐるものもあり、枝の部と思はれる樹型の傾斜は決して一定して居ない。樹型の上方即ち淺間山頂の方向にある熔岩塊は流下の際樹幹に支へられて其處へ停止したものである。この熔岩塊は穴に接した側に樹幹に相當する凹みを有してゐるものが多い。之は未だ固結しない熔岩が樹幹に支へられ之を取圍んで出来たものである。この最もよい實例が肘掛椅子である。熔岩樹型區が熔岩の岩質は主に複輝石安山岩である。

鬼押出熔岩は天明三年にかうした活動があつて後溢流したものである。  
(別表略)(中曾根都太郎氏、尾崎良作氏調査)

### 一〇、塩原太助と松ヶ茶屋

鹽原太助施行の「松ヶ茶屋接待茶釜」に就いては既に郡誌に掲載有之候も利根郡誌に中山峠接待茶の關係記事を見付けたるにより左に抄録す。(郡誌第三編第十三章第六項、第八一四二頁参照) 中山峠接待茶を出せしに就いては原澤太七(現戸主原澤祐次郎)が世話したる事左の文書にて知らる。

史跡、名勝、天然記念物



淺間山熔岩樹型位置圖  
一、五〇〇〇部測地陸  
澤井 經



(紙表)

天保六乙未年  
茶代通  
原澤太七殿 鹽原太助

末四月六日

一金壹兩也

相渡シ申候



(以下略す)

(紙表)

天保六年  
茶代金渡通  
未四月 鹽原太助代 原澤太七

一金貳分也

右ハ鹽原太助殿ヨリ茶釜貰受候ニ付置場普請金儘ニ受取申候以上

午十二月八日

覺

茶屋久兵衛

一金壹兩也

右ハ當未ヨリ來ル亥ノ年迄五ヶ年ノ内茶代金本年分儘ニ受取申候以上

未四月

中山村反峠 茶屋久兵衛

覺

一金壹兩也

右ハ五ヶ年季茶代金當年分儘ニ受取申候以上

申四月

反峠 茶屋久兵衛

(以下略す)

(高山村委員報告)

### 一一、鏜々ヶ淵の甌穴

高山村大字尻高の鏜々ヶ淵には其の名に相應はしい深潭がある。そして其處には水と石との亂闘の結果出來た奇怪な甌穴 (Pot hole) が有つて人目を惹いて居る。此の甌穴は深さ九十五糎、徑は口部に於て三十糎腹部に於て四十糎、底部に於て二十糎の中膨らみの圓筒形を成して居り、底部に近い一側に小さな破口があり、底には徑五糎許の圓礫が残存して居る。

此の鏜々ヶ淵のるあ位置は、中山盆地形成に當つて、小野子、十二ヶ岳兩山間北斜面の扇狀地が北方に向つて大發達をなして中山盆地を堰塞した地點である。急湍をなす川底の安山岩質凝灰岩の節理を目當に、村を流れる名久田川上流の水は其の勢を逞うして其處に圓礫を回轉すること幾十百年、遂にこの様な穴を作つたものである。現今の關東平野一帯の土

史跡、名勝、天然記念物



地の隆起に伴つた此の川も岩石の軟弱部を破壊侵蝕して喰ひ下り、今では其の穴は川岸の大きな岩石の端に高く取残される點、腹部の膨らんで居る點共に人目を惹くものであり、穿穴作用の終焉に就いては河床の移動か、破口の出來た爲めか詳かでない。尙現河床には規模のかなり大きいのを作りつゝある、(郡誌第三編第十八章第四節一四〇七頁参照)

(中山尋常小學校郷土調査部報)

### 一一一、高山村の萬葉歌碑

昭和九年十一月の陸軍特別大演習に際し、天皇陛下本縣下に行幸させ給ひし光榮を記念すべく、縣神職會にては萬葉歌碑建設の計畫を立てしが、其の指定地の一たる高山村は之を村の記念事業として實施の委員を擧げ全村民共同して進行に勞力し、遂に歌碑を中山校庭に建立す。

赤見山 草根 刈り除けあはずがへ

安可見夜麻久左禰可利會氣安被須賀倍

あらそふ妹しあやに愛しも

安良蘇布伊毛之安夜爾可奈之毛 (萬葉集 十四)

書は、本郡出身、官幣大社伏見稻荷神社宮司高山昇氏なり。

尙、之が舊蹟としては赤見山の西北一本松附近にも石碑を建てたり。

(高山村委員報)

### 一三、薙刀坂歌碑

中山峠ハツツケ坂(薙刀坂ともいふ)附近に、昭和九年十一月、高山村記念事業の一として、廻國雜記所載「薙刀坂の歌」の碑を建てたり。

杖をだに重しといふ山こえて

薙刀坂を手振りにぞ行く

此の地は舊三國街道筋にして、小野子、子持兩山の間位し、伊香保澁川利根川中山盆地等を眼下に見、赤城榛名谷川白根男體等の山々の展望宜しく、眺望絶佳の地なり。其の近くに鹽原太助接待茶屋「松の茶屋」の舊蹟あり。

(高山村委員報)

### 一四、行澤の水牢

岩島村大字矢倉字行澤八五番地(縣道より五〇米)脇屋新次郎氏所有の畑中に現在一立方米程の石存すこれ水牢の跡なり。

口碑に依れば眞田伊賀守領有時代、年貢の滞りたる者に對し處刑の一方法として、此の水牢に投じたるものなりと言ふ現存せる石は其の牢の中にありたるものにして、囚人はその上に休息せりと傳ふ。尙その上に上りたる者には重い疫病にかゝるとして誰も手足を觸れず。

(岩島村委員報)

### 一五、獅子の牢の瀧



岩島村大字三島根古屋附近の吾妻川の水全量が瀧となつて落てるが、これが獅子の牢の瀧である。陣出橋よりこれを望めば全景一望の中にあり、川原に下りて近く仰げば大岩を中にして幅五〇米、高さ四米、大小の瀧はさながら獅子の吼ゆるが如く瀧壺は白波を立て、渦をまき飛沫は立昇つて虹となりて如何にも壯觀である。

春は霞の中にいづこともなく囀る鶯の聲も長閑に秋は兩岸の紅葉水に映えて美しく夏は青葉がくれに咲く岩つゞじ、藤白百合など水に影を寫し、冬は枯枝に時ならぬ花を咲かせて一入の見所があり、四季をりりりのあたりの眺めも又あくことがない。

古老の言に依れば獅子の瀧の裏面には大きな岩穴があつて、水の少い時は空洞となり水が増せば淵となると言ふ。昔さながしが上から大木を流して来て一旦此の淵に入るとなか／＼流れ出さないで非常に苦心をしたとの事である。文化年間の頃或時猪が一匹山から出て来て、獵師等がこれを見つけ追ひ廻した所とう／＼獅子の牢の瀧壺の中に落ち込んでしまつた。獵師等は今出るかも浮きあがるかと待つてゐたが、遂に猪は出て來なかつた。多分それは猪が水をくぐつて瀧の裏の空洞に入りたるまゝ出なくなつたのであらうとの事、それより獅子の牢の瀧と言ふ様になつたとの事である。

(岩島村委員報)

## 一六、仙の瀧

岩島村大字矢倉行澤(縣道より約一軒)の山中にあり高さ約三十米冬期は水量減少して一面凍結し、て三島唐堀よりこれを望めば、あたかも白布を懸けたる如し。近づきてこれを觀すれば少量なる水は飛沫となりて四散し、或は大水柱の内側を落下する音を聽くのみ、然れども盛夏の候となれば水量増大して一篠の大瀑布と變る。綠樹の間に陰顯する遠望もよく、近よりて涼氣を滿喫しつゝ、壯觀を眺むるこそ一入の快味あり。

(岩島村委員報)

## 一七、田中の大藤

岩島村大字厚田田中、一場嘉兵衛氏の屋敷稻荷附近にありて周圍二米三〇、長さ凡そ五〇米地上一米の所より五本に分れ近邊の櫻杉の大木に巻きつけて上り枝より枝に逼り杉より櫻、櫻より杉に走りたる様はあたかも數十匹の大蛇がこゝに集りて相争ふに似たり、開花期には杉櫻の大樹花にて包まれ一つの森はすべて藤の花に化したる一大美觀は形容すべき言葉を知らず。

(岩島村委員報)

## 一八、金井廢寺の礎石と古瓦

「史蹟名勝天然記念物」第九集第十二號所載 (相川龍雄氏の論文抄出)

一、はしがき (略す)

二、位 置

金井廢寺址は吾妻郡原町字金井小字市敷にある。その位置は原町の東方約九丁、吾妻川の清流を隔て對岸の眺望絶佳の臺地である。

背後には榛名山系の高き丘陵を負ひ前面には吾妻川の沃野に面した、山脈の巒の裾たる高臺の平地である。

一ノ宮神社を含む北部及び西部に廣い約二町餘の面積の臺地に、礎石が散在して居る。この礎石に就ては昭和四年發行

史蹟、名勝、天然記念物

二五三



の吾妻郡誌に「一ノ宮神社の西南接壤地の畑を藏屋敷といふ。平布目瓦、竹瓦、花の瓦破片を出す。造出を有する柱礎の石六個、畑の周囲に散在せり。耕作者の説によれば畑中に尙大石を存し、又壤土の下は一面に圓石を敷きつめあり」と記してある如く六個の判然たる礎石を指摘し發見して居るのであるが、今回は新井、金澤兩氏の調査により二十六個の礎石が明瞭になつたのである。兩氏は是等の礎石の散佚を憂へて一個毎に番號を書してその存在を明らかにし識者の注意を喚起した。

三、礎石の分布

二十六個の中十六個は畑と畑との境や畑と宅地との境に在り、一個は小川の物洗場に在り、三個は小川の石垣石となり四個は一宮神社後ろの土止石となり、一個は一宮神社鳥居の臺石、一個は念佛供養塔の臺石となつて居る。

以上の如く著しい住民の礎石利用と土地の改作が認められ、土壇の跡も無く、到底寺院の建築プランを知ることとは出来ぬ。只比較的原状に近く礎石の存在するのは、畑の境界線上のもの(番號一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、二五、二六、一四、一五)と考へられるが、それにしても、横倒しのもの轉覆せるもの、等悲惨な状態で、如何なる建築物の礎石か全く知る術もなく遺憾の極みである。

四、礎石の實測

全部が柱座の上に整然となつて居ると實測に便利であるが半ば土に埋没して居るものもあり、正確に實測せんとするには相當困難である。次に示すものは新井・金澤兩氏の實測を基礎として私の直接調べたもので、大體に於て正確の積りである。

番號	現 狀	位 置	造出し柱座直徑	同 高	備 考
1	現 狀	松井與平宅地西北馬道	一、尺五	〇、一、二	2 同 3 同
					一、六〇 〇、〇、八

6	同		一、六〇	〇、〇、八	
5	畑境				下向の爲 實例不能
4	同				右同
3	同				右同
2	同				16 同
1	同				17 小川物洗石
					18 岩井飛地西北隅
					19 一宮神社々殿裏
					20 同
					21 同
					22 同
					23 一宮神社表鳥居臺石
					24 十王堂址供養塔臺石
					25 畑境
					26 同

以上二十六個の外に一三、一四の附近にそれと推定せられるものが二個あるし、其の他巨石が散在して居るから尙今後充分に發掘し調査したならば或は原状の儘の礎石が發見されるかも知れない。

礎石の質は安山岩であるが柱座の缺損せずに能く原状を保持して居るものは一、二、三、四、八、二五等である。けれども「表」の柱座の「高」の變化の甚しいことは、如實に礎石の缺損狀況の甚しさを物語るものである。この「高」の高低に逆比例して柱座の直徑が左右される。

私はこの礎石群中で直徑一尺五寸以上のものと直徑一尺三寸―四寸のものとの二つの歴然と相異なる大きさの範疇を認めることが出来る。

前者は後者よりも數多く十七個である。前者の礎石の柱座直徑と高とを調べその原状に近い大きさを求めることが最も



緊要なことであるが、先づ是等の礎石を表にて整理して見ると次の如くである。

高	一尺五〇(直徑)	一尺五五	一尺六〇	一尺七〇
礎石の數	一	二	一	二
高	〇、一二	〇、〇四	〇、一二	〇、一〇
礎石の數	一	二	一	二
高	〇、一〇	〇、一二	〇、一〇	〇、一二
礎石の數	一	二	一	二
高	〇、〇八	〇、〇四	〇、〇四	〇、〇四
礎石の數	一	二	四	五
高	〇、〇四	〇、〇四	〇、〇四	〇、〇四
礎石の數	一	二	四	五

この群の柱座の高は最高〇・一二で之が最もよく磨滅されずに保存されて居るもので直徑は一・五〇、一・五五、一・六〇の三者あり、二五、二〇の三つの礎石である。

最小の高、〇・〇四は直徑に於て逆比例し、一・七〇といふ大きさを示し、その磨滅の甚しさを物語る。だから大體に於てこの群の礎石は創造當時直徑一尺五五、高〇・一二になして造出しを工作したと斷じて差支へあるまい。次に後者の群を見ると次の如くである。

高	一尺四〇(直徑)	一尺三〇	〇、一〇	〇、一二	〇、一二	〇、〇六
礎石の數	一	二	一	二	一	一

高二寸が最高であり原形は直徑一尺三寸近くと斷定される。

以上の二つの柱座直徑高の共に異なる礎石群はその建築物の全く別個體なることを啓示して居るものであらう。塔の心礎の發見されない今日輕々しく二者の内孰れかと塔礎石ならんと推定する妄舉は斷じて許されない。

五、發見の古瓦  
礎石の數多く存在して居るにも拘らず、古瓦の發見は極めて微々たるもので、發掘を行はなければ表面採集のみでは今後の發見は望みが稀薄である。

金澤佐平氏は畑境界に於て圖に示した鍔瓦斷片四個を採集された。(圖は略す)

(A)は鼠色を呈した焼成の堅牢な胎質で直徑四・五糎、厚三・二糎、小葉を有する八單辨の雄勁華麗なもので中房に九顆の房子を擁して居る。連辨の尖端は反撥し斷面に見る如く斷面極めて彫刻的なもの、奈良前期の作品たることは誰しも肯定出來よう。かかる文様手法の瓦は上野國分寺址よりは一個も發見されて居ない。

(B)は惜しいことには一單辨のみの殘存であるが(A)よりも更に雄勁な連辨で關東に珍らしい飛鳥朝の餘韻を残して居る作品である。恐らく八單辨であつたらう。

(C)は小葉を有する連辨で深く溝を成し、中房の小形な彫刻の著しいもの、火中した爲めに胎質は脆弱、赤褐色を呈して居る。八辨と思考され半徑六糎弱、奈良前期を下るまい。

(D)は前記三者と異なる自由濶達な文様で、木葉の如き連辨を二糎餘の間隔を置いて配して居る。中房も大きく、たゞ土を盛つて圓く作つて居るのみである。半徑七糎、火中した爲めに赤褐色を呈して居る。國分寺創建時代のものと思考する宇瓦はこゝでは圖示し得なかつたが三條の重弧文の長さ三五糎餘のものが一枚發見されて居る。重厚の線の深くして太い手法で、奈良前期のものである。

平瓦は灰白色を呈し表面に籬目文を捺出して居る。幅六・五糎、長一四糎の大形のものである。裏面には一面に布目が認められる。六・五糎は六・五寸、一四糎は一尺四寸の誤ならんこの外に半圓筒形の鼠色を呈した硬質の瓦斷片が發見されて居る。

六、其他の出土品  
古瓦の散布の著しい畑で、私共の調査當日も金澤氏はこゝで平瓦斷片數枚を得られたが、古瓦と同時に底部に糸尻を有する赤味を帯びた素焼土器を收得された。

更に氏の示教により附近宅地の人がその西部の柿の木の下より十年前發掘したと稱する古墳時代の盃の如き直徑五、六



寸の深皿を見學した。

他に類例ある如くこの廢寺趾にて當時用ひた土器と推定される。

七、結語

金井廢寺に關する傳説口碑の何物もなく、たゞ村人は光明寺の趾と呼稱して居るのみである。附近の遺蹟としては一宮神社に圓墳が一基あり、尙數町離れた下郷に雄大なる横穴式石槨を有する圓墳がある。

吾妻川は不言不語寺院の榮枯盛衰をよそに不斷の溪聲を山脈に送つて居る。

以上概略的に金井廢寺を述べたが、國分寺以前の創建と、礎石及び古瓦によつて推定されるこの山間の寺院は關東の上代文化史上に大きな波紋を投ずるものである。

今後の組織ある發掘と調査は更に驚くべき發見をもたらすこと、信じてやまない。

擱筆するに當り種々示教を下されし新井、金澤兩氏に滿腔の感謝を捧げる。(昭和八・一〇・二〇)

新井信示附記。相川氏調査後、都所房充松井梅吉兩氏は松井氏宅地の一部を發掘して文字瓦破片一片と鏡瓦破片數個とを拾得したりといふ。(新井信示)

一九、大津附近の五輪群

五輪塔或は單に五輪ともいふ、密教に於て建てられた塔婆の一種である。顯教の卒塔婆は佛徳を顯揚し或は佛舍利を安置する爲に建てられたものである。密教に於ては大日如來の三昧耶の形として五輪を墳墓の上に建てられたものである。さて五輪の形式は最頂を如意珠次を半圓次な三角次を圓次を方法に形どつた五級の塔にして佛徳でいふ所の空、風、火、

水、地の五大をなぞらへたものである。

五輪塔は平安時代に始り鎌倉時代より室町時代に最も多く作られたが、その形式古くは空珠が蓮華の蕾に似て第三級の屋根に反りが無い、時代が降るに従つて屋根の反を増し、即ちその勻配が急に成る。又古くは水輪の中央にのみ梵字を書いたが後期になると上下各級五箇共夫々梵字を書き、且年號願文等の銘文を刻む様に成つた。故に時代を判斷し、郷土の研究とするには貴重な一資料である。

然し未だ之に着眼するもの誠に少く、従つて其の保存上頗る遺憾の點が多く。石垣の石となり、庭の石燈籠の風袋と變る有様は見るに忍びない。ここに大津附近に於ける其の分布表を造り有志篤志諸賢の御援助を乞ひ、其の保存方法を促すと共に郷土研究の一助たらしめ度い。

五輪分布表

- (一)長野原小學校ノ敷地ヨリ明治四十三年昭和七年ノ兩度ニ出土セシモノ十一基、水珠ニノミ梵字アルモノモアレド多クハ文字ナシ。
- (二)坪井ノ丸小山ニアルモノ、坪井縣道ヨリ興喜屋道ニ沿ヒ二町許ニシテ古塚ラシキ丸小山アリ其ノ小山ニ五十五六ノ五輪各輪散亂ス(基數ハ如意珠ノミ計算シタリ以下モ同ジ)
- (三)勘場木ノノウガ墓(俗稱昔ハ修驗者タイプ)ニ基
- (四)勘場木堂ノ下ニ三基
- (五)二軒屋ノ墓地ニ二十五六散亂ス
- (六)長井ノ五輪畑ニアルモノ十二基
- (七)洞口下ノ原ニアルモノ三基

史跡、名勝、天然記念物



(八)草木原ニアルモノ三基

以上ハ大字大津三十町許ノ間ニ散點ス

其ノ他長野原町内ニアルモノヲ記ス

(一)羽根尾羽尾城下ニ二基海野長門等

(二)羽根尾宗泉寺域内ニ五六基

(三)與喜屋外輪原ニ古塚アリ此處三基

(四)與喜屋、比丘尼塚ニアルモノ五基

(五)長野原櫻井茂吉ノ敷地ヨリ出土セシモノ二基

(六)應桑狩宿朝比奈ノ塚ニ三基(板碑三板)

(七)川原畑三ツ堂ノ庭ヨリ出土セルモノ五基

其ノ他ノ屋根ト稱スル所ニ建テラレタル五輪様ノモノアリ。

(一)大津立石塔ノ尾根ニアルモノ一基(明治十九年マデ此處ガ草津街道)

(二)與喜屋下田ニアルモノ塔ノ尾根ニ一基

(三)林、久森峠ニアルモノ一基

(市村喜平)

## 二一〇、吾妻郡に於ける板碑の調査

はしがり

板碑は石塔婆の一種で、關東地方には特に多く、至る所の路傍や墓地にある板狀扁平の石碑で、死者追福の爲に建てられたものである。板碑と呼ばれるのも其の形狀が扁平板狀をなして居るからである。

板碑は鎌倉時代に始まり、吉野朝から室町時代にかけて最も盛になり、戰國時代に至つて衰廢したものである。故に多くは随分の年代を経て居り、郷土の歴史研究には貴重な資料である。

然し地方では未だ之に着眼するものは誠に尠く、従つて其の保存にも遺憾の點が多いので、之を實地に調査研究して有志憂士に示し、其の完全な保存を促すと共に、郷土研究の一助たらしめやうとするのである此の研究は素より完全なものではない。今後更に探究の歩を進めて増補訂正しやうと思ふ。有志各位の援助を切望して息まないものである。

### 一、板碑概説

板碑の形狀 板碑の形狀は上部が三角形をなし、表面の上部に蓮座が畫かれ、其の上方に梵字が一字乃至三字陰刻してある。蓮座の下方中央に建立年月日、建立年月日の左右には花瓶などが陰刻してある。形の小さいものは主に梵字が一字で年號はない。形の大きなものは、表面の周圍に一二條の周縁を刻み、上部に環珞が刻され、年號の左右に數多の梵字及び建立者の氏名等が刻されてある。

板碑の石材 石材は秩父青石と稱する綠泥片岩が用ひてある、板碑の最も多いのは、關東地方で、次で九州四國であるが、九州では肥後、四國では阿波に多い。此れ等の地方の何れもが片岩の産地を附近に持つて居るといふことも注意すべき所である。

本郡各地に散在する板碑は其の當時秩父地方から移入されたものであると思はれる。

板碑の起源 板碑建立の起源は詳にし難いが、先年武藏國入間郡勝呂村大字塚越、西光寺墓地で發見されたものは、應徳三年正月二日のものである。應徳三年は、白河天皇の御宇で彼の後三年の役に於ての源義家が、清原武衡を討つた年で

史跡、名勝、天然記念物



今(昭和五年)より八百四十四年前である。其の後鎌倉時代吉野朝時代室町時代に入つて其の數を増し戰國時代に入つて漸く廢れたものである。

蓋し戦亂が打續き其餘裕が無かつた事と、又別の様式の塔婆が起つた爲であらう。

板碑の梵字 板碑に刻してある梵字は、世に彌陀の種字である所の龕でキリクと讀み、其の下に並べるのは孔代でサ、サクと讀む。サは觀音、サクは勢至の種字、梵字一字を刻したものは、阿彌陀如來を表し、三字を刻したものは彌陀三尊を表はしたものである。

## 二、分布狀況

吾妻郡に於ける板碑は、中之條を中心とした東部に多く、岩島・坂上の中部に尠く、西部に於ては、只長野原に二ヶ所あるばかりで、嬭戀・草津・六合村には未だ發見されない。

今各町村別に其の數を表示すれば、

東 部……中之條四、東村二、太田村二、原町六、澤田村一〇、伊參村一、名久田村三、高山村九

中 部……岩島村一、坂上村一、

西 部……長野原町四、六合草津嬭戀に無し

合 計……四十三である。

## 三、各板碑の實地調査事項

是等の板碑について調査した形狀大さ並に其の他を町村別に記すと、

### 中 之 條 町

#### 林昌寺千體佛堂内板碑

(一號) 高さ三尺八寸、巾一尺一寸五分、周縁一上部に瓔珞あり、其の下に背光ある彌陀の立像あり、大永八年二月日と左右に花瓶一對が陰刻してある。

大永八年は御奈良天皇の御宇、足利義晴の時で、今から四百二年前に當る。

(二號) 高さ一尺五寸、巾六寸五分、蓮座上御宇一字、年號無し。

大字伊勢町林昌寺は文安年中(四百八十餘年前)足利義政の時僧長馨の開基創建したものである。

此處の板碑建立については二様の解釋が出来る。一つは、此の碑面に刻してある通りの年月日に於て死者供養の爲此處に建てたものであるといふ考へ方である。

も一つは、明治初年、住職深井大法が寄附金を募つて、今の千體佛堂を造り、佛像を集めて、此の中に安置したといふことであるから、其の當時他所から此處に移し建てたのではないかと考へられ、其の何れが眞であるか、今の處不明である。

#### お茶不動板碑

(三號) 上邊約八寸許りの破片で、御宇一字が刻してある。

大字伊勢町南裏お茶不動の土穴内にあつたのであるが、昨、昭和四年此の土穴を石を、積み塞いだ其の時、埋めたのであるか、今其の破片が無い。

#### 山崎觀音の板碑

(四號) 高さ二尺二寸、巾七寸五分、蓮座上御宇一大字西中之條、村社伊勢宮の西北方、四萬街道と長野街道との分岐點、高臺にある山崎觀音堂の裏にある。

山崎の觀音は、吾妻三十三番觀音札所で、二十六番である。



東 村

南澤の板碑

(五號) 高さ二尺八寸、巾九寸五分、周線一

頂部右方が缺損磨滅したが、上部に背光を放射した、立像がある。年號、文永拾年だけ讀むことが出来る。大字五丁田、南澤墓地にある。其臺は、五輪塔、土臺石の部・十數個で積み上げた中に立て、ある。

其の側には、應永十二年に建てた五輪の塔がある。此の地の近くに金原城趾がある。

文永十年は今から六百五十七年以前で、北條高時の時代で此の年蒙古の兵が壹岐へ攻めて來るとの知らせがあつた年である。弘安の役は之から八年過ぎてからである。

金原の板碑

(六號) 高さ二尺五寸、巾一尺六寸、蓮座上梵字一 大字五丁田、元役場西方、金原の宮下力三氏の墓地にある。先祖の石碑であると言はれてゐる。

上の段は金原城趾である。

太 田 村

植栗の板碑

(七號) 高さ二尺四寸、巾七寸七分、蓮座上梵字一字。

大字植栗、大泉寺、關清十氏の墓地にある。同氏の先祖が高野山から持つて來たものと言ひ傳へる。

岩井の板碑

(八號) 巾一尺、高四尺、頭部頂角缺損周線二梵字三つ、明徳元年、月十四日。

大字岩井長福寺入口田中良平氏の墓地にある、先祖の碑と云つて祭つてある、明徳元年は南北朝合一の二年前に當り今から五百四十一年前北朝の年號である。

原 町

御嶽山の板碑

(九號) 高さ一尺五寸、巾六寸、蓮座上梵字一字。大字川戸深澤御嶽山にあり。元、同村金澤佐平宅地側にあつたのであるが、先代市三郎の時、此の山に移したものである。

(十號) 高さ二尺二寸、巾七寸五分、蓮座上梵字一 大字川戸金澤佐平の宅に保管してある、之は(九號)と共に宅地側にあつたものだらうか、梵字、九號に比して鮮明である。

内出の板碑

(十一號) 高さ八寸、巾四寸二分、梵字一。

大字川戸、内出丸橋魁馬氏庭内にあつたもので、本郡板碑中最小なるものである。今之は同村の金澤佐平が保管して居る。同地は内出城、三ノ丸に當る。

内出城は吾妻氏家臣秋間氏の據つた城で、貞治年間の築城(五六九年前)だと傳へられる。

小玉塚の板碑

(十二號) 破片にて梵字一字あり。

大字川戸、深澤小玉塚の積石中から發見、今は金澤佐平が保管して居る。

小玉塚は同地古墳中石槨の一番大きいもので、間口九尺奥行二間高さ九尺もある。

下郷の板碑

史跡、名勝、天然記念物



(十三號) 破片、梵字一字あり。

大字川戸、下郷、眞田菊四郎氏附近の畑に於て發見、是亦現に金澤佐平保管す。

金井の板碑

(十四號) 破片、梵字三字ある大形のもの、破片で巾七寸、高さ一尺。

大字金井、都所房光氏が昭和四年宅地續きの西方稻荷社の竹藪中から發見したものである。第一字の蓮座と、第二字とある許りであるが、第二字の犬さ四寸五分より推して、郡中第一のものではないかと思はれる。残片の發見されないのは遺憾である。

此の處から近く奈良朝時代布目瓦の出る廢寺の跡がある。

岩 島 村

諏訪澤の板碑

(十五號) 高さ二尺五寸、巾七寸五分、梵字一字。

大字厚田、田中、諏訪澤にあつたもので、今は同所の不動堂内に安置してある。堂後に五輪塔が二基ある。

坂 上 村

須賀尾の板碑

(十六號) 未調査。

大字須賀尾廢寺安樂寺趾にあるといふ。安樂寺は、羽根尾長門寺の菩提寺であつたと云ふ。

長 野 原 町

小學校の板碑

(十七號) 高さ二尺八寸、巾一尺、蓮座上三梵字、周線一、頂部缺損、年號延文二年(丁酉)五月二日。

明治四十四年六月、大字天津、坪井、現在の小學校敷地、地ならし中に發見したもので、小學校に保管してある。

延文は北朝の年號で、同二年は吉野朝の正平十二年に當り今から、五百七十三年前である。

此の翌年四月、尊氏逝き、新田義興・鎌倉を襲ひ十月矢口に誘殺されたのである。

狩宿の板碑

(十八號) 高さ二尺二寸、巾七寸五分、梵字一字。

(十九號) 高さ一尺八寸、巾六寸五分、梵字三字のものであるが、第一字の蓮座上以上缺損年號の部磨きたる爲不明。

(二十號) 高さ一尺八寸、巾六寸五分、文字なし。

大字狩宿淺井氏の墓地に、三基並びあり。朝比奈義秀の墓と傳へる。

狩宿は、頼朝三原の狩の時、陣を布いた所であるといひ、義秀は鎌倉の元老和田義盛の第三子で、母は木曾義仲の妾巴御前で、有名的大力武勇の強者で、和田合戦に勇名を轟かしたが父義盛其他兄弟悉く討たれたので己むなく安房の國へ遁れて行衛不明になつたのだが、安房から木曾の殘黨が潜入したと云ふ吾妻へ移り、此地で没したものはあるまいか。

澤 田 村

折田阿彌陀堂の板碑

(二十一號) 高さ三尺六寸、巾一尺、蓮座上梵字三、年號建武二年。

(二十二號) 高さ一尺三寸、巾八寸五分、蓮座上梵字三、下部缺損、年號を缺く。

(二十三號) 高さ二尺、巾八寸、頭部の缺けた彌陀の立像がある。其の丈五寸。



(二十四號) 高さ一尺九寸、巾六寸七分、蓮座上梵字一。

(二十五號) 破片、六寸五分、梵字三つあるが、年號其他の部が缺けて居る。

十九號、二十號は大字折田の下折田、阿彌陀堂内に安置してある。二十一號、二十二號、二十三號は堂裏墓地に五輪塔と共に積まれてある。共に村民が土中から堀り出したものであると傳へるが其の地點及年代は不明である。

建武二年は、後醍醐天皇中興の翌年で、此の十月足利尊氏自ら征東將軍と稱して叛き、翌延元元年尊氏東上、正成湊川に戦死し、天皇には吉野山に幸し給ひたる我國歴史中涙なくして讀むことの出来ぬ時代である。

宗本寺の板碑

(二十六號) 高さ一尺七寸、巾七寸、梵字一。

大字下澤渡、宗本寺墓地にあり。

宗本寺は、康應六年・眞譽誓故の創立したものであると。康應は北朝の年號で、今より五百三十六年前に當る。此の板碑も其の當時のものであらうが、年號が無いので不明である。

林氏の板碑

(二十七號) 高さ三尺一寸、巾九寸二分、周線一、瓔珞あり、丈一尺の阿彌陀尊像を刻す其下に文永七年十二月の銘がある。

上澤渡林仲次郎氏、昭和五年十二月七日御堂谷戸桑畑を耕作中發掘したもので、關億平次所有の板碑と同場所にあつたものと思はれる。

文久七年は今から六百五十年前に當り、東村南澤の板碑より三年以前で今の處、吾妻郡中一番古いものである。

永林寺の板碑

(二十八號) 高さ一尺五寸、巾七寸、梵字三字あり下の梵字の蓮座以下缺損。

大字上澤渡黒岩軍次氏の庭内にあつたものが不幸の續くは之が崇るのだとのことで、永林寺へ保管を依頼したものだとのこと。

澤渡の板碑

(二十九號) 高さ一尺八寸、巾六寸、丈六寸の阿彌陀の立像が刻んである。

大字上澤渡の關億平次氏、明治四十年十一月温泉神社の東北方、御堂谷戸と稱する畑地から發掘したものであると。其の御堂谷戸より約二丁東に龍谷山永林寺がある。

口碑に御堂谷戸にはもと最林寺といふ寺があつたと云ふが、或はさうかも知れぬ。最林寺が廢れて永林寺が出来たのではあるまいか。永林寺は岩下應永寺末寺で、文祿元年十月今より三百四十年前以前で、惠鸚和尚の開山したものだ云ふ。

山田の板碑

(三十號) 破片、高さ一尺三寸、巾一尺。種字の部を損じ、年節の部分に□□年(辛未)二月十六日、右方に梵字六字、

右志者爲とあり、左方に妙山建修とある。

大字山田の田村夏藏氏所藏である。先年洪水の時滑澤川から發見したものであるといふ。同地に寺屋敷なるものがある。善福寺は往古此處にあつたが、山崩の爲め、堂宇悉皆流出して現在の地に移つたと傳へるが、其の當時埋没したのが發見されたものであらうと思ふ。

昭和四年、此寺屋敷下段の畑地から、此の板碑の破片上部種字蓮座と、左方の梵字のあるを、金澤佐平が發見した。梵字の大き一寸三分。



辛未の年は、龜山天皇の文永八年、後醍醐天皇の元弘元年、後龜山天皇の元中八年、後花園天皇の寶徳三年、後柏原天皇の永正八年、正親町天皇元龜二年等であるが、其の何れかは判明しないが、書體其の他より推して、元龜二年頃ではないかと思はれる。果して然らば今から三百五十九年前である。

伊 参 村

蟻川の板碑

(三十一號) 破片、梵字半部を存する直徑七寸五分丸形の破片である。

大字蟻川唐澤恒司氏の稻荷社の供物臺として置かる。出所不明のものである。

名 久 田 村

千澤の板碑

(三十二號) 高さ一尺六寸、巾六寸、梵字一、蓮座なし。

大字横尾字千澤松本折作氏宅地にある。昭和四年十一月、同所所有の千澤二三四地宅地より發掘したもの。

長久保の板碑

(三十三號) 高さ一尺九寸、碑一尺二寸五分、周線二、中邊から折れた、上部上に瓔珞あり、梵字三字、梵字の大きさ七寸五分。

大字横尾、長久保の薬師堂前にある、大形のもので、勿論年號も、あつたのであらうが、下半部が發見されない。

宮崎氏の板碑

(三十四號) 破片、上部中央から左半部で、應安□年酉と花瓶と刻んである。

大字横尾、宮崎浦平氏の所有で、應安は北朝の年號で、酉は二年である。然して此の年は吉野朝正平二十四年に當り

楠正儀が北朝に降つた年である。

高 山 村

奈良氏の板碑

(三十五號) 高さ一尺六寸、巾六寸五分、蓮座上梵字一、下部五寸位缺損。

大字中山、觀音堂裏、奈良新八郎氏の墓地にある同觀音堂は奈良氏の祖先の造立したもので、弘法大師四十二歳御作の三面六臂馬頭觀世音の像を安置し、近郷の崇敬厚がかつたが惜しいことに明治二十年頃盜難に遭つて、今は其本尊はない、廿四年高崎の大佛師法橋玄司の作つた觀世音が納められて居る。

尻高ノ板碑

(三十六號) 梵字三あるが年號なし。

大字尻高河原田佐四郎氏の稻荷祠に立て、ある。

(三十七號) 高さ一尺五寸の破片、蓮座上僅に梵字あり。

(三十八號) 高さ一尺七寸五分、巾六寸三分、文字なし  
大字尻高都筑國司氏が字中ノ谷土の畑の排水溝を浚つた時溝の蓋となつて二枚あつたのを持ち歸つたものであると云ふ、然して、前者(三十七號)は之を磨いて庚申塔となすべく、已に庚の字を刻み始めてあつた。

小林氏の板碑

(三十九號) 高さ一尺七寸、巾六寸、蓮座上梵字一。

大字中山小林茂里氏の墓地にある、同地は中山城外家老家敷にあつて何でも家老金井豊前の家敷跡だらうと云ふ、其西に家老石井丹後の家敷跡もある。

史跡、名勝、天然記念物



法信寺の板碑

(四十號) 高一尺九寸、巾五寸、蓮座上梵字一。

大字中山法信寺にある、もと字十二平の大津さわ氏の家にあつたものを、明治二十年頃寺へ納めたのだらうと云ふ。法信寺は沼田正覺寺の末寺で阿佐美右兵衛の尉の家臣奈良左近、天正十二年主家滅亡の後、髪を剃り僧となりて城跡に庵を結び、寶藏坊と云つて居たが、天正十五年寫藏坊寂滅後、慶長十七年眞念の代になつて法信寺と號し、眞念を開山となし、萬治二年に今の地に移つたと云ふ。

平形氏の板碑

(四十一號) 高さ一尺八寸、巾九寸、梵字三、中部以下缺損。

法信寺墓地の平形龜三郎氏墓地にある、相當大きなもので年號が刻まれてあつたと思ふが、乍遺憾其部分が缺けて居て見當らない。

原の板碑

(四十二號) 高さ三尺、巾一尺

同地藥師平にあつたものを、明治四十四年九月湯本利平氏が碑面を磨いて次の俳句を刻んが記念に立てたのだと云ふ

軒の螢ふはりと飛で竹の中

八十三翁 理 泉 書

稻荷社の板碑

(四十三號) 高さ一尺八寸七分、巾九寸五分、梵字、下半部缺損。

大字中山倉田實五郎氏所有八幡塚と云ふ所にあつたものを稻荷社に納めたもので、大きさを推して年號のあつたものだと思ふが、下部が見當らない。

四、要 約

以上、板碑の分布状況を見ると、多くは古城趾・寺院境内又は廢寺趾等に發見されてゐる。

故に、若し板碑の存在を發見する時は先づ古城趾か廢寺趾か等を知る一資料となるものである。

次に、碑面の文字の書風であるが總じて古きものは筆勢が軟く、新しいものになるに従つて、筆致が硬くなつてゐる様である。

若し、板碑を發見したが建立の年代が不明の場合には、此の書風から其の年代を考定することが出来る。

又、碑面の蓮座は、新しいものになるに従つて、次第に蓮瓣を用ひた模様化して來る傾向のあることが、多數のものを比較研究する内に知らる。即ち、碑面の蓮座に依つても、其の時代が判定されて、往時の文化吾等祖先の活動状態が、理解されるのである。

兎も角、板碑研究に依つて、古き其の土地の歴史を窺ひ知ることが多大で、考古學上最も大切なる研究と爲すことが出来る。

昨年十一月群馬會館に開かれた郷土資料展覽會に出品された板碑で、古いのが邑樂郡永樂村の光恩寺にある板碑にて之が文永の紀年が刻されてあるが、吾妻郡に此の年ののが二ヶ所あることは其當時の吾妻の文化が他郡市に比して決して劣つて居なかつたことを知ることが出来るので心強く感ずる處である。尙横尾長久保の板碑や、原町金井の板碑等の年號の部が發見せられたならば、更に吾妻郡の其當時の歴史を知ることが出来るので是非何とかして發見したいと思ふのである。

本調査後發見したるものを追記せば

中之條町 お茶不動の板碑

(四十四號) 高さ一尺二寸、巾七寸、種字三周線あり之を金泥を以て塗りあり。

史跡、名勝、天然記念物



大存伊勢町お茶不動傍青柳惣太郎氏墓地より昭和六年五月二十九日發掘  
(四十五號) 高さ一尺二寸、巾八寸、中部より折れたるものの下部  
一月五日と刻みあり記年不明、或は(三號)の下記には非るか。

太田村 泉澤の板碑

(四十六號) 高八寸、巾二寸五分、蓮座上種子一。

大字泉澤瀧青木氏の稻荷神社にあり宇佐八幡宮として崇敬し居れり。

(四十七號) 高一尺二寸五分、巾四寸五分、種子一。金泥を塗りあり。

昭和六年十二月六日泉澤林道開墾の同地より發掘す。同地青木清吉氏保管

原町 須郷の板碑

(四十八號) 高さ一尺八寸、巾八寸、中央より折れたるものの下部種子二と延文三年 月の刻みあり。

同地金子平氏墓地にありたるものにして延文三年は北朝年號にして今より(昭和五年)五百七十二年前に當り新田義興の矢口渡しに殺せられたるれ年なり。

伊勢村 蟻川の板碑

大字蟻川存倉澤松壽庵墓地數板ありと云ふも未だ實地調査の期を得ず。

名久田村 林昌院の板碑

(四十九號) 高二尺、巾一尺、蓮座上種子。三〇年號の部缺損

周線上部二 推定高さ三尺五寸位なり。

(五十號) 高一尺二寸 高一尺一寸 種子三字文を残し上部下部なく推定高さ四尺の大なるものなり。

右二個 宇妻林昌院に保管しあり。高山村 中山の板碑

(五十一號) 高一尺二寸五分、巾七寸、蓮座上種子一。周線上部二線 中山村北方墓地にあり

(五十二號) 破片巾九寸、高サ七寸

同地にあり全形を推定することを得ず。昭和十年一月……(中山小學校調)

(五十三號) 高さ一尺八寸、巾七寸、蓮座上種子三。周線記年なし

昭和八年五月同地唐澤與助氏諏訪の原原野を開墾して發掘す。

予の知り得たるものは以上にして、

中之條六、東二、太田四、原町七、岩島一、坂上一。長ノ原四、深田一〇、伊參六、名久田五、高山十二

計五十八基に達せり、尙(一號)林昌寺内板碑は大永八年二月と讀みたるは前年足利市の研究家丸山瓦全氏と更に調査す

(金澤佐平調査)

るに大永は文永と讀むが眞に近き様に見へたるにより茲に附記し置く次第なり。

尙

一、氏神社ノ板碑 小壹個……大字中山關藤兵衛氏の所有

二、稻荷社ノ板碑 小壹ヶ……上字中山關初十郎氏の稻荷社 發見せるものなり。

三、稻荷社の板碑 中壹個……大字中よ奈良新八郎氏の稻荷社の土中より發見せるものなり。

四、大字中山野上一徹氏の板碑 小一ヶ……中山城址關係地同氏所有地を開墾せし折り發見せしものにして幅二十糎高

さ四十糎にして下部破損せり蓮座上梵字一あり。

五、稻荷社の板碑 ……大字高金井重作氏の稻荷社にありたり。

六、大字中山小野金次郎所有 小二ヶ……大字中山北子麓梅澤地區を開墾せし許り發見せしものなり。幾分破損せり。

史跡、名勝、天然記念物



### 一一一、岩櫃城記

(郷土講座第二十六回昭和九年九月一日B.Gより新井信示放送)

#### 一、緒言

岩櫃城と申しますのは、吾妻太郎の傳説で名高い、吾妻郡の中心の要害の好い城でありまして、戦國末に眞田氏の領する處となつたものであります。

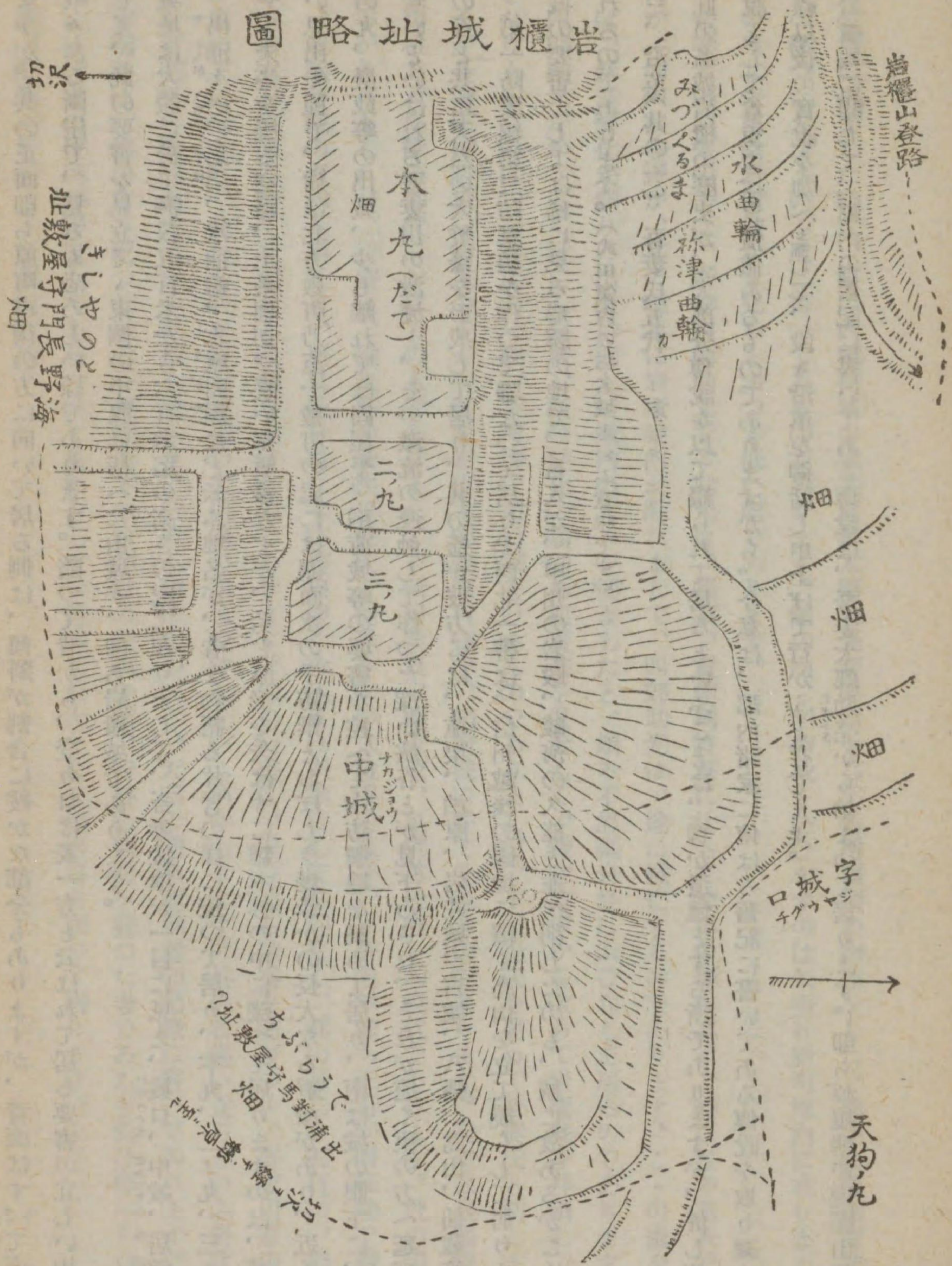
夫の武田勝頼の、天目山で亡びる直前に、眞田昌幸が、勝頼を自分の領地上州吾妻の城に迎へようとしたと云ふ事は、三河後風土記といふ本に出て居り、又、飯田忠彦の大日本野史、頼山陽の日本外史にも書いてある所でありますから「吾妻の城」といふ名に於ては既に御承知の御方も少なからぬ事と存じますが、其の「吾妻の城」と申しますが、即ち岩櫃城の事でありまして、加澤記には、岩櫃城と明記されて、其の時の騒ぎが詳しく述べてあります。今、其の岩櫃城について御話し申上げるのでありますが、順序といたしまして、位置、形勢から御話を進めて行かうと存じます。

#### 二、位置、形勢

吾妻郡原町市街の西一里とは離れて居ない處に、妙義山式の岩山が、永久に町を護つて居るかの様に、巍然として聳えて居ります。此の山は、本名を岩櫃山、一名を城山と申します。其の高さは海拔八百米程もありますが、此の邊の地盤の高さが、既に三百米以上に達して居りますので、さして高いとは思はれません。けれども、史跡であり、且つ風景も宜しいので、先づ郷土の代表者といふ格の、山であります。

此の岩櫃山の姿を、一寸譬へて申しますならば、氣骨稜々たる武士が、肩を怒らせて坐つて居るやうであるとでも申し

岩櫃城址略圖



史跡、名勝、天然記念物



ませうか。其の正面即ち原町市街の方に向いて居る側は、傾斜が割合に緩かな部分もありますが、背面はすべて直立千尺の岨々たる断崖で、見るも恐ろしい様であります。随つて昔から、登り口は表一方と云はれて居る要害の宜しい山でありまして、此の要害を見立て、東側の中腹に構へた山城が、即ち岩櫃城であります。

城址は大體に於て海拔五百米から六百米迄の高さの處に在りまして、吾妻盆地が一目に見え、城口、中城、居館、殿屋敷、出浦ヶ内、馬場、水曲輪、志摩固屋など云ふ地名が、昔を物語る片言の様に残つて居り、本丸、二ノ丸、三ノ丸の曲輪や、夫等を繞る空濠、土壘堀切、長い堅塹濠などが、殆ど原形を失はずに雑木林の中に残つて居りますのは、誠に懐かしい思出の種で、尙ほ北方數町乃至十數町の處には側面水の手防禦とおぼしき幾條かの長大なる塹濠があり、近くには天狗の丸、巖鼓等の出城、少し離れては固屋平、稻荷城等の要害を控へて本防禦線を堅めて居り、南は城の眼下に、渡る瀬の無いといはれる吾妻川の激流と、その激流の浸蝕して作つた深い峡谷とが見下ろされ、それが遠く東の方へ延びて山田川の谷と共に天然の大塹濠を形成して居り、其の遙か彼方には、植栗、柏原、岩井城、古城、八幡、嵩山、仙藏等の要害が、第一防禦線第二防禦線を作つて聯なつて居り、西北一帯は、信州越後の國境に續く高山を立て繞らして居りまして、籠城の要害としては稀に見る形勝の地で、古人が、甲州の岩殿、駿河の久能と並べ稱したのも、誠に故あるかなとうなづかれるのであります。(武田領内の三名城といふ意味です)

### 三、沿革(其の一) 吾妻氏五代

此の名城岩櫃の歴史が、大部分傳説を以て綴られて居るといふことは、聊か遺憾とする所ではありますが、併し傳説は又傳説として尊重すべき價値あるものでありますから、今私は、郡内諸家に傳はる舊記に書いてある傳説を取り纏め、之に永祿以後の實説を加へまして、段々沿革を御話し申上げて行かうと存じます。

岩櫃城に關して、郡内の舊記に書いてある傳説は、吾妻太郎助亮から始まつて居ります。即ち源頼朝が淺間山麓、三原

野の狩に來ました時に、館の内稻荷城の城主吾妻太郎助亮が案内をして名所舊蹟の物語をした。助亮は後稻荷城から岩櫃城へ移つたとかういふ風に書いてあるのであります。館の内、稻荷城といひますのは矢張り原町地内に在りまして、岩櫃城の東北半里餘岩櫃城から見るとすつと低い處であります。

吾妻太郎助亮の子は、吾妻四郎助光で、助光は、頼家、實朝兩將軍に仕へて武勇の譽れ高く、特に弓の名人でありましたが、如何なる譯か、其の晩年に岩櫃城内が亂れまして、四郎助光は、遂に滅亡するのであります。この處を傳説の表では、妖怪變化が頻りに出沒徘徊して城内の人々を惱ましたと、頗る不思議奇怪に云ひなして居るのであります。

四郎助光がかうして滅亡した後、妖怪變化の類即ち悪者共を退治して、鎌倉將軍から改めて岩櫃城を拜領して新に城主となりましたのは、吾妻氏の一族、下河邊庄司行家といふものであります。下河邊氏を改めて吾妻氏と稱しました。其の子が吾妻庄司行重、行重の子が有名な吾妻太郎藤原行盛で、稻荷城に於て生れたのであります。行盛は後醍醐天皇様から後村上天皇様の御代にかけての人であります。新田義貞、楠正成、足利尊氏等と同時代であります。此の頃は諸方に戰爭がありました。行盛は、碓氷郡の豪族里見氏と境界を争つて戰爭に及び、正平四年即ち正行が四條畷で戦死した翌年、北朝年號の貞和五年五月、里見氏の爲に本防禦線深く攻込まれ不幸にして戦利なく、其の月二十五日に、岩櫃城のすぐ下の立石河原に於て壯烈なる最期を遂げたのであります。即ち行盛は、追ひ迫る敵兵を防ぎつゝ、吾妻川原の立石といふ岩の上に飛上り、我れと我が首を刳切つて川向の岸へ投げたといふのであります。其の名高い立石といふ岩は、惜しいかな天明三年淺間山大噴火の際押し流されて行方不明になつたと、天明年間の實見者の記録に書いてあります。川戸村の首宮明神は行盛の首を祀つた社で一里程川下の岩井村の長福寺は、行盛の胴體を葬つた寺であると云ひ傳へられ、その寺には行盛の位牌が安置してあり、又、墓標として、苔蒸した大きな五輪の塔も立つて居ります。

### 四、沿革(其の二) 齋藤氏六代



吾妻太郎藤原行盛が討死して岩櫃城が里見氏に乗取られてしまつた時、行盛の子、千王丸といふのは、まだ十二歳の少年でありました。此の千王丸に關する話は、元祿の頃書かれた「吾妻太郎記」といふ本に、頗る小説的に書きなされて居ります。それによりますと千王丸は父討死の後、家來、秋間ノ九郎泰則、荒尾ノ金剛兵衛行貞、同弟金剛左衛門清長の三人に附添はれて、數年間榛名山中、榛名神社の御師の坊に潛み隠れ、後、母方の伯父に當る碓氷の齋藤五郎稻基といふ人の養子分となり、其の盡力によつて上野ノ守護上杉憲顯の援助を得、舊臣どもを呼集めて吾妻に攻め入り、見事、父の仇里見を討取つて岩櫃城を回復し、齋藤越前守憲行と名乗り、岩櫃城主齋藤氏六代の祖となつたといふのであります。こゝに面白い事には、群馬郡上室田村の烏川の岸に湯殿山といふ山がありまして、其處に、月山、羽黒山、湯殿山の三權現が祀られてありますが之は延文三年即ち行盛討死の後九年、齋藤越前守憲行が父の仇里見兵庫頭を討ち取つた報賽として勤請したものであるといふ事が群馬郡誌に見えて居ることあります。

さて、岩櫃城主齋藤氏六代の事蹟を、順序立て、書いて居りますものは「吾妻軍記」といふ本であります。之に依りますと、初代は憲行、第二代は越前守行禪、行禪は二男一女がありまして嫡子越前太郎行弘に岩櫃城を譲り、次男但馬守に知行を分け與へて固屋平要害を守らせ、娘には、家老秋間備前守泰倫の諫めがあつたにもかゝらず、柳澤治部直安といふ者を婿に迎へて一家を興させ、古城即ち巖鼓今の觀音山の要害に住まはせました。然る處行禪がなくなると、果して兄弟の間に不和を生じ、兄行弘は古城の要害に夜討をかけて妹婿柳澤を逐ひ出してしまふのであります。尙ほ同書によれば有名なる善導寺を川戸村から城下の霧澤へ移したのは此の行弘の時であるといふ事でありませぬ。行弘の次は行基、行基の次は行連で、何れも越前守と稱しました。此の行連の頃が恐らく榮華の絶頂であつて、次の第六代越前守基國の時には満月の缺け始まる如く、家運漸く下り坂になつて來たらしく思はれるのであります。其の頃、南の方甲州の武田信玄の勢力が益強くなつて、侵略の手を吾妻郡に迄伸ばして來ましたので、岩櫃城内の臣下の中には、武田に屬するを利とする武

田派と何處迄も上杉に従ふべきであるといふ、上杉派とが相對して一致を缺くやうになりました處へ、武田の臣、眞田幸隆、其の子信綱、昌幸等、無双の智將が攻めて來ましたので、さすがの名城も陥落し、城主基國は、四萬温泉の奥、木ノ根宿通り、御坂峠の嶮を越えて上杉の本國である越後へ逃走するのであります。時に永祿六年で、今から三百七十一年前の事でありませぬ。此の時、城下の善導寺の住職は武田方に内通して岩櫃方の不利を計つたといふので城主基國に深く怨まれましたが、間もなく不思議の火で寺は丸焼になつてしまひ、其の後は何回建立しても完成すれば必ず直に焼ける。之は齋藤基國の怨靈が祟をなすのであるといふ云ひ傳へになつて居りまして、今日迄、不思議にも其の通りであるといふ事でありませぬ。

##### 五、沿革(其の三) 眞田氏時代の一

齋藤越前守の歿落後、武田領となつた岩櫃城は、其の臣眞田の支配に入つて、海野長門守兄弟が城代に任せられました。元龜二年には武田信玄が沼田の騷亂に乗じて出陣し眞田一徳齋幸隆を先鋒として此の岩櫃城に入つて前進根據地となし尻高中山兩城を降して沼田を眼下に見る不動峠まで出張した事がありました。

初めにも一寸申上げましたが、天正十年武田勝頼が織田徳川聯合軍の爲めに、根據地甲州迄攻込まれて愈々窮しました時、眞田昌幸は策を献じて、勝頼を岩櫃城に迎へて死を以て之を守り、上田、小室、箕輪の諸城を以て岩櫃城の掩護となし、以て徐ろに回復を計らうとして勝頼の賛同を得たので、岩櫃城の裏手、今日の郷原村宇小屋の上の方に勝頼の居館として「御座敷」と稱する御殿を急にこしらへ、尙ほ兵卒の住宅をも大々的に増築する準備最中勝頼は小山田義國等の爲めに誤まれて天目山の麓で自害してしまひましたので、遂にそれきりになつてしまつた事は、誠に残念至極であります。若し勝頼が岩櫃城へ迎へられて來て、眞田一族が之を守護するといふ事になりましたならば戰國末期の我國の歴史は、更に幾層の波瀾を見ないではやまなかつたことであらうと存じます。所謂御座敷を建設した地點や、其の建物の成行につい



ては、最近信州松代の某家に傳はりました岩櫃城の古い繪圖が世に出ましたので明になつた次第であります。

## 六、沿革(其の四) 眞田氏時代ノ二

天正十年から眞田昌幸は岩櫃城を直接に支配する事にいたしました。で、同年嫡男信幸が父の命によつて城を預つて居ります時、小田原の北條氏が西上州深く侵入して來まして、直ぐ近くの大戸の手古丸城を占領しましたので、信幸は行捨て置き、直に兵を提げて岩櫃城を發し、手古丸城の北方なる仙人ヶ窟に陣取つて采配を揮ひ、遂に敵を驅逐して手古丸城を奪ひ還しました。此の後數年間北條氏は岩櫃城を攻め取らんとする志を捨てず、屢々大規模の吾妻侵入を企てたのでありましたが、いつも志を達することを得ませんでした。

慶長五年には、所謂天下分け目の大戰爭關ヶ原の役が起りました。眞田昌幸は、石田三成に味方して、上田城に立籠り中山道を上る徳川勢を喰止めました。徳川家康は、昌幸が領有して以來已に相當の年月を経た岩櫃城の重要性を認識して居りましたので、いくさが始まると直きに、三河以來信任して來た勇將の一人で、當時上州大胡の城主にしておいた牧野右馬允康成を初とし、松平隱岐守定勝、外、旗下十騎に、多數の鐵砲方を率ゐさせて岩櫃城に乗込んで確實に之を差押へさせ、眞田恩顧の者共を嚴重に監視し抑壓すると同時に、北國越後方面の押へにも任せしめたのであります。岩櫃の城が、關ヶ原の役に、かうした微妙な關係をもつて居つたと、ふ事は、興味ある話ではありませんか。

## 七、沿革(其の五) 岩櫃城の破却

關ヶ原の役後十四年を経て大阪の役が起ります。大阪の役將に勃發せんとして天下騒然、徳川家康は神經を尖らせて諸國の浪人や大名の向背動靜に注意して居りました。折柄、岩櫃城内に於て市を立てた、多數の人が集まつた、といふ事が家康の許へ内報されたのであります。家康は眉をひそめ、頭を傾けました。郡内の舊記「吾妻記」には

慶長十九年甲寅我妻岩櫃城内にて市を立て申候事上聞に達し御所御不審有之由にて俄に平川戸町を引き原町を割り申

候

と、極めて簡明に此の間の消息を記して居ります。思ふに老家康に疑をかけられた領主眞田伊豆守信幸の心配は一通りではなかつたでありませう。併し信幸は機を見るに敏なる人でありましたから、家康の意を安んじて自家の存立を安全ならしめる爲めに、一大英斷を以て、早速命令を下し岩櫃城において吾妻郡奉行の出浦對馬守幸久をして、岩櫃城を破却し且つ城下町である平川戸宿をズット下の觀音原へ移轉させることにしたのであります。此の時觀音原へ移轉して新生命を得た町こそ、即ち今の原町であるのであります。町の移轉が了り、町の中央北側に、郡奉行役所も出來上りさて城が愈々破却されてしまひましたのは、信幸が命令を下してから足かけ三年目の元和二年の春で、此の年四月十七日に家康は七十五歳を以て薨じたのであります。が定めし安心して冥目した事でありませう。

## 八、結 語

吾妻太郎助亮以來四百有餘年の命脉を保つて、興味ある幾多の傳説を生み、眞田氏の領となつて後は、或は武田勝頼を迎へようとしたり、或は關ヶ原の役に差押へを喰つたり、又は大阪役勃發直前に問題を惹起したりして大局の上に、常に微妙なる關係を有して居た名城岩櫃は、かくして遂に破却されてしまつたのであります。爾來三百十八年の年月は流れました。思へば感慨無量であります。併しながら、岩櫃山自然の風景は昔ながら變る事なく、城址を初め、山中幾多の名所舊蹟は、春の若葉、秋の紅葉に裝はれて、訪ね來る人をひたすらに待つものゝ如くであります。一度杖を城址に曳いて、塹壕、土壘、曲輪の址を巡覽し、頭を擧げて山川村落を指し眺めましたならば、思ひは遠く數百年の昔にかへつて、誰しも懷舊の情にたへないことであらうと存じます。

## 岩櫃城主一覽

史跡、名勝、天然記念物



- 一、鎌倉時代——吾妻太郎助亮、同四郎助光、下河邊行家、同行重
- 二、吉野朝時代——吾妻太郎行盛(里見氏占領)、齋藤越前守憲行
- 三、室町時代——齋藤越前守憲行、同行禪、同行弘、同行基、同行連、同基國、眞田一德齋入道幸隆(但し海野長門守幸光、同能登守輝幸を城代とす)
- 四、安土、桃山時代——眞田幸隆、同源太左衛門信綱、同安房守昌幸(天正十年以前は海野氏城代たり、同年より眞田氏直領)
- 五、江戸時代——眞田伊豆守信幸(郡奉行をして在城せしむ、慶長十九年郡奉行出浦對馬守に命じて城を破却せしむ)

備考 一、岩櫃城を領したる沼田の眞田氏は城破却後六十五年天和元年に至りて領地を沒收せられたり、幸隆以來眞田氏の領有すること百八十年間なり。

二、岩櫃城破却後其の山林は岩櫃山御林と稱して特別の保護を加へられ明治に至りて國有林に編入せられたり、明治大正年間其の一部伐除せられたれども大部分は太古以來の雜木林なり。

岩櫃年表

建久四年(一八五三)——源頼頼三原に狩す、吾妻太郎助亮隨ふといふ、助亮初め稻荷城に住す、岩櫃山の名は此の時頼朝の命じたる所と傳ふ(其の以前は高嶺山といへりといふ)

元久元年(一八六四)——源實朝の前にて吾妻四郎助光弓術の妙技を演ず

仁治建長年間(一九〇〇—一九一五)岩櫃城内亂、下河邊行家之を鎮めて新に城主となるといふ

徳治二年(一九六七)——吾妻太郎行盛瀧峯山不動堂を創建すといふ

建武年中(一九九四—一九七)此頃行盛稻荷城より岩櫃城に移るともいふ

貞和五年(二〇〇九)——行盛、里見氏との戦に敗じて立石に自殺す、其の子千王丸榛名山に逃る。

延文年中(二〇一六—二〇)齋藤憲行(千王丸)岩櫃城を回復す

應永年間(二〇七四—八七)齋藤行禪岩下に應永寺を開基すといふ

長祿年間(二一七一—一九)齋藤行弘、川戸善導寺を切澤に移すといふ

應仁二年(二二二八)——齋藤行弘、妹婿柳澤直安を撃て其の城(今の觀音山古城)を取るといふ

大永元年(二二八一)——齋藤行連、瀧峯山不動堂を再建すといふ

同 七年(二二八七)——齋藤行連、矢倉行澤觀音堂を再建す

永祿六年(三三三二)——眞田幸隆岩櫃城を攻取り城主基國(加澤記には憲廣)越後に奔る

同 八年(三三三五)——十一月眞田幸隆嵩山城を攻取る、齋藤城虎丸自殺す

同 九年(三三三六)——海野長門守幸光、同能登守輝幸兩人岩櫃城代となる

同 十年(三三三七)——齋藤越前守基國の靈神照坊大天狗となりて岩櫃山に顯るといふ

元龜二年(三三三一)——武田信玄、沼田へ出張の途次岩櫃城に入る、眞田幸隆隨ふ

天正二年(三三四四)——眞田一德齋幸隆死し、嫡子信綱嗣ぎて岩櫃を領す。海野兄弟の城代たること故の如し

同 三年(三三五五)——信綱長篠に戦死し弟昌幸嗣ぎて岩櫃を領す、海野氏城代たること故の如し

同 七、八年(三三九四—四〇)昌幸岩櫃に在城す同九年二二四一昌幸岩櫃に在りて九月十三日切澤善導寺に參詣す

昌幸、海野長門守を討滅して岩櫃を直領す、或は天正十年ともいふ。

同 十年(三三四二)——昌幸武田勝頼を奉移せんとして城の背面郷原の小屋に御殿を急造す、勝頼天目山に滅びて



遂に來らず

夏矢澤薩摩守、昌幸の子源三郎信幸を奉じて岩櫃城に入る。信幸兵を出して大戸手古丸城を攻めて北條勢を驅逐す

同十七年(二二四九)——矢澤薩摩守頼綱岩櫃城に居る、十二月北條氏邦白井勢ら先鋒として吾妻に攻入る

慶長五年(二二六〇)——矢澤薩摩守岩櫃在城、關ヶ原の起る徳川家康牧野右馬丞松平隠岐守等に命し兵を平けて岩櫃を抑へしむ、兩人年末まで在城勤番す

同六年(二二六一)——岩櫃城代禰津志摩守幸度、瀧峨山不動堂を再建す

同十九年(二二七四)——大阪の殺起る、岩櫃城下平川戸町に於て立てたる市、徳川家康の怪しむ所となる、領主信幸城代出浦對馬守幸久に、急に平川戸町を觀音原に引下げ且つ城を破却すべきことを命す十一月觀音原に原町の町割を始む

元和元年(二二七五)——岩櫃城下町平川戸の觀音原引移し工事進捗す

同二年(二二七六)平川戸町の觀音原移轉完了し、郡奉行役所新に町裏に落成したれば岩櫃城を破却す、郡奉行役所址を今「御殿」といふ

天和元年(二三四一)——領主眞田伊賀守信利(信直とも信澄ともいふ)封を奪はれ、岩櫃城幕府の直領となり、其の山林は「岩櫃山御林」と稱せられ、御留め山即ち禁伐林なり。

同二年(二三四二)——天正十年眞田昌幸が武田勝頼を迎へんとして急造したる郷原村字小屋の「御殿」(潜龍院に與へられたるもの)焼失す

正保四年(二三〇七)——吾妻郡奉行金井彌平兵衛尉、岩櫃山頂上に天狗宮を建立す。

寛文十年(二三三〇)——金剛院の重源法印、氏子と謀りて天狗里宮を創建す(即ち岩櫃神社なり)

文政天保頃(二四七八—二五〇三)岩櫃山頂上に東照宮を奉祀すること公認せられ日光山東照宮御札納所となる。

明治四十四年(二五七二)——天狗里宮を大宮巖鼓神社に併合す、寛文以來の同社境内の杉の古木此の時悉く伐除せられたり。(新井信示)

### 一二一、岩櫃城裏方の古圖と巖下山潜龍院跡について

——武田勝頼に關する遺跡——

加澤記に

「眞田昌幸進み出て被仰けるは、諸方御敵に成ければ甲州へ御歸陣も無覺東御事也ければ某の領知上州吾妻郡岩櫃城へ御入有べし幸ひ近所箕輪の城は内藤大和、信州小諸の城には武田左衛門殿居住也ければ上田の城には其の嫡子源三郎に伯父矢澤薩摩守一族禰津宮内大輔、常田圖書、鞠子藤八郎小泉等籠置、上州沼田の城には弟眞田隠岐守簡居、某は御旗本に相詰忠信を盡し一度御運を計申さん、三千計の御勢三四年の御賄は御心易く被思召候と理を盡し被申上げれば、大將を始めとして御一門の人々一統に感じ給て神妙也頼母舖心底と御涙を流し給て早々御暇賜り二月二十八日早旦に御立有て吾妻へぞ被立ける……(中略)……昌幸公は是をば夢にも知り給はず夜を日に繼で急ぎ給ふ程に其の日の夜半に上田に御着有て廿八日(〇)晚岩櫃に御着有て……池田、植栗、鎌原、湯本、大戸、浦野を始め一郡の武士被召集岩櫃の居館に御座敷を御普請、其外小屋掛け不日可沙汰として榛名山、四萬、猿渡山田の山中に杣入を入れ材木を被取、夜を日に繼で御普請有ければ三日の内に御座敷附書院迄出來す」



とある其の御座敷は岩櫃山の何處に建築せられたのであつたか。

先頃、長野縣の史蹟調査委員で上田市史編纂委員を兼ねて居られる長友藤澤直枝氏が、眞田氏の遺蹟研究として岩櫃城址の調査に來られたので、私は金澤佐平君と共に案内役を務めた。其の時私は、信州松代の浦野種司氏方に岩櫃城の古圖があつて表の方裏の方と二つに描きわけて有り、其の「裏の方」といふ方に昌幸が勝頼を移し奉らうとして作つた御座敷の位置が示されてあり、且つ其の沿革が書入れて有るといふ事を藤澤氏から聞いた。藤澤氏は歸宅後直に、其の古圖の寫眞の載せてある本「上田築城三百五十年祭史料展覽會記念帖」を送つてくれたので私は取る手遅しと披いて見たら、それは岩櫃城址の眞裏で、郷原村宇小屋の奥の方であることが分つた。そして其の古圖には、其の座敷址の地點に

「此所コヤト云眞田安房守、勝頼公ヲ此城ヘウツシ奉ルベシトテ座シキヲ作置天和二年炎燒ス」  
泉龍院ト云山伏拜領ス」

と書込んである。

私は六月九日、現地を踏査した。岩島村大字郷原の村を小字「辻」の下から縣道に別れて右へ斜に岩櫃の裏山の方へ登つて行くと十町程で宇小屋といふ小部落に入る。此處は傾斜地であるから人家は後方（北方）へ段々高く位置して居る。そして其の一番高い處に須藤氏の家がある。此の須藤氏は古く矢倉の鳥頭神の神官で、加澤記にも須藤大隅として見えて居る舊家である。須藤老人は九十餘歳で存命であるから若しや御座敷築造及び其の後の事に關する傳説などを承ることが出来るかと思つて先づ其の家に就いて尋ねて見たが只潜龍院といふ山伏寺の址だといふ事と、潜龍院の後嗣に關する僅かの話しか聞くことを得なかつた。而して潜龍院（古圖に泉龍院）址は全部畑となつて居て須藤氏の直近くの關德十郎氏の所有であることを知つたので轉じて關家に就いて聞いて見たが是亦勝頼に關する傳説は聞き得なかつた。但し主人の好意有る案内によつて、其の家から東の方、少し坂を上つて數町の處に在る「巖下山潜龍院の址」といふ處、即ち古圖に謂ふ

所の「御座シキ」址を見せてもらつた。

土地は岩櫃山の中腹と申すべき高い處で、後ろ即ち北方は岩櫃山の裏の岩壁が約千尺の高さに聳えて居て危峰攢立の趣があり、前即南は崖と崖に續く傾斜地とて吾妻川の岸に達して居り東にも西にも袖の様に岩山の裾が立圍んで居て、丁度屏風を立繞らしたやうで眞に要害宜しく、此處に縦百間許、横五六十間許の平地がある。此の平地の岩壁直下の部分に、縦約三十間横約十數間の地が、特に東西南（北は高千尺の岩壁）の三面に石垣を繞らして居る。其の石垣の大部分は近年積み直したものであるといふが位置は昔のままであるとの事である。今は悉く桑畑になつてゐる。そして山崩により崩壞岩塊が其の一部を變形して居た。此の、三面石垣を以て繞らしてゐる處が潜龍院の本堂や經藏や庫裡のあつた址であるといふ事であるから、即ち御座敷址と推定せらるゝ處である。

其の約三十間程東の小丘上に、潜龍院代々の墓地であつて多數の石佛石塔が見える。其の石塔の中には嘉永六年安積信撰文の「當山中興東湖法印幸清墓表」を刻したものもあつて、それに次の様に述べてある。

師諱幸清、字若水、號東湖道人、其先出自眞田昌幸之族、天正中、昌幸與齋藤氏戰克之、築城于上毛岩櫃山、極爲天險。當武田勝頼戰敗時、昌幸勸據之、勝頼弗從、遂亡、麾下有禰津潜龍齋昌月者不欲仕二君、爲修驗者、居岩櫃城廢址、乃昌幸之族、而潜龍院之肇祖也。速烈祖統平天下、賜地若干、師其十四世之孫云（下略）

此の文は古圖記入の

「泉龍院ト云山伏拜領ス」

と正に相符合し、共に御座敷遺蹟は此處即ち潜龍院址であることを物語つてゐるものと思ふ。

明治維新、神佛分離の際、潜龍院は神職の方に轉向した。明治初年の院主は、前橋藩士保岡亮吉の弟鼎二といふ人で、婿養子として第十七世を繼いだものであつた。此の鼎二氏を私も知つてゐるが禰津を根津と書いたと私は記憶して居る。



鼎二氏は吾妻郡書記、前橋の赤十字病院の吏員などをして疾うに故人になられ其の子息は横濱邊で醫者をして居られるといふ話である。此の鼎二氏の嗣がれた頃に、由緒ある潜龍院の建物へと申しても天和炎焼以後のもの)は撤去されて其の本堂は引移されて今、原町顯徳寺の本堂になつて居ります。建物撤去と共に人も此處を立退いて初めは同村内に居られたが、今では或は前橋、或は横須賀といふやうに遠く他郷へ出て居られるやうである。

此の御座敷址へ来て見ると、浦野氏所藏の古圖そつくりの形勢で、御座敷址から斜に背後の岩壁の割目と崩れを登つて表の方即東面の城址へ通ずる小逕の有る處まで古圖と少しも違はない。(此の小逕を赤岩通りと云つて居る)

私は寫眞で見ただけで、未だ此の古圖の實物を閱覽したのではない。先日手紙を以て所有者浦野氏に、圖の何處かに、製作時代を示す年號は書いてないかと問ひ合せたが年號は書いてないといふ返事であつた。私の、寫眞を觀ての推測では岩櫃城破却(慶長十九年乃至元和二年)後百年内外の製作であらうと思はれる。所謂御座敷は、構築された天正十年を距る丁度百年に當る天和二年(二三四二)に炎焼した。其の炎焼記事が書込んである所から考へて天和以後のものであることは申迄も無く、圖に田邊橋が描いて無い處なども製作年代推測の一端ではなからうか。田邊橋の架設に就いては江戸時代の初期の終りから中期にかけて原町と川戸村との間に可なりむづかしい交渉が有つて其の關係文書も不少残つて居るから其の内調べて見ようと思つて居る。

(参考)

「野史」眞田昌幸の條

天正十年春木曾義昌、穴山梅雪叛勝頼、而屬右府信長、武田信豐等、各據其城保守、勝頼麾下不滿千騎、衆懷危懼、據新府軍議、昌幸請入吾妻城、以箕輪小室爲藩屏、以拒敵、勝頼從之、使昌幸先發(新府は龍崎なり)

「日本外史」武田氏の條

於是敵兵四面來薄、而新府城壁未全、勝頼徙避之嫡子信勝慷慨曰、事已至此、何之而免乎、當焚三旗與無楯、徐自殺而已勝頼未答、小山田義國欲誘執勝頼、以市織田氏也、説曰、臣邑岩殿險可保、眞田昌幸曰、弗若三臣邑吾妻險有積粟、請以死奉君、勝頼乃令昌幸先歸

「三河後風土記」卷十七「眞田小山田建議付新府退去之事」の條に

甲斐か根の雪消つくす彌生の空、世は春ながら勝頼か新府造營いまだと、のはす、大軍を引請防戦すべき様ぞなき、長坂跡部の佞人原周章狼狽さらに評定一決せず、眞田安房守昌幸父兄に劣らぬ智勇の巧者、進み出申けるは、上州吾妻は兵糧も澤山地利も險固、其上箕輪に内藤、小諸に典厩聲援をなせば、かた／＼防戦便り有と覺え候へば、只今より吾妻へ御引取然るべしと申、勝頼聞て汝か申所尤なり、早々吾妻へ歸り其用意して待へしとあれば、昌幸悦て早々吾妻へ趣ける(下略)

同卷「小山田兵衛逆意付勝頼入天目山事」の條に

勝頼無二の寵臣長坂釣閑跡部大炊助秋山攝津も、いつかたへか逃去しかば、頼切たる部等僅に四十三人と、女房の外はみなちり／＼に落行ぬ、十日(三月)には此所(駒飼)もみな敵となれば、いかにもして上州の方へ趣んと思へも從兵少ければ都留郡の天目山は甲州隨一の險難なり、此所へ立籠らんと出立に、(下略)かくて勝頼は三月十一日天目山の麓、田野といふ處で最後を遂げたのである。(八、七、二七日稿、新井信示)

### 一三三、瀧 峨 山

一、瀧峨山の位置形勢及名稱の由來

史跡、名勝、天然記念物



瀧峨山一名觀音山は、吾妻太郎の傳説で有名な岩櫃山の東の麓、原町市街の西端より縣道を西北に入る七町許の處に聳えて居る岩山で、巉巖峨々として鬼神の斧を加へたらむ如く、翠松紅楓其の間を點綴して、景致自ら秀拔なる上に、其の一方の直下は、一連の小丘を前にして深溪の趣を成し、其の谷底には鑛泉の湧出する所が有り、溪の窮まる處には壯麗なる三重の飛瀑が有り、飛瀑を右にし巉巖を後にし溪流を前にする處には六百年來靈驗あらたかなる大聖不動明王の堂宇が有り、山内には大小無數の天然巖窟や石門が有り、怪奇な傳説を留めて居る金掘坑が有り、頂上を初め無數の巖窟や岩頭には總計百體に餘る石佛が安置されて有り、高いと云ふ程ではありませんが其の海拔五百三十米の頂上に登れば眺望は頗る開豁で、東部吾妻の山川村落は双眸の裡に收まり、氣宇爲に爽快を覺える稀有の勝地であります。

此の山は、今「觀音山」と呼ばれますが、それは此の山に百番觀音を安置してからの稱呼で、古く見ても百八十九年以來の事であらうと思ひます。然らば其の以前は何と申したかと云ひますに六百有餘年の昔、不動明王を奉祀して堂宇を建立し、其の山號を「瀧峨山」と附けてから、その別當を奉仕した金剛院の文書には、「瀧峨山」と書き通されて参りましたが、俗には「松山」と呼んだと或る古老は申しました。加澤記に依りますと、岩櫃城形勢の敘述の中に

「城中町屋の北に岩鼓の要害あり」

といふ文句が有ります。此の城中町屋と云つたのは、原町の前身で、慶長十九年（三百二十年）迄、字上の宿に在つた城下町「平川戸町」の事で、此の平川戸町のあつた處と觀音山とは極近く南北に相望んで居ります事と、觀音山の頂上から西北にかけては今字「古城」と呼ばれる城跡である事とから見まして、「岩鼓の要害」といふのは此の山を指したものと考へられます。さうして見ると、昔は此の山を岩鼓と云つた事もあらうと思はれます。享保十七年（二百二年前）の原町古圖には、此の山の所に「古城」と記入してあります。

二、史蹟としての瀧峨山一名觀音山

### 1、不動堂

原町金剛院第十五世の法印圓聖の著「吾妻原町記」並に元祿十年同人著「修驗岩櫃語」に依りますと、今を距ること六百餘年前、第九十四代後二條天皇の徳治二年、岩櫃城主吾妻太郎藤原盛が城内安全武運長久祈願の爲城の東北の靈地に大聖不動明王を奉祀し金剛坊法印圓覺を別當とした之が瀧峨山金剛院不動堂の創始であると云ふことになつて居ります。爾來金剛院の法印が別當を勤仕して連綿今日に至つたので、本尊大聖不動明王は運慶作と傳へられて居ります。堂宇の改築も略ぼ明かでありまして、創建の後二百十四年を経て

大永元年（二二八）には、吾妻氏既に亡びて居て、當時の岩櫃城主齋藤氏第五代越前守行連が再建して居り、それより百八十年を経て、

慶長六年（二二六）には、齋藤氏亦既に亡びて居て領主眞田伊豆守信幸の臣、岩櫃城代禰津志摩守幸慶が改築して居り後八十三年を経て

貞享元年（一四四）には眞田伊賀守信澄の領地を沒收せられた直後（天和元年二三四一）領地を沒收せらる（金剛院第十三世の法印重源が改築して

居り、其の後は不明であります。堂内には數多の繪額が掲げてありますが、中に、狩野探信（？）の畫いた不動明王像の木額があります。奉納者は江戸兩國橋米澤町二丁目渡邊磯右衛門、奉納年月は寛延三庚午十一月吉日となつて居ります。

尙ほ慶應年間に、原町の有志新井善教、新井伊右衛門、新井義典等の諸氏が主唱して、成田不動尊の御分躰として松本良山（成田不動堂の欄間の彫刻をした有名な不動金兵衛）入念の作四寸七分の尊像を成田から勸請して此に併せ祀りました。其の當時は參詣人が踵を接して至るといふ盛況であつたと聞いて居ります。

### 2、城址、戦跡



瀧峨山一名觀音山の頂上から西北に續く一帯の地は、前述の如く宇古城と云ひまして、頂上から約二町の間、暫濠の址や曲輪の址が歴然として残つて居ります。此處は岩櫃城存在當時に於て、其の所謂出城、出丸としての要害であつたものと推定せられます。應仁の頃、岩櫃城齋藤越前守行弘(齋藤憲行其子行禪其の子行弘)の妹婿柳澤治部少輔直安と云ふ者が此處に在城して居りましたが、義兄行弘と不和の事が出来、應仁二年(二一八八)十二月晦日夜襲を受けて落城し、直安は伯母婿植栗城主植栗安藝守の所へ逃れたといふ傳説があります。此の傳説の書かれてあるのは原町金剛院第十五世圓聖法印元祿十年著「修驗岩櫃語」や著者並年代不明の「吾妻軍記」でありまして、それらには「岩櫃城より柳澤の城夜討戰の事」といふ題の下に、平澤大膳宗時が三百騎許を率ゐて夜襲をかけた事と攻防戰況とが可なり詳しく述べてあります。

加澤記に依れば、永祿六年(二二三三)眞田勢が岩櫃城に攻寄せた時、城主齋藤越前守憲廣(吾妻郡内の舊記には憲廣といふが國と書い)の嫡子越前太郎憲宗が此處を守つた事と、次男四郎太夫憲春が附近不動の谷の南で戰死した事とが詳記してあります。

### 3、金堀りの事蹟

瀧峨山觀音山には金掘り坑の跡が二つあります。一つは抜け坑で長さ四十間、坑道は平らではなくて上り下りがあり二三段の梯子の掛けてある所が二個所程有ります。他の一つは行き詰りで坑で長さ約二十五間、坑道は段を成して次第に下つて行きます。蠟燭を點して入れれば何れも五分間位で探險を了することが出来、一寸グロテスクな感じは致しますが危険な事はありません。是等の坑は、何時頃誰が掘つたのか其の真相は語り傳へられて居りませんでした。原町富澤家の古記録「天明元年に書かれた「新事實正記」といふ雜記帳の中に偶々次の一項がありましたので略明瞭になりました。

「里見御陣屋松平攝津守領分原町不動澤に金山有之とて寶曆四年の年足生喜平太と申者見立て江戸より桐山半右衛門と云ふ人を金主に付けて掘り始める。不動澤に山崎小屋掘り手の小屋二軒作り金掘り共十四五人にて丸一年の間に桐山も

金三百兩餘り掘られ切り仕まひ候。

後に江戸より三左衛門と申者参り銀山と見立て江戸兩國寅屋仁兵衛伴磯右衛門と申入金主元へに成り家來七八人同道にて参り瀧澤に借宅致して金掘り共二十人餘り立替り入替り二年半之内竹たいまつにて岩山を掘る。其内には諸々様々面白き事數度有り。ほり子六五郎といふ者惡事有之と云うて山法に行ふとて繩を掛け夜に入り村境山田川迄引出し髮刀にて片小鬘よりうしろ迄そり落し叩き放しに致す。其外色々をかしき事のみ有り。穴の奥へ百間餘りも掘り込漸く金のたまりへ障子一重に成り金のほほにてけむり穴に居られすいきぬきを掘り抜かざれば成り難しといふ金主も穴に入りて見るにむせかへりて入られず之に依つて片時もはやく溜りへ掘り付け度せき立つて火繩掘りとやらに成り火なほに火を付け壹時立つ内十五分づゝに日用賃銀を定め上より井の如くに掘り始め立替り立替り二十人許りにて晝夜を限らず百日餘り掘りて終に掘り付けければ金掘り共一人なしに夜逃致す。然る處穴を改め見れば羽ね髮の毛其外とうがらし鶏糞杯を焚きて煙らせし也終に寅屋も金子千五百兩目出度ほられ畢んぬ」

之が即ち此の金掘り坑に關する見聞記で、短い坑の方が桐山の方に、長い坑の方が寅屋の方に相當するのであらうと思ひます。寅屋仁兵衛の伴磯右衛門といふのは、不動堂内に掲げてある繪額の奉納者渡邊磯右衛門でありませう。只額面の年號が寶曆より四年前であるのが一寸不思議でありますが見聞記の寶曆四年は午の年ではなくて其の數年前の寛延三年即ち額面の年號が午の年である事などを考へ合せて見ますと、見聞記の方に若干の誤謬が有るやうであります。寶曆四年は今より百八十年前であります。(見聞記と申しましたも事の有つて後三十何年目かに書いたものなのです)

### 4、刀鍛冶の遺跡

慶應四年の夏、甲州の刀鍛冶宮澤正照といふものが此の山に山籠りして大聖不動明王に祈誓をこめ、不動堂の附近、今金山彦命の石の祠の有る邊で、吾妻の鍛冶屋二人を相手に大小數口の刀劍を鍛へました。其の作は原町金剛院を初め諸家



の珍藏する所であり、又現に生存して居る長命の老人の中には當時の状況を見たとはいふ人も有ります。金剛院所藏のものは三尺の大刀で其の銘は

甲陽住宮澤眞定劍入道正照

吾妻の住新井八内照國本田治郎照重

慶應四年八月吉日

といふ珍らしく長い詳しいものであります。吾妻の住の兩人の内、新井八内照國は原町字下之町の人本田治郎照重は澤渡のものであります。

三、靈場としての瀧峨山觀音山

瀧峨山又の名觀音山は、怪巖岩石と、無數の巖窟と、幽邃な溪谷とその溪谷の奥に輕々の響を立て飛龍を躍らせて居る大瀑布の存在する事とに依つて、自ら神祕境の感じを起させる處でありますのに、谷底から數十級の石階の上には、寂びを持つた不動堂さへ仰がれますので、人をして如何にも靈境に入つた感を深うせしめます。此の不動堂は僅に方三間の小さなものに過ぎませんけれども、其の存在は例へば畫龍の點睛であつて、眞に此の山の魂ともいふべきものであります。六百餘年の昔、岩櫃城主の命に依つて、此處に大聖不動明王を奉祀した金剛坊法印圓覺(又圓覺)は修驗者でありました。而してその子孫代々修驗者として別當に任じ、城主の爲に祈願を勤行して來たのであります。即ち瀧峨山觀音山は修驗者の開いた山であります。随つて修驗道の方から眺めて相當曰くのある山であります。不動尊有り、大日如來有り、觀世音菩薩の有ること即ち是れであります。

修驗道の事はよくは存じませんが、不動明王は「修驗者の念持修法の本尊であり、靈驗證得の保證者であり、すべての難行苦行の護持者であつて、修驗者は其の護持に依つて修業を成就する」といふのが修驗者の根本信念であるとか聞いて

居ります。此の山に不動明王が奉祀せられてから、單に岩櫃城の鬼門鎮護として城内安全武運長久の祈願所たりしに止まらず、多くの修驗者に依つて、あらたかなる靈場と考へられ、修業の道場と考へられて、古來此處へ御詣りに來たのみではなく、留まつて修行をもした幾多無名の行者の有つたことを私は想像するものであります。原町善導寺二十八世法譽上人本快が、天保年中此處の瀧壺の上の巖窟所謂奥の院に於て三七日間の修業をした事や現今我國南畫界の耆宿新井洞巖氏(原町の人)の兄君が少年の頃同様瀧壺の窟で斷食修業した事などは、未だに地方人の記憶に鮮かな所であります。

山の中腹、東向きの巖壁の下に、約三四十人を容れるに足る口の廣い大岩窟がありまして窟内には大日如來の石像を中心に石佛が數體安置されて居ります。「峯中の山も谷も行者自身の六根もさながら毘盧遮那佛の妙相で無くてはならぬ」と觀すべき修驗者にとつては、大日如來はその禮拜の對象として第一に認むべきものであるとも聞いて居ります。

それから此の山には前述の如く百番觀世音菩薩の石像が安置されて有ります。其の一つ一つの臺石に、一、三、五、二十といふ番號が刻まれてありまして、南大巖窟にある「坂東一」と刻んであるのを初めとして三十三番まで二通り、合せて百番百體、それが山中あちらの窟に三體こちらに五體、或は一體二體といふ様に、即ち山中一杯と云ふ感じのする様に分布安置されて居ります。古老は、東方の山中には坂東三十三番と西國三十三番、西方の山中には秩父三十四番が安置されて居ると申し傳へて居り、昔はその百番を悉く順禮出來る様に路がついて居たと申して居ります。最近青年團の盡力で、順禮道路の再び開鑿されました事は喜ばしい事ではありますが、安置以來年月久しい爲め、十體ばかり見えなくなりました事は誠に遺憾な次第であります。

此の百番觀世音石像は、何年に誰が寄進安置したかと申しますに、それは今確と斷言は出來ませんが、此の山への昔の入口である善導寺大門に、延享四年(百八十  
七年前)に造立せられた「百番觀世音菩薩供養塔」が有りますから先づ之と同年か然らざればその少し前であると云ふ事だけは云ひ得やうと思ひます。此の供養塔の臺石の上觀音像を仔細に拜して見ますと



その大きといひ、様式といひ、手法といひ、古さといひ、石質といひ、山内安置のものにそっくりであります。瀧峨山観音山の百番観音は蓋し延享四年又はその一兩年に安置せられたものであつて、原町の大通りと瀧峨山道との昔の分岐點たる善導寺大門前に、寄進安置の記念に道標を兼ねて、此の供養塔が建てられたものであらうと思ひます。殊にさうであらうと推定する一材料として此の供養塔の臺石に當時の有力者二十四名の名が刻まれて居り、その内十一名は他町村のものであることを注意して考へたいと思ひます。

その二十四名の氏名は左の通りであります。

良春坊、桑原市左衛門、萩原九右衛門、八卷忠左衛門、二宮清左衛門、湯本安兵衛、坂上治右衛門、町田茂右衛門、町田三右衛門、唐澤甚助、唐澤傳兵衛、矢島五郎兵衛、山口六兵衛、山口三郎兵衛、山口佐七郎、松井九兵衛、新井三郎左衛門、新井次郎左衛門、新井與一兵衛、阿部清兵衛、増田太右衛門、田村半兵衛、田村七右衛門、松井甚兵衛。以上さて此の觀世音菩薩を修驗道の方から考へますと、金剛藏王の現在の本地である觀世音菩薩は、現世の増益を祈る悲母として修驗者の有力な信仰對象である」と申しますから、江戸時代、念佛、巡禮の流行の風潮に乗じて、此の修驗のお山に百體安置といふ大事業が遂行されたのでは無いでせうか。

斯く觀て参りますと、大聖不動明王の祀られてあり、大日如來の祀られてあり觀世音菩薩の、祀られてある所の此の瀧峨山観音山は、何と申しても修驗道の一小靈山であり、一小道場であるといひ得やうと思ひます。山の東大巖窟内に觀音ならざる一石像が有りまして、その臺座右に「紀國那智山忍譽堪達」といふ文字が刻まれて有ります。又古老は此の山に熊野三社の窟といふのが有る筈だと申して居ります。今日ではどの窟が熊野三社の窟と云ふのに當るのか推定に苦しみませんが那智といひ熊野といひ共に修驗道の大靈場であり大道場である事を考へ合せて見たいと思ひます。

以上は修驗道から見た瀧峨山観音山であります、尙ほ山の頂上には、火防地藏尊石像、大山石尊の石祠、寶曆の年號

の見える多寶塔、弘法大師石像、子安觀音臺座（石像は今山下に在り）石燈籠、藥師如來石像等があり。山下、不動堂の附近にも數體の石像があります。これ程石佛の數多く安置せられてある山は先づ少なからうと思ふのでありまして只この一事からしても瀧峨山観音山は靈山ではありますまいか。

#### 四、餘 意

瀧峨山一名觀音山は、市街の雜沓を只僅かに離れた處に在るに係らず、深山幽谷の趣を備へ、涼々たる溪流あり、靉々たる瀑布あり、怪巖奇石と無數の巖窟とあり、翠松紅楓の之を點綴するあり、誠に自然の勝區でありますところへ、岩櫃城主の祈願所として由緒の古い靈佛の堂宇が有り、江戸時代に安置せられた百餘の石佛像が有りまして、更に之を靈境たらしめました。而して見様によりましては修驗道の靈場で、同時に道場であります。然のみならず城址であり、古戦場であり怪奇な傳説を留めたる金掘り坑あり、潔齋精進して金槌を揮つ刀鍛冶の遺跡もあります。名僧の斷食修行したる巖窟もあります。山はさして高くはありません、また大きくもありません。谷もさして廣くはありません、深くもありません、けれども、高山深谷でなければ見られぬ様な景趣を具備して居て、よく敬虔の念を養はしめ、史的感興を湧かせ、詩的情調を催さしめます所の勝區靈境舊跡の地であります。それ自身だけで、既に單獨に立派な存在であり得ますが、若し夫れ、すぐ近くに在つて、風景と史話とに富んで居る名山岩櫃山に連繫せしめて之を眺めましたならば、互に相映發する所があつて、更に一段の光彩を添へ來るであらうと思ひます。昨年自動車をも通ずる幅廣い林道が山の眞下まで開鑿せられましたことは訪客の爲に好都合であります。

### 二四、中之條町海藏寺跡の石刻文字に就て



中之條町大字伊勢町、中之條尋常高等小學校の南少許の處に海藏寺觀音堂址と稱する所が有つて殆ど全部畑となつてゐるが一隅に權現様の小祠が有りその祠前十間程の處に昔觀音石像を安置した臺石二尺五寸立方程の安山岩塊が有り、其の其の正面に數十の刻字がある元來平滑で無い石面に無造作に淺彫りにしたものであるから、細字は特に讀み難く、曾て同志金澤佐平氏と切りに撫掌した事も有つたがつひに判讀し兼ねたもので有る。此の頃百方苦心の末漸く其の大部分を判讀推讀することが出来るやうになつた。一寸奥床しい趣の有る珍らしいもので有るから左に之を紹介して同好の士の研究に資することゝする。

中野庄弘誓山海藏寺往古有

文和三(甲午)年建立同大永二年(壬午)堂建

吾妻三十三番順禮

ひろくしてちかひは深き海藏寺不思議の波の立ぬ日もなし 大永二壬午八月 日

我妻二十七番札所

同年中之庄川原町□同

御願文掛物堂供養有於中條

御堂開眼供養 並ニ

馬頭明王祈所奉修卅三ヶ所

各觀音法□□大永七丁亥六月十三日空心曼

久保田氏記之

齋藤越前守

右石刻文に依れば此の海藏寺觀音は文和三年即ち南朝正平九年(今より五百七十九年前に既に儼として存在して居り大

永二年(四百十一年前)に堂宇の改築があり供養もあり、同七年にも岩櫃城主齋藤越前守行連の時に供養が執行された事が知られる。

而して右刻文の参考となるべき舊記が二つ有る。一つは吾妻郡岩島村大字矢倉小字行澤の渡軍平氏所藏の「觀音堂棟札之寫」で、他の一つは同郡原町金剛院所藏同院第十五世圓聖法印元祿年間の著書(修驗岩櫃語)卷上の「岩櫃齋藤殿行澤觀音建立之事」中の記事である。

「觀音堂棟札之寫」は誤字が多くて判讀しかねるものであるが次の様なものである。

馬頭觀世音吾妻郡三拾三所順禮

之□二十一番行澤寺 本願岩下村

權律師行連

わたるより心も涼しなめ澤の水は甘露をそぐ我身に

時 大永七歲丁亥六月

奉 勤 修 守

於中條海藏寺堂開眼供養並馬頭明王□所

□修三十三所之各觀音法所

時代齋藤越前守

大永七曆丁亥六月十三日

右の文章は前半は行澤の渡觀音の棟札であつて後半は中條海藏寺に於ける供養記事であらうと思はれる。次に金剛院所藏の修驗岩櫃語卷上にある記は

史跡、名勝、天然記念物



「去程ニ齋藤越前大守行澤觀音ヲ造立シ玉フ緣起アリ儲シモ其後大永年中ナリシ時岩櫃城主越前守行連朝臣御年五十餘歳ニシテ剃髮被遊法師武者トナリ齋藤入道權律師行連トゾ奉號イヨク佛神三寶ヲ深ク崇敬被遊ケル去レバコソ大永七年水無月ニハ齋藤殿本願ニテ岩下村行澤ノ觀音再興建立有之總シテ吾妻三十三番之觀音ノ札所ハ前ノ齋藤殿之御代々ヨリ有之今之齋藤殿建立願文ノ掛物ニ云  
○二十一番 岩下行澤寺 本願權律師行連

十方佛土中

唯有一乘法

奉建立□吾妻三十三番順禮

無二亦無三

除佛方便說

巡禮歌ニ云フ

渡るより心もすゞし行澤の水はかんろをそゞぐ我身に

于時 大永七丁亥年六月日

同御掛物ノ裏書ニ曰ク

奉勤修守護於中條海藏寺堂開限供養並ニ

馬頭明王□所 時代齋藤越前

守□修三十三ヶ所六觀音法所

大永七丁亥年六月十三日

ト見エタリ右ハ如是納物觀音堂ニ靈室之什物トシテ有之委ハ行澤ノ觀音ニ詣テ拜見セヨ、但シ近代別當應永寺ニ有之といふものである。

右兩家の記録は同じものから出たものであることは明かである。書き寫しの間、繁簡多少の相違は有るが、大永七年六月十三日に海藏寺に於て開限供養の大々的に執行せられた事を述べて居る點は同じである。岩櫃城主齋藤氏六代中第五代行連の代が蓋し最隆極盛の時代であつたらしく思はれるから同人が入道發心の機縁に郡内三十三所觀音（吾妻三十三番は岩島村坂上村東村以東に有つて其の以西には一つもない）の堂宇の修理やら供養執行やらをしたものと推せられる。それで此の海藏寺址に有る石刻文は、同寺が往古から有つたといふことゝ、堂は文和三年大永二年等に改築せられたと云ふ事と、大永年間に大供養が行はれたといふことを後世に傳へるために刻んだものである。

然らば之を刻んだのは何時頃であるか。大永七年月日の下に久保田氏記之とあつても大永七年の彫刻とは思はれない。若しさうであるならばとても珍品である原町金剛院第十五世の法印圓聖著の「吾妻原町記」（元祿享保頃の著）に據れば「長祿大永前後の春當國吾妻順禮觀音あり中頃當國亂擊騷動に依り順禮中絶すると二（？）百五十餘年程なれど近代元祿年中に當國大塚の住人林氏の某専ら神心再吾妻卅三番觀音を取立る因茲今は毎年不絶也今は番附順禮歌等も次第不同是あり」

とある。之に依つて考ふるに右の海藏寺石刻文は此の順禮復興の元祿頃の彫刻ではあるまいか。

吾妻三十三番須禮を復興した大塚村の住人林氏といふのは吾妻郡名久田村大字大塚の豪農當時沼田眞田伊賀守の家臣、（尤も伊賀守は元祿の前天和元年に除封せられたが）で代官を勤めた（參兩貳人扶持）林利右衛門氏のことと同家は大塚觀音堂のすぐ近くに在つたので觀音順禮を復興することに熱心であつたことも首肯せられる。

さて右石刻文の筆者空心叟久保田氏といふのは誰であらうか未だ調べて見ないが、海藏寺趾の直ぐ前に今久保田旅館がある、同家は林昌寺に在る墓地石碑等から見ても、青柳家など、共に同地の舊家であるから定めて同家の祖先であらうと思ふ。田村丑十郎君は同家から出でて大字中之條町の田村家を嗣がれたお方であるから同君の御考究を煩はしたいと思ふ。



右石刻文に依つて四百年前に在つては中之條は中之庄であつたこと、それがやがて中之條とも書かれ初まつたことなどが窺はれる。そして中之庄川原町とある川原町とはどこかといふと、之は現今の大字中之條町と大字伊勢町との前身であつて、この兩大字は元一つのもので、吾妻川に近い低平の地に胡桃澤を挿んで、東西に長く人家が立並んで居たものである。之を川原町と稱したのである。處が文祿四年に其の西端の一部が別れて一段上の地（清見寺の東今下の町といふ處）へ上り元和八年より寛永二年に亘り更にぐつと上の荒涼たる王子原に上つて現今の中之條町を形成したのである。一方取残された形の川原町本部は此の新發展の中之條町と連絡を良くする事の得策なるを思つて承應元年に吾妻川畔の舊位置を棄てて、一段上の段級即ち昔伊參城の有つた段級へ上つて町並を立てるに至つた。之が今の伊勢町である。

以上海藏寺址石刻文紹介として私見を附記したのであるが、尙同好の士の是正補足を希望する。（昭和八、五、一新井信示）

## 二五、吾妻郡に於ける磨崖碑

磨崖碑などと申すと夫の支那あたりのそれを思ひ合される人もありませうが、之は實は極めてささやかなものであります。極めてささやかなものではあります。郷土研究資料として貴重すべき珍しいものなのであります。私の今迄に見ましたところでは吾妻郡内の磨崖碑は二つありまして一つは吾妻峽即ち關東耶馬溪に在るもの、一つは四萬川溪谷に在るものであります。今一つ大戸に在るとか在つたとか申されますが私は見て居りません。吾妻峽のものは七八十年前に於ける同所道路開鑿記念記事——といふよりは合力者連名——で、四萬川溪谷のものは百五十餘年前、知名の二人の學者が其處で袂を分つた記念記事であります。

### 一、吾妻 峽（關東耶馬溪）

#### 樽澤の磨崖碑

川原湯温泉の手前一里弱、群馬自動車會社の標柱「關東の耶馬溪東口」から西方約二町、吾妻川の水面を左手約百尺の直下に見る縣道上に長さ十間許の小橋が架かつて居る所があります。其處を樽澤と云ひ、其の橋を樽澤橋と云ふ。誤解の無いやうに申しますが此の橋は吾妻川に架かつて居る橋ではありません。吾妻川左岸の崖が、北へ急曲に彎入してゐるので其の急曲を避ける爲めに架けられた橋なのであります。もとは橋は架かつて居らないで、現在の橋の此方の袂から、北へ急曲に彎入してゐる斷崖の岩をゑぐつて僅に人の通れる程の路幅を削り出し、それを傳はつて崖に張りつく様にして通行して橋の彼方の袂に出た本當に危険な難所でありました。此の難所の長さは僅かに十五間内外に過ぎないのであります。若し此處が通れないとすれば、勿論谷底へは下れず又通れず、さすれば上を迂回するより外はないが、上といふのが又、頭を壓して聳ゆる約百尺の岩峭であるから、その迂回も亦困難極まる大迂回をなさねばならぬといふ所なのであります。でありますから昔の人も苦心慘憺して此の難所に斷崖横斷の路を鑿成し危険を冒しても通行したのであります。この難路の中央部、路面上三四尺の崖の面に、長さ六尺三寸幅一尺二寸の長方形を始めとし、それに隣接して長幅各一尺のもの一つ長さ三尺一寸幅一尺一寸のもの一つ、長さ一尺八寸幅一尺三寸のもの一つ、都合四つの長方形を磨き出して、その面に、此の難所開鑿制戒の記念文字を陰刻してあります。（文字は名勝吾妻峽の部にあり）

其の記念刻字を読み來れば、東部吾妻と西部吾妻とを連絡するこの最短最捷交通路の難所を改修する爲めに中之條町、原町、郷原、岩下、三島、松尾、横谷、長野原、川原湯、林、大前、各町村の有力者、並に横谷以西吾妻川沿岸の殆ど全部の町村が力を合せたのみならず越中麻買仲間や信州や江戸の商人迄も費用を寄附してゐることがわかり、且つ石工の名の刻んで有るので工事といふのは即ち岩を鑿ち削ることであつた事も明かに分ります。この八十八年前と七十年前との二



回の記念すべき改修工事によつて通行可能となつた此處斷崖峭壁の險路はつひ近年迄行人其の惠澤に浴してゐたのであつたが土木工事も進んで來交通愈頻繁となつた今日では急曲彎入を避ける爲所謂カーヴを抜く爲此所に橋を架けたので記憶すべきこの難路も廢道となつてしまつた、が橋の上から近く磨崖記念刻字の箇所も見えろし注意して歩めば元の斷崖も通れるし附近の斷崖峭壁は依然として舊態を存してゐるので昔を偲ぶには尙ほ十分であります。(四、名勝吾妻峽參照のこと)

二、四萬川溪谷、折田の磨崖刻字

天明の昔、儒者平澤元愷が山田村に町田延陵を訪ねての歸るさ、延陵に見送られて延陵の家に程遠からざる四萬川峽谷蝦蟆淵に架せられた蝦蟆橋(俗にはサイカチといふ)に至り其處で杖を分つたが、其の時元愷は矢立の筆を取出して路傍の崖の岩面に記念の文句を書きつけて去つた。それを村の人たちが空しく消え去るのを惜しんでその儘その岩面に陰刻した。故に此の場合に於ては岩面を磨いたのではないから嚴密の意味に於ては或は磨崖のといふ詞は當てはまらない。この事件は人口に膾炙してゐるのであるが、蝦蟆橋即ちサイカチの橋が廢絶して交通路が變つてしまつた今日では、もう何年となく磨崖刻字を見た人もなく、曾て見たことのあるといふ人さへその所在をしかと指せない様な始末でありましたところ、昨年十一月澤田村小學校職員諸君の郷土研究實地踏査に、同士金澤君と共に御件をした際、折田村の古老の案内により、上妻橋より上流約一町の折田側の崖の今は土石の捨て場になつてゐる處をロープに傳つて下つて行つて「この邊だ」と指示された崖を、上から崩れて來て被ひかぶさつた土砂を掻き除けて検討して行つたところ、果して文字が現はれて出ました。時刻が已に遅かつたので詳細には調査出來ませんでした次は次に十一文字は私に確に讀み得ました。

道澤元愷同 ……宿田君 ……

一十二

古い村誌に依つてその全文を見ると次の三十五文字があるべきであります。

鬼道澤元愷同

山伯繼宿田君

子孝家分手於

蟾蜍橋頭而行

天明壬寅夏四

月二十二日

右の文中、澤元愷とあるのは申す迄もなく平澤元愷で、田君子孝は町田子孝即ち延陵のことであり、山伯繼といふのは元愷の友村田伯繼のことであります。天明壬寅は淺間山大噴火の前年天明二年で今から百五十二年前に當ります。

附記 昭和十年三月二十九日聞く處によれば吾妻峽樽澤の磨崖碑は道路改修工事の爲めに破壊し去られんとしつゝありと誠に惜しむべきことである。(新井信示)

二六、川戸の淺間神社

原町大字川戸の淺間神社は、今でこそ無格社となつては居るが。それは時世の變遷といふもので、嘗ては吾妻三十三ヶ村の總鎮守と云はれ、吾妻太郎創建の傳説を持つて居り、武田氏や眞田氏等の崇敬の厚かつた證據の文書も残りて居り、社領の山林は榛名山續き七をね八谷に亘つた廣大なものであつたといふ古老の説もあり、社前の石の鳥居は領主眞田伊賀守の寄進したものであるといふ事であり、其の別當を勤めた七澤金藏院の境内には古い五輪の塔が有るといふ事等を聞いて居たので、今年五月三十一日、救濟工事の新道を見物かたぐ、私は一人で參詣に出かけた。

眞田伊賀守寄進の石の鳥居

石の鳥居は二つあつて、社殿に近い方の鳥居は、兩脚の中部以下が新らしく、其の新らしい部分に「修覆之施主、大島伊右衛門同平右衛門同久兵衛、元文三戊午年四月吉日」とある。之なりと思つて、脚のすつと上部の古い部分を注視すると、果して文字が刻まれてあるが、苔蒸した小文字ではあり、それか餘り高い處であるので判然と見えない。携帶の双眼鏡で仔細に観ると、右の方には「奉造立吾妻郡鎮守富士淺間宮華表、施主眞田伊賀守」とあり、左の方には「延寶七巳未天四月大吉日」とだけは讀めるが、あとの細字は判讀出來ない。延寶七年は今より二百五十五年前で、利根勢多吾

史跡、名勝、天然記念物

三〇七



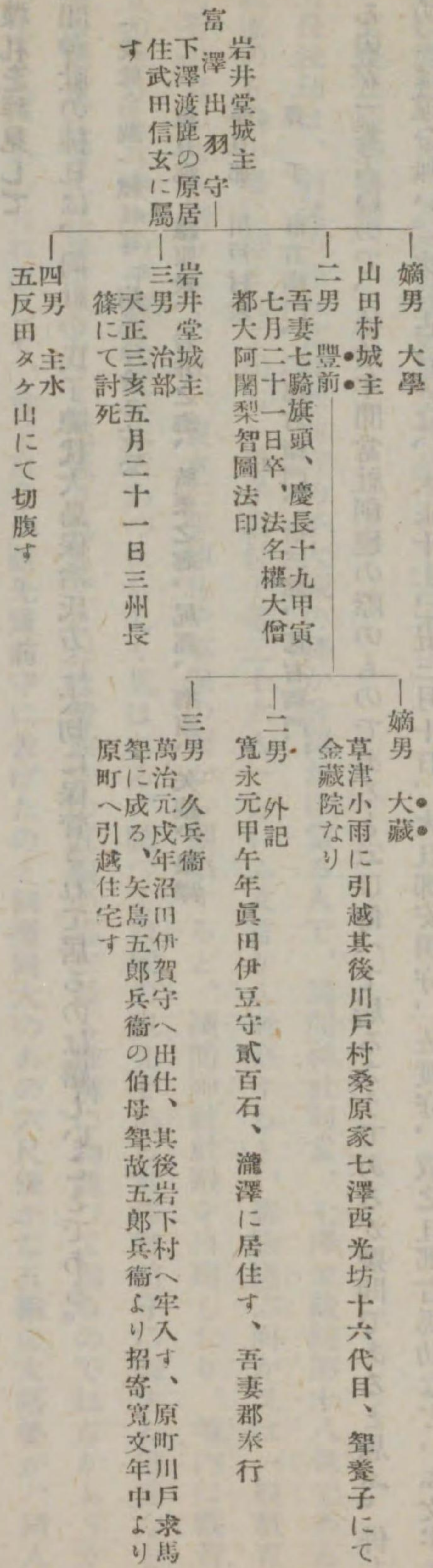
妻百七十五ヶ村の領主眞田伊賀守信直（初名信澄、後信俊、其後信直と改む）が、領内三萬石を十四萬餘石に内檢地して苛斂誅求を極めて居た時代で、綱吉將軍から領地を取上げられる前々年に相當して居る。吾妻郡鎮守の五文字と、施主眞田伊賀守の七文字とを含むこの金石文は、當時に於ける當社の社格を物語る大切なものである。此の鳥居を修覆した元文三年は、造立以來六十年目に當る。

富澤豊前守供養五輪塔並に玄長法印墓標五輪

塔社前に額づいてさて左後へ廻ると、すぐ側を流れて居る用水堀の向ひに、雄大な五輪塔が二基立つて居るのが目に着く。即ち叢を分けて行つて見る。五輪塔、雄大は即ち雄大であるが、其の型と古さの程度とから、一見「新しいな」と直感せられた。其の他輪の正面に「雄大僧都智圓法印、俗名富澤豊前守」右側面に「葬同郡山田村」左側面に「慶長十九甲寅年七月二十一日」とある。即ち山田村へ葬られた富澤豊前守の爲めに造立された供養の塔である。其のすぐ側に在る今一基は、全く同型同大同じ古さで「當山十八世別當七澤寺、權大僧都玄長法師、享保二十乙卯年三月十六日、施主弟子名付子等二十六人」といふ訓字が有るので、玄長法印の墓標であることが分る。前には慶長の年號があつてもそれは豊前守の歿年を表したもので慶長に建てたのではない。それで此の二基は同時に享保二十年即ち今より百九十年前に建てられたか、但しは豊前守の方が少し先に立ち、其の後間もなく玄長の方が建てられたかしたものであらうと思はれる。私は豫て、七澤寺金藏院址には、慶長在銘の五輪塔が有つて、それには富澤豊前守としるしてあると聞いて居たので、此の心を躍らせて来たのであつたが、見ればかういふ次第であつた。が、併し、其のすぐ前に、高さ三尺許の、嚴肅味のある古型の無縫塔（卵形塔）が一基有つて、それに「林等法印、慶長十二丁未天八月晦日」と見えて居るが、之は恐らく古いものであらうと思はれた。

富澤豊前守とは

富澤豊前守は、岩櫃城主齋藤越前守の重臣であつたが、永祿年中齋藤氏没落後、武田信玄の手に屬して眞田氏の配下となつた驍勇無双の侍で、所謂吾妻七騎の一人である。吾妻記や加澤記を開いて見ると、永祿から天正に亘つて其名が隨所に出て居り、何時も重要な役割を勤めて居る。原町富澤久平氏は其の子孫に當るが、同家に傳はつて居る系圖を拜見すると



とあつて、即ち豊前守は山田村城主で同村へ葬られたのであるが、其の嫡男大藏が、川戸淺間神社別當七澤金藏院の桑原家を嗣いだし、貞享元祿から享保にかけては、大藏の孫若しくは曾孫に當る玄長法師が金藏院第十八世として活動した時代であつたので、さてこそ此處に斯うした立派な、富澤豊前守に對する供養塔が建てられた次第である。山田村の方は未だ踏査して見ないが宇桑原といふ處の川縁の舊道端に其の墓といふのが有るとは聞いて居る。併し恐らく之といふ程の墓じるしでは有るまいと思ふ。

武人として活躍した桑原大藏

史跡、名勝、天然記念物



富澤豊前守の嫡男大藏は、川戸村七澤金藏院桑原家を嗣いだ後も、尙ほ武人として戦陣の間に馳驅したらしく、加澤記や吾妻記に、父豊前守や、伯父大學、叔父治部、同主水等の名と共に、其の名が幾箇所にも出て居り、金藏院に傳つて居た（現在は原町富澤家藏）有名な天正十六年四月二十六日附の「八幡山番帳」にも、一番組織砲方の中に桑原大藏といふ名が見えて居る。此の八幡山といふのは横尾村に在つた要害で、當時の守備隊長は大藏の父富澤豊前守であつた。尙ほ天正十八年三月には父豊前伯叔父伊豫守、其他一族と共に小田原征伐の中仙道軍に参加して大戸越をして松井田城へ向つて居ることが吾妻記に見えて居る。

棟札を拜見して

浅間神社の棟札は、同社の氏子總代大島保治氏方に大切に保管されて居るのは嬉しいことである。

「我此名號一經其耳 病悉除身心安樂

板旦那 鎌原衆、岩井之郷、植栗之郷、尻高、郷原、矢藏、泉澤

茅旦那 川戸村衆

葺手 市右衛門、二郎右衛門、拾三郎、彦右衛門」

とあるのが一番古いので、徳治年間当社創建の際のものであると云ひ傳へて居るさうであるが疑問であると思ふ。併し古いものには違ひ無い。次に古いのは、天正十七己丑三月十日、大旦那安房守、佐渡守、板之旦那右馬助といふ文字の見えるもので、此の二枚の棟札は、当社が吾妻三十三ヶ村の總鎮守たる貫祿を示して居るものである。右の第一のに依れば、当社造營の爲めには西の方鎌原より東の方尻高に至るまでの村々郷が寄進奉賀の旦那であるし、第二のに依れば、當時上田吾妻沼田かけての領主眞田安房守昌幸と、昌幸の重臣で岩櫃城に居て吾妻一郡の支配に任じて居たものと推定せられる池田佐渡守重安とが大旦那になつて居る。板の旦那右馬助といふのは、多分、渡（渡利、亘、とも書かれる）右馬助家次

であらうか、渡父子（家次の父は渡常陸介家貞）は海野長門守が岩櫃城代であつた頃の執權で、曾ては吾妻全郡支配の實務に當つて居たものであるが海野氏没落の後、眞田氏の配下となり、矢倉の行澤に土着したものである。今あの渡軍平氏は其の後裔であつて、右馬助宛の眞田信幸朱印状が一通残つて居る。尙ほ當時今一人右馬助といふ大身の侍がある。即ち狩野右馬助といふ者である。或は此の人かとも思ふ。狩野は八幡山番帳に一番隊の筆頭にあり、且つ副隊長格の人である。狩野は鹿野であつて多分中之條居住のものであらう。

玄長法印の事蹟

玄長法印は、前述の通り富澤豊前守の子大藏の孫か曾孫かに當る人で、浅間神社別當、七澤金藏院第十八世である。其の墓標の五輪の塔に刻まれて居る「弟子名付子等二十六人」といふ文言から考察すると、修験道方面か又は一般教育に相當功勞の育つた人物らしく、又、寶永三年棟札や享保の面から觀察すると、浅間神社社殿を再建したり、境内に觀音堂を建立のたりした中々の手腕家徳望家であつたらしく思はれる。随つて自家の祖先である富澤豊前守に對する供養などを必ずや鄭重に營んだ事であらうと想像される。それは豊前守の五輪の塔が最も雄辨に物語つて居るのではなからうか。さういふ人物であつたればこそ、曾て自分が祖先豊前守に告げたのと同型同大のあの六尺優かな五輪の大塔婆が、同人の墓標として建てられたものであらうと思ふ。

附記

浅間神社のすぐ傍に在つた別當寺、七澤金藏院は今影も形も無くなつて、其の址は畠になつてしまつたが、其の傳へた古文書古記録の一部分は同村の大島雄七郎氏方に保管されて居るといふ事であるから、機を得て拜見して研究を進たいと思つて居る。

尙ほ、加澤記は相當重きをなして居る史書であるが其の記述は全部が全部誤り無いとは申せない。加澤記と富澤家系圖



とを引合せて見ると其の間多少の喰違ひのあるのを發見するがこの點に就いては未だ調べて居ない。

(尙ほ又、私の今回の踏査が機縁となり、原町の富澤久平氏は六月二日、初めて豊前守の供養塔に詣り、其の叢の中に没して居る有様を慨いて墓掃除をなさる由語られました事は色々の意味に於て、目度度且つ嬉しい事でありませう)

(昭和九年六月四日 新井信示)

### 二七、山田の豊前様

——天正の勇士富澤豊前守について——

澤田村大字山田、字桑原耕地の東端、舊澤渡路に沿うて藍塔場がある。そこに、野石の墓が一つとこの耕地にある。不動尊の別當學圓院代々の墓とがある。その石塔の一群を北へ少し離れて、孤獨の姿で立つてゐる一基の無縫塔がある。無縫塔といふのは、よく僧侶の墓標に見るあの卵形の石塔のことで、もつと通俗に適切にいへば里芋のやうな格恰の石塔である。この無縫塔には文字が一つも無く、動植物等の彫刻も何もない。所謂無名の塔婆であつて、只、その形によつて、僧侶か法印かの塔であるといふことが分るに過ぎない。

この石墓を村の人は古來「ブゼンサマ」と崇め唱へて、何か願懸けなどをもして居るといふことである。私は、先頃、川戸の元金藏院境内の叢の中に在る六尺優かな立派な五輪の塔を見た時、その地輪(まん中の丸いのが水輪で、その下の四角な部分が地輪である)に彫つてある文字を讀んで、驚いたり喜んだりした。

權大僧都智圓法印 俗名富澤豊前守

葬同郡山田村

慶長十九甲寅年七月二十一日

とあるではないか。

富澤豊前守と云へば、戰國末期に於ける本郡の豪傑で、吾妻七騎の一人である。その人の爲めに此處に斯ふした立派な供養塔があつたのか。

その時私はまだ山田にあるべき筈の彼の墓といふのを見て居らなかつたので、今年八十三歳になる近處の老人に聞いた。「山田に富澤豊前の墓が今日も尙ほあるだらうか」と、老人は眉を擧げて語つた。「ある、ある、ありますとも。字桑原の舊道ばたにある」と、そこで私は小躍して探索にかゝつた。で、私が村の人に「ブゼンサマ」と云つてゐるのがそれだらうと教へられて訪ね當たのが即ちこの無銘の無縫塔であつたのである。

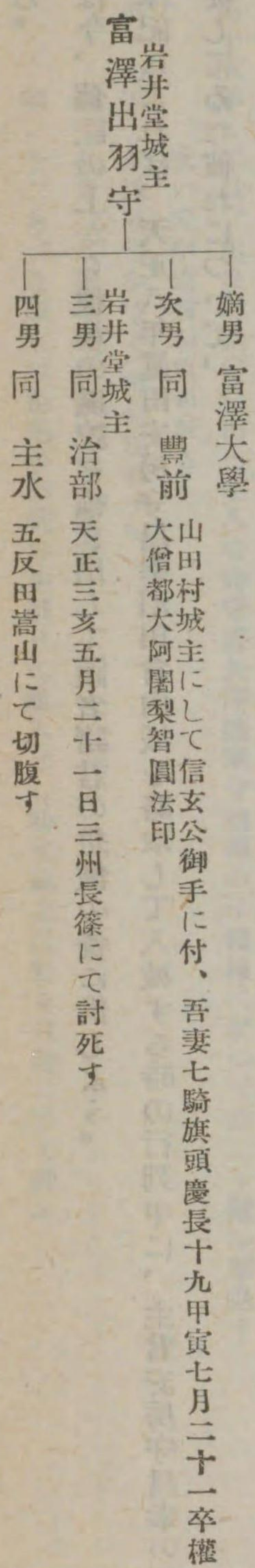
本郡の舊記録「吾妻郡略記」の一本に

澤渡古城、カノ原、城主富澤出羽守

出羽守病死ノ後、嫡子大學下澤渡ニ浪人ス

次男豊前山田ニ浪人ス

とあり、(大戸の田中理禎)又、原町富澤久平氏系圖には、



史跡、名勝、天然記念物







敵更に中山口より八幡の要害に迫るや豊前、岩櫃の援兵を得て之を撃退す  
天正十八年 三月、小田原總攻撃に際し、東山道軍（主將前田利家）の松井田城を攻むるや眞田勢先鋒たり富澤豊前は大戸越をして之に参加し奮戦す。

富澤豊前は實に斯の如き剛勇の士であつた。川戸の供養塔その物は立派なものではあるが草芥の裡に埋もれて居るのは氣の毒なことである。山田の墓は迷信家に願懸けなどをされるであらうが之も亦情けない姿である。かういふ景仰に値する吾々の先輩であり且つ名士である者の墓は、その子孫を待たず、吾々の手で清掃し顯彰して行くべきものではあるまいか諸君、特に澤田村や原町の諸君、農閑の時を以て、一つ奮發清掃しては如何です。

私としては、初めてその墳墓をつきとめて御詣りを遂げ、感慨にたへないものがあつたので見たる所と知つて居る所とを略敘して聊か郷土の方々に訴へる次第であります。

因に、富澤豊前の子孫の一人に當てられる原町の富澤久平氏は私の話を傳へ聞いて、早速、川戸の供養塔を弔ひに行かれ、その草むらの中に埋もれて居るのを嘆いて手入れをする事を思ひ立たれた。誠に結構なことである。村の人々の援助があれば尙ほ結構であると思ふ。  
(昭和九年六月二十二日新井信示)

### 二八、割田重勝の居住地及其最後に就いて

「上毛及上毛人」誌上で田村東谷君に呼びかけられましたので茲に見當つて居る所を記して御答へいたします。  
割田重勝が下總守と稱したこと、眞田昌幸の家臣であつたこと、並に其の馬捕りの事蹟が加澤記卷五に委曲記されてあることは、豊國先生の御註記の通りでありまして、私はそれ以上にどれ程も知つて居る譯ではありません。

吾妻記といふ吾妻郡内の舊記——私は未だ其の著者と著作年代とを知りませんが、著作年代は延寶天和の頃著者は尻高  
大塚邊の人で多分林彈左衛門に關係のある人と想像されます——に吾妻七騎といふものが見えて居りまして、それには七騎の人々が居村が記してあります。即ち

- |        |     |                           |     |        |      |
|--------|-----|---------------------------|-----|--------|------|
| 一富澤伊豫  | 岩下村 | 一唐澤玄蕃                     | 澤渡村 | 一富澤伊賀守 | 下澤渡村 |
| 一富澤豊前  | 山田村 | 一割田下總                     | 横尾村 | 一浦野平兵衛 | 原町   |
| 一蜂須賀伊賀 | 同   | (原町と云ふ名は元和以前には無し。何等か誤あらん) |     |        |      |
| 一富澤伊賀守 | 岩井堂 | 一富澤豊前守                    | 山田  | 一富澤出羽守 | 澤渡   |
| 一浦野平兵衛 | 三島  | 一唐澤玄蕃                     | 澤渡  | 一割田下總  | 横尾   |
| 一蜂須賀伊賀 |     |                           |     |        |      |

となつて居ります。右二の古記録によれば、割田下總は吾妻七騎の一人で、郡内横尾村に居住して居たことになりました。尙ほ吾妻記の割田下總の最後を述べて居る所を讀んで行くと、横尾村の字高須（今は高津といふ、古記録にも高須とも高津とも兩様に見えて居る）に居たやうであります。即ち

「高鳥死して良弓かくるとかや爰に割田下總と申者、武道專と稼き武邊しのびの名人なり去により信州河中島合戦の時越後の長尾謙信秘藏の刀を盜取子息下總に譲りける時遷り世靜になり昔の劍は鍛錬となり武道の奉公入らざれば知行に分れ妻子共身命續くべき便りなし遠近走廻り少々宛盜をして月日を送る誠なるかや下人は足元の敵とやらん其頃善六と申者召遣ひけるきやつ如何しりけん折々の盜の次第を出浦殿（吾妻郡奉行出浦對馬守幸久、時）へ訴人しけり則出浦殿より多勢を以て割田を討ち取るべきと仰せ付けらる頃は元和四年九月下旬折しも住所高須の入山畑へ麥作仕付に参りける



其留守へ足輕同心共外大勢押寄二重三重に家を取巻騒動す下女一人ありけるが急ぎ彼山畠へ駈行此由を告知らす割田聞くと等しく心得たりと立上りそばに置たる刀を取て腰に差し此處は掛場も悪敷とて上へ廻りて場を見立て石に腰掛け待居たり、案の如く多勢押來りきたなしや下總日頃の武邊には似合はざるぞ餘すなどぞ申ける割田之を聞いて推參なる奴原かな、いでとふ切にして捨べしと刀を抜いて待居たり、大勢なりと申せ共先へ進む人もなし、弓鐵砲にて遠あしらひにしたりける割田は事ともせず多勢の中に割て入切立れば左右へとつと退にける面も振らず切立、七人に手を負す鹿野又兵衛走寄て切付たり深手にて有ければどうと伏てこんくして有又兵衛はや首取やとぞ申ける鹿野和泉驅付ておう只今の有様は辨慶もかくやらんとほめながら首を取んとしたりしを伏乍ら片手打に拂ひければ和泉は足に當りけるされども首を取つて出浦殿へ持參する其刀脇差けん所の道具伊豆守眞田信幸様へ上りけるあを江刀を鹿野又兵衛に被下脇差をば鹿野和泉に被下ける彼傳光丸は御秘藏被成持れける伊豆守様も割田が盜は割田にあらず我いたせし所也と彌々不便に思召御涙を流させ給ひける。(中略)

偕鹿野和泉作名にて切られける故其疵終に直らずして次第にくされひろかりて終に死去せり。(吾妻記、福田本、木本、本二窓本による)

とあります。其の最後は誠に悲しむべきものであります。其の墓が横尾村に在るかどうか私は未だ知りません。加澤記に依れば、割田家は吾妻三家の一なる鹽谷氏の臣であり、大野氏が三家を統一し、齋藤氏が其の大野氏に代つて岩櫃城に據つて居つた頃は齋藤氏の臣として有名な家筋であり、永祿年間眞田氏が齋藤氏を亡して岩櫃城を取るや又其の臣となつたものであります。加澤記には、下總といふの、外に、割田新兵衛(又は新兵衛尉)、割田掃部(又は掃部介)、同孫三郎、などいふも見え、吾妻記には、割田與兵衛、割田與左衛門、割田隼人などいふのも見えて居ります。これらの人々と下總との關係についてはまだ十分に調べて居りません。

試に加澤記と吾妻記とから、割田下總一人の年譜を作つて見ますと、

割田下總守重勝年譜 (加は加澤記、吾は吾妻記)

- 天正の初 富澤伊豫の手に屬して市城口岩井堂要害を守る(加)
- 天正八年 眞田昌幸東上州出動勢揃の時小荷駄奉行の一人たり(加)
- 同年 八幡要害を攻めて敗退す(吾)
- 同年 再八幡要害を攻めて之を陥る(吾)
- 天正九年 尻高城を攻取る(吾)
- 天正十年 池田出浦等と共に嶽山城に籠る(加)
- 同年 眞田信幸、岩櫃城より急遽大戸城なる北條勢を攻むるや、信幸の御馬廻りとして參戰す(加)
- 天正十一年 須河にて北條勢と戦ふ(吾)
- 其の頃 只一人中山城に忍入りて偵察を遂げ且つ馬を奪つて騎つて還る(吾)
- 天正十二年 中山城攻撃の案内をなす(吾)
- 天正十三年 白井の原の敵陣に忍入り馬を奪ひて騎つて還る(加)
- 天正十七年 北條勢の侵害に備へて大戸口に向ふ(加)
- 天正十八年 松井田城攻撃に参加す(吾)
- 元和四年九月 鹿野又兵衛、同和泉(中之條の佳人)吾妻郡奉行出浦對馬昌幸の命を奉じ下總を居住地横尾村高須に於て討取る。(新井信示)

二二九、割田下總守の墓



吾妻郡名久田村大守横尾の、西へ深く入り込んだ谷を高津といひまして、人家は、南を受けた斜面に鱗次し點在して居りまして、この邊に割田下總が住んでゐたといはれるのであります。その屋敷址は今確かではありません。但し、彼れの最期の場所は、彼れが討手の人々を向うに廻して奮闘する時背後に負うた大岩石のある處で、此谷の奥であるといふ事があります。而して彼の墓と稱するものは、高津の谷と極近い背合せの南の谷長久保耕地に在ります。即ち同耕地の西隅山林際の畑中に、若い櫻の木が枝を蔓らせてゐるその下に自然石の二尺許の碑があつて、其處が昔から下總守の墓であると云はれてゐるのであります。案内をしてくれた村の人の云ふ處によれば、元はこゝに亭々たる老松が一二株あつたが先年伐つてしまつたのであるさうです。碑の表面に

一 叟良心居士 割田下總  
一 相真心大姉

といふ刻字が見えて居りますが無年號であります。傍に甚しく風化して居て刻字の分らなくなつた舟形小石碑が一つ、只の石と間違へられる様な状態に置かれておりました。思ふに之が元で、今のは後世の再建でありませう。

割田下總の墓の北方、耕地と人家とを隔て、約三百米の距離の林際に、唐澤玄蕃の墓といふものがあります。之は高さ三尺許の方錐柱形(兎巾形といひますか)の石碑で、正面に

一 宗道益居士  
一 容寶貞顔大姉

同會

位 延寶元丑年十二月六日

右側面に「唐澤玄蕃」、左側面に「割田下總女子」と刻んであります。近傍に「萬治三子年八月廿九日」の年月日の見える古い舟形小石碑がありますから、此同會碑も後世の供養建立でありませう。唐澤玄蕃は、加澤記にも吾妻記にも、割田下總とあらゆる場合に並び記されて居て、割田より役者は一枚上であつたらしい勇士であります。萬治に歿したとすれば年代が合ひません。年代を推考して見ますと、此の墓の主人たる玄蕃は、加澤記にも吾妻記に見えて居る唐澤玄蕃ではなく

して、其の子玄蕃であらうと思はれます。吾妻七騎の一人たる唐澤玄蕃の居住地は澤渡となつて居ります。併し此處にかうして、その子玄蕃の墓があり、且つ、長久保耕地の住民はすべて唐澤姓であつたりしますから、此の地は玄蕃に深い縁故があるらしく思はれます。長久保耕地の此の二つ墓の中間には、昔寺のあつた址であるといふ處があります。是等の專を考へ合せますと、割田下總の墓の、此の耕地に在る事が段々首肯出来るやうな氣が致します。

以上、先般の御答への補足旁々同士の御研究に資します。

因に、横尾村には、元、桃瀬觀音境内にも、  
捐館理白静閑居士 横尾采女正  
掩粧喜翁宗見大姉 室

願主 原澤儀右衛門、關忠平、同傳吉 善男善女人

といふ供養碑がありました。無年號であります。思ふに何年前かに誰かの主唱か指導かで由緒ある幾つかの墓を荒廢から救ひ出したことがあつたのでは無いでせうか、私に今一寸思ひ當る事があります。(九年九月九日稿 新井信示)

三〇、小栗上野介夫人与吾妻郡

——其の苦心逃走の跡——

小栗上野介忠順最期の狀況並に其の夫人の會津潜行に就いては、早川珪村氏が上毛及上毛人第六十九號に詳細記述せられて居るので、私は繰返し拜見して上野介の無辜を悲み夫人の辛苦艱難の跡を偲んだのであります。

早川氏に依れば、上野介は慶應四年閏四月五日の晚權田の村役人を假寓東善寺に會して決心を告げ、母くに子夫人みち子、養嗣子忠道の許嫁日下いき子を保護して會津へ潜行避難せしめんことを中島三左衛門に託した。三左衛門は嚴選したる數名の青年と己れの娘さい子と共に三婦人を護衛して會津へ奔逃避難せしむる任務に當り、六日上野介の烏川原に斬ら



れ其の遺族並に村役人等に對する官軍の搜索嚴重なるを見るや、直ちに潜行して吾妻郡入山村今、六合村最北の一大字の山田彌平治方に至り、十日隊を二分し、母堂くに子、日下いき子に、池田傳三郎・塚越富五郎・萩原五平次・娘さい子を附添はしめ、善光寺詣りに扮して入山村より草津温泉を避けて澁峠にかゝり信濃路を経て越後堀の内今、上越沿岸に堀の内ありに赴かしめ、自身は塚越房太郎・同源忠・佐藤源十郎・中澤龜吉等と共に上野介夫人を護り、山田彌平治に案内せられて謙信越と稱する間道の嶮岨を辿り信州の一角を掠めて越後十日町に出で、堀の内にて先の一隊と合し、新潟經由會津へ入つたのでありまして、其の途中の状況が可なり詳しく書いてあるのに、權田から入山迄の部分の記述は全然缺如して居るのであります。

そこで私は、今年の夏、上野介夫人一行の吾妻郡内に於ける経路並に其の状況の調査を思ひ立ち、心當りの處を踏査したり、語り傳へを聞合せたりしまして略ぼ其の形迹を掴むことを得ましたから、取敢ず之を報告して、此の上詳細な事蹟の發表せられんことを祈る次第であります。

一行の潜行逃走の跡を調査するのに、先づ以て心に留めて置かねばならぬ事は、一行中四名の婦人の内三名は何れも江戸育ちのかよわい質で、山路など歩いた事もなく、くに子は既に老年（四十歳を越えた上野介の母である）みち子は小柄で且つ妊娠七八ヶ月（六月十四日會津で女子を分娩した）、いき子はたわやかな御姫様であつたこと、謀叛人小栗の家族として官軍の御尋ねものとなつて居たこと、吾妻郡内は山岳起伏道路嶮惡、上信越國境附近に在つては、それが殊に甚しいこと、であります。更に今一つは、途中終始一隊で行動したのでは無く、時によつては二隊ぐらゐには分れたこともあるといふことであります。

權田から入山迄順路十二里、途中大小の峠は有りますが屈強の男子ならば一日に到着出来ないことはありません。けれども前記の様な次第でありますから恐らく早くても二日を要したものと見なければなりません。

通過路 其の一

約一里 約一里 約二里  
須賀尾↑——本宿↑——萩生↑——權田  
峠あり 上り

沿道に残る話には随分誤傳も訛傳も有り勝ちですからそれを其の儘直ちに信用する譯には参りませんが、煙を遠望して火の所在を想像する程度に考へるには差支なく、且當時十三四歳乃至二十二三歳であつた實見者も兩三名、現に生存して居りますので、地理を察して傳説を繋いで行くのに幾分の心強さを感じる次第であります。

一行は權田方面から人目を忍んで長井の坂を上つて萩生村今、坂上村の一大字に入り、關所のある大戸の宿を避けて左の方間道を峠越しに本宿村今、坂上村の一大字へ出て須賀尾村今、坂上村の一大字を通つたらしいのであります。

「萩生の權現平から本宿の吉岡薬師の下りへ出て、字水神原通り須賀尾へ通つたと云ひます。須賀尾の上原重五郎氏のうちに辨當の御櫃を置いて行つたといふ噂もあります」九年十月五日 本宿村某氏談

「須賀尾の上原重五郎方の貫ひ子に傳三郎といふものがあつて坂下（權田地方を坂下といふ）へ養子に行つて小栗の家來になつたが其の傳三郎が小栗夫人を連れて此所（本宿村字關屋）の高橋圓次郎といふ人の家へ來て泊めたといひます。其の後は道から一寸引込んで居て見えません。其の家には小栗が洋行中に求めたのだといふ品が一つ遺物として残つて居ます」九年十月五日、本宿村字關屋高橋方次郎氏談話

この話にある傳三郎といふ人物は、早川珪村氏の記述中に見える池田傳三郎に該當すると思ひます。池田といふ姓は權田にある姓であります。當時權田の名主は多分池田勘兵衛であつたらうと思ひます。

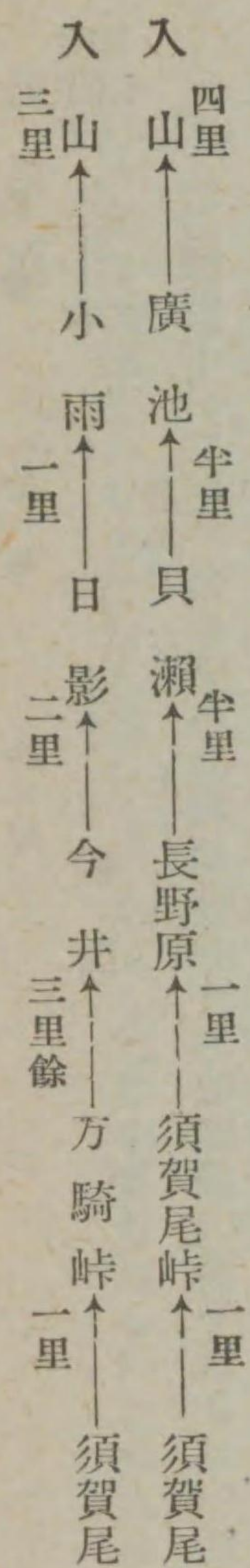
「萩生峠から入山へかけて通つたのです。萩生峠の峰に休んで居るのを此方須賀尾村から駕籠を以て迎へに行つて載せて通したのです。須賀尾村の字清水（鳩の湯温泉のすぐ手前で須賀尾峠への登り口）の先きの十二平で休んだのです



其の時駕籠昇き共に小判を一枚づゝ出して呉れましたが駕籠昇共は恐れてそれを受取らなかつたさうです」九年十月五日、須賀尾高橋眞道氏父君談

「傳三郎はもと信州中野の者です、夫人一行は夜來て夜直ぐ立つたのです。此所(須賀尾)のものが峠外へ駕籠に載せて行きました。夫人は懐妊中なので駕籠では揺られて何分からだによろしくないといふので途中駕籠を捨て、葛籠(山村で落葉を搔いて入れて脊負ふ大きな丈夫の籠のこと、正しくは葛葉籠といふべきでせう。草刈籠と似て居ますが少し違ひます)に入れてかついだのです。夜通しかついで長野原へ行つたのです」九年十月五日今年九十歳になる須賀尾村の上原重五郎氏即ち池田傳三郎と義兄弟の人の談以上の、坂上村に残つて居る話を綜合して考へますと權田から萩生、萩生から本宿、本宿から須賀尾、須賀尾峠と通過した様子が大體髣髴出來ます。早川珪村氏の記述中・新潟より會津へ向ふ時の様子を「數日の糧食を準備し夜陰潜に出發し本道を避け間道に入り溪流に沿ひて奔逃し晝間は樹陰或は荊棘裏に潜伏し夜間嶮岨を冒して走ること三日、名狀すべからざる辛苦と艱難とを嘗め……夫人が草刈籠に入りて脊負はれたり」と云ふは此時の事なり」とありますが、草刈籠に入れられたといふ話は此處の事の聞き違へか但しは駕籠よりからだの爲によく、且つ駕籠の無い處にも得易い乗物代用品であり、よし駕籠が有つたとしてもこの方が秘密漏洩の恐れも少いので、到る所で利用したのであつたかでありませう。多勢の道中、潜行は夜に限るといふ様な譯であつたのでありませうが、權田を距ること遠くない此の邊では、何にも構はず遮二無二急いだのかも知れません。で、重五郎老人の云ふ夜といふのは六日の夜か七日の夜か二つの中に違ひありません。

通過路 其の二



須賀尾の登り口から先きの分に少しく明瞭を缺く點がありますが、一行が入山を目がけて急いだ事は確かな事でありませう。

「赤岩(六合村の一大字)の關口周造といふ今年八十歳許になる人の話によれば小栗上野介夫人一行は貝瀬(須川溪谷最初の部落)を通過したといふことであります」九年九月二十日、長野原小學校長桑原一二氏談

「廣池の山本市兵衛(代々の襲名、其の時の主人は常五郎と云つて入山の字和光原から婿に來た人)の嫁そね(通稱いま)が路傍の畑で桑の葉を摘んで居たら品の良い婦人が非常に疲れて歩き艱み、男たちに扶けられてたどくとやつて來た。そね女はこの人達を案内して自宅へ行つて案内中してはつてやつた。舅の市兵衛(常五郎)は婦人を馬に乗せ自ら案内して、鍛冶屋敷(暮坂峠西斜面略中央の一地點)通りで入山村字和光原のヤマニ事山田彌平治方へ連れて行つた。當時市兵衛方は廣池一の金持で名主役を勤めて居た。之は私が祖母そね女から聞かされた話である」

九年九月十七日、廣池山本市兵衛の曾孫山本(逸名)氏談

これで見ると一行は全部か一部か分りませんが、須賀尾峠から長野原へ渡り(當時は琴橋といふのが長野原町の東端から南岸に架かつて居たのであつたでせう)それから須川橋を渡つて貝瀬に入り廣池へ上つたものと考へられます。廣池から鍛冶屋敷通り、暮坂峠路を横斷して入山へ行く道は今日でも盛に通行されて居る山道であります。

ところが茲に意外な方面に現はれた一隊がありました。即ち長野原町より二里も西に當つて居る今井村に残る話がかうなのです。

「今井村今、嬭懸村の一大字の名主唐澤利左衛門方を夜中に起こして數人の旅行者が入つて來た。家中は少々騒がしくなつた。當時十三四歳であつた次男の長次郎が好奇心に驅られて起きて様子を見ようとしたら父に「お前たちの出て來るところではない。寝て居れ」とたしなめられたので、臥しながら様子を見て居ると、侍の様な男が俺は誰某だと名乗つた



りして利左衛門と何かむづかしさうな話をした。男たちは一人の婦人をいたはつて其の白足袋をはいた足に草鞋を結びつけてやつたりした。そして夜の明けない中に出て行つた。後で聞けば村の人に道を案内させて立石坂を越えて立石へ出てそこから日影今、六合村の一大字でへ下り更に小雨今、六合村の一大字でまで行つて返す時に固く口止めをした案内に立つたのは村の熊川雷吉郎との二人であつた。當時是等の事を口外すると打首になると誠められて居たので暫くは決して人に話さなかつたものだ。九年九月利左衛門の次男實見者唐澤長次郎氏(八十歳)の談、黒岩敏而氏の聴取して報告せられたもの

「今井の唐澤利左衛門の話であるが、小栗上野介夫人一行は万騎峠を越えて狩宿へ出ての應桑である。それから蘆生田を経て今井へ上り、利左衛門方に泊り洞口の手前を横に通つて小雨から入山のヤマニ山田彌平治方へ行つたといふ長野原町

大字大津市  
村喜平氏談

万騎峠を越して狩宿、蘆生田、今井、立石、洞口の南、通り須川の谷へ下りて入山へ向ふのは随分の迂廻であります。併し何かの都合で一部分さうした経路を取つたのでありませう。さうとすれば狩宿には關所がありましたからそれを巧みに避けたいものと思はれます。

以上まだ、不十分な調査ではありますが、夫人一行の權田から入山までの経路が、其の通過状況と共に略想像されるのであります。

次に入山から先の様子に就いて聞込んだ事を少々記して早川氏の記述を補足いたします。

入山滞在から野反越えの事

中島三左衛門が夫人一行を護衛して辿りついた入山村宇和光原のヤマニ事山田彌平治といふのは村内切つての富豪で名主役を勤め、幕府の「目明かし」役をも兼務し御用提燈を預かつた家で、嘉永年間佐久間象山が鑛山調査の爲め入山方面へ出張した時も立寄つた家であるといひます。右様な譯なので三左衛門も豫て知つて居つたものでありませう。彌平治と

いふのは代々の襲名で、當時の主人は忠兵衛と云つたのださうであります。一行の同家滞在は僅か二三日に過ぎなかつたのであります。吾妻郡中の一番の山奥であり、且つは小役ながら幕府の役をも務めて居る家であつたので幾分安心して疲労を醫しつゝ、一方會津竄入長途潜行の大準備をもしたことでありませう。今年八十六歳になる山本清作老人の話によれば滞在中、夫人等は、新しい位牌に向つて涙ながらの鄭重な回向を怠らなかつたといふことであります。逃走潜行中の回向の状況思ひやるに哀れであります。

早川氏の記述せられた如く一行はこゝで二隊に分れたのであります。即ち、母堂、日下いき子二人には、中島さい子外數人が隨從し、善光寺詣りと稱して西の方澁峠越え、信濃路を経て越後に向ひ、夫人には中島三左衛門自身附隨ひ外に従者數名、大難路の事故半二頭を備ひ之に夫人を乗らせ(あとは誰々が乗つたか不明)牛方は村の山本七郎平、關勘兵衛、(勘左衛門といふものもあり)の二人、宿の主人山田彌平治は進んで案内者となり、村の人山本芳五郎・山田庄藏・本多勘次郎・山本權助等も雇はれて何やかや世話をしながら和光原から北の方上信越三國々境の高山峻嶺重疊せる野反通り越後の方へ向つたのであります。和光原から三里登れば辨天峠の頂上で、風光明媚な野反湖畔の處女盆地に出ます。此の地の風景は嘉永年間佐久間象山が一度通つて激賞した香野日記ものであります。一行殊に夫人は果して如何に眺めたでありませう。昔藤原師賢が叡山に於て囚はれ人となつて山を東へ下りながら琵琶湖上の風景を眺めた時の心情に思ひ較べられ更に一層の哀れを覺えます。野反湖畔の高原を北へ通過して湖尻の小さな峠を北へ越すと左は大高山、右は八十三山、大倉山の峻嶺のさし延べて居る山脚の重り合つた深山幽谷となり、その大倉山の山腹一千八百米に達する所を通過する僅かの細路が當時漸く牛の通へる程度馬には通れぬに開かれたばかりで、之を越後新道と云つて居ました。一行は之に向つたのであります。この大きな峠道を早川氏は「謙信越といはれた難路」と書いて居りますが謙信越といふ名を今では土地の人は忘れても居るのでせうか、さう申しては居りません。大倉中腹通りの新道の切り開かれる迄は即ち佐久間象山の通つた



頃は、野反湖脚から幽深な溪谷の底を、流れを何十百回となく渡り渡つて北へ／＼と行つたものださうであります。さて夫人一行は嶮難な深山の峻坂を、牛の歩みも遅く迎つて一日僅かに六里餘、大倉平といふ名ばかりの平の一地點に、新道開鑿と共に出來た御助け小屋の丸太小屋丸太を蒸籠の如く積み重ねて作つた校倉式の小屋で入山の山本林平といふ人が慶應に假泊の初から數年間休み茶屋を營んで居たが通行人が少くなつたので廢絶したといふ。に假泊し、翌日更に三里行つて信濃國の山中の和山温泉といふ寂しい温泉についてほつとしたのであります。入山から和山まで約九里の間、全く無人の境でありました。和山の一寸手前に切明といふ人家一二戸の村が和山で入山の人を大部分かへしそれから越後の秋成へ出てこゝで入山からつれて來た人を残らず返し、十日町を経て堀の内新潟と北へ行つたのであります。以上は入山の人で當時の青年、今は八十六歳の老翁山本清作氏、當時の少年で今は七十七歳の老人白砂温泉野花館主人山本類藏氏、山田彌平治の縁りの人・本多源治郎氏の話に、最近三年續けて入山野反を踏査した私の觀察を加へたものです。

### むすび

上野介忠順の篤き寄託を蒙つた中島三左衛門が、夫人母堂等を保護しつゝ百里敵中を潜行した苦心は眞に察するに餘りあるものであります。それ丈け彼れの功績は偉大なるものであります。其の吾妻郡通過に際しては、今井の利左衛門といひ廣池の市兵衛といひ、入山和光原の彌平治といひ、何れも義氣に富んだ行動をしてくれたことは嬉しいことであります。而して其の萩生・本宿・須賀尾通過に際して池田傳三郎の盡力蓋し尠なからぬものゝ有つたことを私は信するものであります。

本調査は誠に不十分なものでありますが、之を御覽下さいました諸君子が其の不十分を御咎め下さつて隠れて居る事實を續々御發表下されば幸慶之に過ぎぬ事と存じます。

(九年十月七日 新井信示)

## 三一、刀工蟻川若狹守に就いて

### 一、前言

由來吾妻郡は群馬縣の西北陬に位してゐて、一の城下町も無ければ又從つて名だたる劍客者もなかつたのである。然るに江戸幕府の中頃元祿時代から文政の終頃にかけて、本郡伊參村大字蟻川の地に數代に亘つて刀鍛冶が居住してゐて、中には京都に上り參内して若狹守に宣任さるゝもあり、又禁裏御造營にあつてはそれに使用する金具を謹作せるもあり、又刀工としては相當の名品を世に遺し、又出郷の後は沼田の土岐様に、或は川越の松平様に召抱へらるゝに至つたといふ事は吾人の眼に奇異の感を與へると共に吾妻郡の持つ一の誇でもあると信するものである。茲に筆を呵して不十分乍ら調査せるものを報するものである。

### 二、蟻川家の先祖

同家の先祖は遠く藤原冬嗣から出でゐる。冬嗣第二十九代の孫神保安藝守長國が、第百五代後奈良天皇の天文十五年(紀元二二〇六年)丙午三月に植栗城主(現在吾妻郡太田村大字植栗)となり、其の子神保佐左衛門重春が天正十四年(紀元二二四六年)十月十八日に蟻川村宇原岩本(同郡伊參村大字岩本)に移住して郷司となり、同地を開拓してその草分けとなつた。

その子神保彦兵衛重眞に六人の子供があつたが長子は家を嗣ぎ他は皆分家して一家を成した。重眞の第六子神保半兵衛の子に神保孫市といふ者があつた。

神保孫市の子が神保吉右衛門で、後の蟻川波右衛門藤原政吉となつた人である。同家が蟻川氏を名乗り又藤原政吉を名



乗つた最初の人である。藤原の姓は同家が藤門の出であつたからである。

第一代の蟻川波右衛門藤原政吉（即ち神保吉右衛門）の子が蟻川若狭守である。

波右衛門は始め、群馬郡權田村の人で、權田傳左衛門といふ刀工につきてその技を鍊り、上達するに及びて享保二十年（紀元二三九五年）に師匠より權田家の系譜を譲られ、同年冬十一月より、上州權田住政重（權田吉右衛門政重）と稱するに至つた。時に年四十一歳である。

その後五年、櫻町天皇の元文五年（紀元二四〇〇年）には、日本鍛冶宗匠三品伊賀守藤原金道より、上州吾妻郡蟻川波右衛門藤原政吉の稱を認可せられ、茲に始めて、僻陬の無名刀工は一躍して世に出で最早や押しも押されぬ刀工蟻川波右衛門藤原政吉となつたのである。時に四十六歳。

その後彼の技倆と信望とは愈々加はり、入門する者も日増にその數を加へつゝあつたが、寶曆十一年（紀元二四二一年）十一月四日不歸の客となつた。法號を「歸眞源海龍居士」と刻してある。現在彼の墓石の前には門弟一同の寄進にかゝる石燈籠一對が残つてゐる。惜しい事に一基の方は臺石や小上部が倒れてその邊に散亂してゐるが、他の一基はそのまゝ、現在してゐて、師匠に對する門弟の誠心と師匠の持つ技倆信望の程を心持よく物語つてゐる。

備考

三品伊賀守の家系は、相州鎌倉正宗の門人志津三郎兼氏の九代同兼道の嫡男金道が始めて三品伊賀守と稱し、その子金道が日本鍛冶宗匠の任に就き京都に住して全國の鍛冶職の取締役の如き職務に當つた。

波右衛門と交際のあつた伊賀守は、第三代の方で、その方から波右衛門宛の手紙を次に掲げて見よう。  
彌無別條珍重存候先年京郵朝尋（三字不明）存候就者拙者此度諸國鍛冶職取締ニ付致出府罷在候夫ニ付面談申入度用向有之候間門人之内四五人召連此使之者同道御出府可給候委細其砌可申述候以上

十月二日

日本鍛冶宗匠

三品伊賀守金道（花押）

蟻川波右衛門殿

三、蟻川若狭守に就いて

第一 代

蟻川若狭守は天保九年（紀元二三八四年）に生れた。

幼時より父波右衛門につき技術を鍊り、父の死亡當時（時に三十七歳）には最早や父に優るとも劣らぬ程に上達してゐた。そして父の死後は襲名して蟻川波右衛門藤原政吉を名乗つてゐた。

彼の技倆の程が上司の知る處となつてか、明和四年四十四歳の時招かれて上京し、第四代三品伊賀守の取次を以て參内し、若狭守に宣任せられた。かくて彼は上野住蟻川若狭守藤原政吉と稱するに至つた。彼の得意や想ふべしである。東國上野の僻陬吾妻郡蟻川の地に住居する一布衣の身を以て、上京し、參内し、若狭守に宣任せられた彼の心中や果して如何波右衛門が若狭守に宣任せられた時の

御繪旨は紙色薄墨色で、所謂御家流の筆致を以て書かれてゐる（現在前橋市堅町蟻川元治氏藏。同家は若狭守の後裔にて、同家ではこの御繪旨を薄墨の御繪旨と稱してゐる）

（其 一）

上卿日野中納言

史跡、名勝、天然記念物



明和四年八月二十四日

藤原政吉

宣任若狹守

藏人右中辨藤原紀光奉

(其 一)

藤原朝臣政吉

權中納言從三位藤原朝臣資枝

宣奉勅件人宣令任

若狹守者

大外記兼 藤原師資

明和四年八月二十四日

備考

繪旨とは、宣旨に同じ、任官の勅を頭辨に下さるゝを口宣とし、頭辨これを上卿に傳ふるを口宣案とし上卿その旨を受け  
て外記に下知するを、宣旨とす外記其旨を書して出すを、繪旨とす。これを頭辨より任すべき人に授く。(言海による)

第二 代

若狹守は生年月日は不明である。(現在蟻川家に傳はる系圖書には第一代若狹守で終つてゐる)死亡は文化十四年(紀元

二四七五年)であるから昭和十年より百二十年前に亡くなつてゐる人である。

京都の三品伊賀守と蟻川家とは代々親しく交際してゐたと見えて、伊賀守からの手紙が多數現存してゐてその手紙につ

けた木札も残つてゐる。(木札には 禁裏御鍛冶 三品伊賀守 と記されてゐる)  
その手紙の中、第二代若狹守に關係あるものを二三を擧げて見る。

(一)

其許祖父已來父若狹守政吉當時貴殿共三代此方弟子……。

御即位御用之節者代々致上京……。

當家前々より仕來候通可取候心得之事

一、不淨穢汚之具何によらず取扱間敷勿論刑罪之具等堅く(一字不明)爲禁制之事

二、(以下略)

右の手紙で見ると、天皇御即位の時は何時も代々上京して御用を勤めてゐたものと思はれる。吾妻の山間からはるばる  
京都まで上つて、多分數日間滞在し身を清め心を淨めて御用を勤めたであらう事を想像して見る時轉た無量の感に打た  
れるものである。

(二)

(前略) 京都は近來稀なる大火にて候。まことに申兼候へ共金子參拾兩借用致度御願申上候

(以上大意)

この手紙の大火といふのは、天明八年(紀元二四四八年)の京都の大火であつた。畏くも 皇居も炎上した時の事であ  
る。三品伊賀守の家屋も類焼に遭つたらしく金子三十兩の無心を申込んでゐる邊、若狹守と伊賀守との關係の程もうかが  
はれて面白き手紙である。

(三)

禁裏も大部立派に出來候につき來春ゆるゆる御光來被下度候 (以上大意)

禁裏の御造營は寛政二年に出來上つてゐるからこの手紙は多分その時に出した手紙であらう。

右の外に宛名に蟻川波右衛門と書かれ、又並んで弟子の名が四五名書連ねてある。處の書狀もあるそれには「禁裏御造



營に付新調の打物」の依頼狀が認めてある。

右の手紙から察するに若狹守は四五名の弟子を連れて上京滞在して、御用を勤めた事と思はれる。一布衣の身を以て禁裏御造營の御用を拜命したといふ一事實を以てするも、當時若狹守の技倆名聲の程も偲ばれるであらう。

第二代若狹守の子が多分第三代の若狹守を襲名したのであらうが、この方は父の死後十三年許り蟻川に居住して居り、後沼田へ出でて土岐様に仕へ又川越へ行つて松平様に仕へた人で、蟻川居住中の様子も明らかではない。又出郷に就きては次章に述べる。

#### 四、出郷後の蟻川家

時は文政十三年七月の事であつた。漬けた梅を土用于すべく妻女が庭にひろげて置いた蓆の傍で、三人の子供が餘念なく遊んでゐた。妻女が勝手仕事の手をやめて何気なく庭を振向いて見ると、乾してある梅を食べながら喜んでゐる三人の子供の姿が眼に映つた。驚いた妻女は手を拭ひつゝ走り出でて止めたがもう遅い子供達は數箇の生漬の梅を食つてしまつたらしい。

それから十日許りたつた。新しい小さい樞が三つ、蟻川家の樗造りの長屋門を出て行つた。来る日も来る日も、線香と花を持つたしほらしい妻女の姿が、蟻川家の菩提所の片隅の小さい土饅頭の前にたゞづんでゐた。

父（第二代若狹守）の死後、和歌吉は、遺された身代と、代々傳へられた鍛冶の職と、それから世の信望とによつて、何不足無く家も極めて睦まじく暮してゐたが、世にも換へ難い可愛い三人の子供の死は、彼を不幸のどん底へつき落した今まで明るく朗らかだつた世の中は急に味氣ない浮世と變つた。

間も無く和歌吉夫妻は旅仕度も甲斐々々しく、近隣の人達に見送られて懐しい墳墓の地を後にしたのであつた。（天保二年？）

故郷を出た和歌吉は沼田へ出て七人扶持を以て召抱へられた。沼田に足をとどむる事二三年で今度は川越へ移つて松平大和守に八人扶持を以て召抱へられた。

備考（川越城主松平大和守、名は齊典、明和五年前橋城が利根川の侵蝕甚だしく城の地割も變化したので川越城に移つた松平朝矩の裔にして第四代に當る加増されて十七萬石となる。）

當時世は追々と西洋文化も輸入されて來て、武器刀劍の類にもその變化影響を認めるに至つた。刀劍鍛冶和歌吉も遂に鐵砲鍛冶を始めるに至つた事も又時代の推移であらう。鐵砲鍛冶を始めた彼の苦心は並大抵ではなかつた。鐵砲各部の名稱にしても、それは原語の發音を片假名で表現したもので、記憶するの中々大事であつたし、細い部分品も造らなければならなかつた。

追々鐵砲にも慣れて來た和歌吉は、居る事約三十年文久三年に川越で死んだ。

和歌吉を嗣いだ人は貞之丞といつた。貞之丞は武州秩父の人で和歌吉の弟子であつたがその技の秀でてゐる處から主家を嗣いだものである。そして和歌吉の女なみを娶つて鐵砲鍛冶に専念した。

貞之丞の死後蟻川家を嗣いだ人は喜三郎といふ人である。彼は和歌吉の女ふさを娶つて主家を嗣いだのであつた。

慶應二年、松平大和守直克が前橋城の修理が出来上つたので川越から移つた。その翌々年即ち慶應四年、喜三郎も一家を擧げて前橋へ移り、久しく鐵砲鍛冶をしてゐたが明治四十年遂に死亡した。

現在の蟻川元治氏は喜三郎の女婿である。

#### 五、遺跡 口碑

蟻川家の屋敷跡は、伊參村大字蟻川の蟻川小學校を北へ距る約六百米許りの處にある。往昔、三國裏街道と稱し吾妻川の増水による交通杜絶された三國街道の裏街道として伊香保より吾妻郡に入り東、太田、原町を経て岩島村に至り吾妻川



に架せる萬年橋を渡つて原町から中之條町に出で伊參村蟻川を経て利根郡に入り須川を経て永井に於て三國の本街道に合する街道の道際にある。

屋敷跡は大體矩形に近い梯形をなしてゐて、面積は約六十アールである。

屋敷跡の南方に長屋門が現在してゐる。柱や破目板の大部分は樺造りで、表の門扉の柱の如きは三十糎角の樺で兜の形をした裝飾の金具がついてゐる。現在は間口七間奥行二間であるが、古圖面によれば三國裏街道に面して見世(店)が續いてゐたらしい、想像するに、製作品を陳列して販賣したのではあるまいか。その製作品といふのは主として日用品の鎌や庖丁や鉈の類ではなかつたらうか。そしてこれらの品が三國裏街道蟻川村の一名物として、往き來の人々の間に喧傳されてゐたのではあるまいか。

長屋門の裏と屋敷跡の北方と長屋門の南方とに井戸がある。内一箇は現在民家で使用してゐるがとても立派で深さも深い。北方にある井戸の如きは深さ二十米以上もあつて、地上部に使用されてゐる切石の如きは中々立派なもので相當磨き減らされてゐる處から想像して見ると、随分使はれた事だらうと思ふ。由來、刀鍛冶は使用する水の質と焼きを入れる水の温度とに特別の研究と他人の窺知を許さない秘傳とがあつたものだからだがこの蟻川家の屋敷跡にも三個の井戸のある處から考へるに、鍛冶に必要な良質の水を得べく掘つたものと思はれる。

北部は小高き堤の様になつてゐて、その北側は一段低く田圃となつてゐる。堤の上は篠が一面に生茂り杉の古木が數本昔を物語るかに立つてゐる。その篠藪から東北方にかけて今でも金糞(冶金の粕)や糞(ふいご)のかけが多數散在してゐる。

屋敷跡の東北方十五米程離れた所に石祠が現存してゐる。昔は檜造りの大きく立派な祠であつたといふ。毎年村社の熊野神社の祭典の時は、村民は獅子舞を神様に奉納して直ちに蟻川家のこの稻荷様にも獅子舞を奉納したのだといふ事であ

る。

東方に鍛冶屋(作業場)があつた。三間に五間半の大きさで、周圍に窓があつた。七五三繩で張り清められたこの作業場から、あの勇しい金槌の音が山の落付いた空気をふるはせたのである。(現存せず)

本宅は現在名久田村大字平の林昌院の庫裡として現存してゐる。間口十二間奥行六間で、廣狹あはせて室の數が八、他に細長き室、圍爐裏のある大室、廣き臺所等のある大構で、それに使用されてゐる材木も大きな立派なものである。現在のもは多年手を加へて昔のものとは少し違つてゐる。

蟻川家では農業も相當大きくやつてゐたらしい、それについては次の様な事がある。

本宅の一隅に厩が三個あつた。厩が三個あつた事は馬を三頭飼つてゐた事を裏書してゐる。馬を三頭も飼つてゐたとすれば、農業も手廣くやつて居た事が想像される。

古圖面によると本宅の西方に肥料小屋もあつた。二間に三間であるから相當の大きさである。又、口碑によると、糶を何俵となく川へ運んで浸したといふ事である。そして川へ遊びに來てゐる子供達に、糶を一升位宛呉れたなどといふ話も傳へられてゐる。とに角農業も大きくやつてゐた事が想像される。

本宅は弘化四年(紀元二五〇七年)に林昌院へ賣られて行つたのである。

最後に私は彼の作品について十分物語りたいと思ふのであるが、それに對する知識と研究とを私は持合はせてゐない。且その上に材料も少い、刀劍の眞の價値が現在の賣買價格によつて表現されてゐるとすれば彼の作品が優秀であつたか、否かを物語る事は易々たる事であるが、あながちさうであるとのみはいひ得ないものがある。従つて蟻川家數代の中どの人が技術衆人に秀でてゐたかといふ事も分らぬ。讀者幸にこれを諒とせられん事を。

## 六、結 語



以上で私の貧弱な調査による「刀工蟻川若狭守に就いて」の稿を終る事にする。現在私は蟻川家の故郷の小學校に勤務してゐる關係で比較的興味を以て調査したのであるが、調査研究の不十分である事を申上げて茲に擱筆する。

(昭和十年十一月 茂木俊一)

### 三二一、吾妻郡より發見の土偶につき

吾妻郡内に於て已に發見された石器時代遺物包含地は東部に於て十四ヶ所、西部に於て十八ヶ所、都合二十二ヶ所の多數に上り之から發見せらるゝ遺物も亦多種多様で、其時代の狀況を考察するに、貴重な材料だと思はれる物も少なくはないが。

土偶の發見は割合に少く、先年名久田村大字大塚壁谷地内、伊參水電の水路開鑿中、發見されたものが第一號で已に上毛及上毛人に豐國主幹より詳細發表(昭和四年二月號中谷治宇二郎氏の論文)があり、尙昨年開かれた郷土展にも出陳されたから、已に各位の御承知の事と思ふが其後壁谷で同地松本光太郎氏が第二號を發見したが頭部が缺損して居るので如何な顔をして居たか不明だが、乳房が一對丸々と胸部に突出して居るのより推して女の土偶で其大さ略第一號と等しく一對になるべきものではないかと思はれる。

處が昨春秋岩島村岩下、春原織平氏が同地小學校裏常盤公園に續く斜面の桑園より第三號の發見があり、續いて同地より南約三丁、宇前畑の桑園より脇屋武一氏が第四號を發見して、現在吾妻郡の發見は四個になつたのであるが、名久田村の發見の物と岩島村發見物と比較して見ると其形式が著しく違つて居るのが面白い、又原料も名久田村の方は良質で細いが、岩島の方のは非常に荒く特に砂を混じて製作したものだかと思はれるし、又其附けられて居る紋様が名久田の方は直

線の硬化紋様であるが、岩島の方は曲線の軟化紋様であつて、尙之等出土地から諸磯式土器の破片が多く發見せられるとより考察して、此間に重大の關係がありはしないかと想像されるのである。

○第一號 名久田村大字大塚壁谷發見 所有者 金田伊三郎氏

高三寸、底の周四寸六分、首部周三寸八分、鼻梁と眉毛の線隆起、鼻孔二、眼口共に丸形、頬に二線、額に三線の糸あり、胴部に直線の硬化紋様あり。

○第二號 同地發見 所有者 松本光太郎氏

高さ二寸、頭部缺損、底の周四寸六分。乳房二個、胴の下部に直線の硬化紋様あり。

○第三號 岩島村大字岩下發見 所有者 春原 織平氏

高三寸三分、顔面第一號と等しく鼻梁と眉毛の線隆起し、面は「ハート」形をなし、眼は細く線をなし鼻孔二つ口は丸くして内部に通じ、耳朶に耳飾を施すべき小孔あり、髪は島田形に結び、其側に左右二ヶの三角形の穴あり。

尙後頭部左右に同じく三角形の穴ありて、内部の空洞なるを知らる。咽喉の前面に三個のウズ巻紋様あり肩より後エリ部に點を綴りたる二條の線あり首輪を顯したるものか顔面のやさしさと島田まげを有するより推して女の土偶か。

○第四號 同地發見 所有者 脇屋 武一氏

高さ一寸九分、厚さ一寸二分、扁平の土偶なり鼻。梁と眉毛との線隆起しある事、第三號の如きも眉毛の部の上部缺損何か冠り居たるものかと思はれる。眼は三號より大きく略小豆形をなし、鼻孔一個丸形にして割合に大きく、口は内部に通じたる丸形にして其前面缺損しあり、耳無く、手らしきもの突出しあるも其先端缺損しあり胴部も缺損其長さ等不明頬部に左右二本の細き線あり、ヒゲを顯したるには非るか、裏面平にして曲線紋様あり眼の大なるとヒゲのあるのより推して男の土偶か。



附記 尙外に岩島村大字三島高橋彦次郎氏持地より發見せられた土場があるがこれは第二輯に譲ることとする。(金澤佐平)

### 三三、岩櫃山洞窟より貝釧發見

原町岩櫃山鷹の巢洞窟より彌生式土器や鮑貝の破片其他を發見された事は周知の事と思ふが、私は昭和四年十一月三日明治節式後青年と岩櫃山へ遠足して鷹の巢の洞窟に下つた。入口に注運が張つてあつて「此處は岩櫃城主の墳墓の地なり何人も侵すべからず、中之條營林署」といふ立札があつた。瓶の出たのは此邊かと思つて探してゐると、一青年が、こんなものがあつたと白い骨の様なものを示した。それが何んと貝釧の破片ではないか。

此貝釧は内徑縦二寸餘横一寸五分位で、全體の三分の二位だと想像される、輪の幅は二分位で腕に接する部分が平滑で丸味を帯びて居る尙探して見たが其外は見付らなかつた。此窟内で鮑貝の破片を發見し、今又貝釧の破片を發見したので此附近の洞窟が上古穴居時代に關係してはゐないか。二三の事例を左に示すと

一、原町出身の成功者石坂氏が(目下臺灣基隆に在住)昭和三年五月歸省して岩櫃山に登り、其節藥師岳の東麓エヂ穴或はエゾ穴と稱する四坪計りの洞窟から人骨二、舊齒二、彎曲せる獸牙一(長サ五寸巾二寸)石器並に其破片發見して、其寫眞を私に贈られた。

二、鷹の巢の洞窟の前面は崩壞して郷原の古屋に落ちてゐる、そこで古屋の關庄八老人が管玉二個を拾得して保管してゐる。

三、鷹の巢の西方は幕を張つた様な幕岩といふ處があり、其麓から人骨片、土器の破片が多數出る。  
(金澤佐平)

右の次第で、上古穴居の跡らしいことが歴然である。研究家の御研究を願いたいと思ふ。

### 三四、四萬温泉みやげばな誌

去る九月上旬より廿數日間四萬温泉田村旅館三層樓上に籠居中、温泉藥師社境内に於て、幸助遺言之碑と其表彰之句碑を發見し、又無聊に苦しむに餘り借覽した「吾妻郡誌」中に、種々見學したいものが目についた故、原町の金澤佐平氏をわづらはして、佛像を拜させていたゞいたり、奈良朝時代の寺院趾や、大戸の關趾等迄御案内を願ひ、大に見聞を擴めることを得たのは、偏に同氏の御厚意の致す處である、茲に私が過眼した重なるものを、おみやげとして諸君にお傳へするに當り謹んで感謝の意を表する次第である。

一、日向見藥師堂内木像銘と額

四萬温泉日向見の藥師堂は、三間三面單層茅葺四注造の小堂なれども、群馬縣の寺院佛堂中、唯一の特建物故、此地へ來浴する人々は必ず運動ながら參詣せらるゝことなれば、今更私の説明にも及ぶまいと思はるゝ故、擱筆するけれども、内陣の左右の佛壇にコネつけられてある小木像十數體の中に、左の如き墨書銘あるのを發見した。此外此堂建立當時の額と思はるゝ、其縁の上部に、日天月天、左右に登り龍降り龍を、而して下部に蓮瓣を彫刻してある、其中央に「日向山」

「道德禪門」

念佛百萬遍

奉造立供養處

本願永順阿利

永祿二己未四月一日

敬白

となるべきもので「奉掛御寶前祈願成就之所」「北上州白井町金井彌次右衛門、正徳二年辰八月吉日」と墨書されてあるのが目についた故、内陣に保管するやうおすゝめしてお

史跡、名勝、天然記念物



た。

二、遺言之碑と表彰之句碑

田村旅館の裏山に、温泉薬師神社がある、可なり御念入りな神社名であるが、蓋明治維新當時神佛分離さわぎの際、神職熟慮の結果、漸く小さい智慧袋より絞り出した社名と思はれて、微苦笑を禁じ得ないのである。此神地の崖近き處に、手拓した時報告した十月號上毛及上毛人の掲載の「四萬山中より」の記事の如く、高さ一丈七寸餘・幅二尺三寸餘の扁平な自然石に左の如く

「札

一 此櫻老木に

相成候はゞ幸助

櫻與御名付

可被下候 以上

寛政八丙

辰三月

」

と、御家流の書體にて記されたものが陰刻せられてある。而して其向つて左に並んで、高さ二尺二寸餘、幅二尺一寸ある之れ又扁平にして方形の自然石に、

「 幸介花王

人は武士はなは

佐久良も此さくら

江戸スルガダイ

長民

野分吹く共この

さくらをハ〜

文化戊季

と、筆太に陰刻されてある二碑が目についたのである之れによると此附近に櫻の老木がありさうなものと尋ねたれど「夫れらしきものも見受けざりし故、附近の賣店の老婆に尋ねた處が、去る明治三十九年七月に、大風の爲め吹き倒され、不得止伐木したことが判明し且つ此遺言主の爲め、數年前田村旅館の主人が、追善供養を營みし物語りを聞き、教へられし其墓石社地の北一段高き石垣の上にある」にお詣りせしに、角形の高さ三尺程の石塔の正面に「發誓誠願大徳」側面に「文化十二乙亥十二日七日」とあり、而して後方に建てられた木製の角塔婆に百十三忌云々、裏面に、昭和二年十二月七日施主田村茂三郎と記されてある故、同氏に質問するのが第一と心づき、早速訪問した處、主人曰く、幸助に就ては正確な傳説はなく、敵もちにて此地に來り、髮結渡世の傍ら勸進して、薬師境内に彼の寶篋印塔を建立したとの話の外、不明の山殊に獨身にて世を終りし爲め無縁故、誠に氣の毒に存せし爲め、先年法要を營みしとのお話であつた。そこで其寶篋（塔高さ一丈餘）に何か記してあるかと、其銘文を墨拓して見たけれども、

「竊以寶篋印陀羅尼塔者 諸佛秘蜜之奧藏毘廬肝

心之法寶也所以金手起

塊放光靈輝照萬草圓音

與實多其體同也記曰□

制底咸是開自心制底故 以心爲佛塔而已余寄寓

此鄉四十餘載所冀建塔」

「欲安置神咒尙今也容齡 八句手自撥荊□投瓦礫

□谷塾墟一字一石妙法 蓮華自浮圓臺旃這寶塔

史跡、名勝、天然記念物



五大所成一心所遍鱗角 羽毛飛光走躍永離惡趣  
 觸風踰影同燈菩提仰乞 四萬山川溫泉湧洗醫王  
 願主日月雨士神將護衛 鄉里安居諸人快樂無諸  
 史殃枚裔繁庭願主謹誌」 紫雲湧塔 天蓋地□  
 願呀頭 合掌恭養 一施一米 一華一香  
 頓斷破斫 無始殃殃 諸佛證明 神鬼禳禳  
 惟功惟德 與三曜長 時到文化萬曆丙寅命工  
 以石永謀不朽乃至一天 泰平風雨和順五穀豐登  
 文曰一見率都婆永離三惡 趣何況造立者必生安樂國」  
 (記者曰、以上活字になき字は□を以て填む)  
 と塔身に彫刻してあり、而して下の石段の裏面に、  
 「文化四丁卯  
 年五月佛惠日  
 願主 又左側には、  
 江戸屋幸助」  
 「世話人  
 湯本中」  
 無外壽量信士  
 本光妙瑞信女  
 明和辛卯十月廿八日」  
 「光明遍照十方世界  
 念佛衆生攝取不捨」  
 とあり、向つて右側に、  
 「信陽伊奈郡  
 田畑村石工  
 茂右衛門  
 高遠 塚村  
 八 藏  
 赤城村  
 曾助

「明和乙酉六月十日  
 と陰刻されてある、以上を綜合して推測すると、此幸助は銘文中に江戸屋と稱するは、恐らく玉川土水で産湯を使つた江戸子と思はれる、而して建塔の文化三寅年に「今也容齡八旬」とあれば、逆算すると享保十一年生となる故、此幸助櫻を

植え付けた寛政八年は數へ年七十一歳に當る故、所謂古稀の紀念として若木の櫻を植えて、斯く遺言の碑を建てたのではないかと思はれる。私は「此櫻老木に相成候はゞ幸助櫻と御名付可被下候」の字句の中に、其意を含んで居るやうに思はれて云ふに云はれぬおもむきがあり、而して自ら名乗らずして單に幸助櫻と御名付可被下と云はれた處が、誠におくゆか

櫻いではないかと思ふのである。  
 次に臺石に記された男女の戒名は、恐らく幸助の兩親であらう。果して然りとせば、四十歳の時の明和二年に父を失ひ四十六歳あ時の明和八年に母をなくしたことになる、然し幸助は文化三年に八十歳とすれば「余寄寓此郷四十余載」とあれば四十歳前後に此地に流浪して來りしこと明かなれば、幸助は何ん等かの理由の下に、兩親を江戸に残して此地に來住したやうに思はれる。而して四十餘年を経て、兩親の供養旁半生を送りし此地の繁榮祈願の爲めに妙法を一石に一字づゝ書寫して、此篋印塔を建立したやうに思はるゝけれども、其銘文には更に私事にふれず「余寄寓此郷四年余載所冀建塔欲安置神咒」と云ひ「仰乞四萬山川溫泉湧洗醬王日月雨士神將護衛鄉里安居諸人快樂無諸史殃枚裔繁庭」と云ひ「命工以石永謀不朽乃至一天泰平風雨和順五穀豐登」と云ふ如き願文を判讀すると、益々幸助其人の人となり忍ばれる。然し此銘文は願主謹誌とあれど到底俗人の筆になるものとも思はれざる故、無論お寺様の代作なるべく思はれるけれども、幸助の法名の下に大徳とあり此「大徳」の二字は俗人に用ゆべき尊稱にあらざれば、或は後年入道せしかも知れぬ故、或は願文は自作？ 此點は私には詳にし得ない處であるが、私は金石文に興味をもつて居り、可なり各種のものを見聞して居るけれども、斯くの如き遺言之碑は初見である、然かも夫れが國花の若木を植つけて其老木をまつて我が名をつけることを遺言の爲め建碑したのは何んと云ふ風流の話ではないか、然るに廿年後の文化十一年に此櫻を表彰した句碑を建てた、江戸駿河臺の長民も亦風流人ではないか、夫れが幸助が死去した前年に當つて居るのであるから、恐らく幸助も此碑の建立に就ては其相談を受けたことと思はれる、然し世の中は花に嵐の例への如く「此幸助櫻も植樹後百十年後の明治三十九年



に其形を失ひ村民にも既に忘れられんとして居る折柄、偶然私が此地に遊び不圖此碑が私の目にとまり、此程度迄成行が判明したのである。幸い明年は幸助死後千支二巡満百二十年に相當する故、二代目幸助櫻植附けのことを、田村旅館主に勸告せし處快諾せられ、幸い其實生がある故必ず來春適當の期に植えつけ、二代目幸助櫻と命名して建碑すべき旨仰せられたので、私もよい入浴記念が出來て喜びに堪へぬ次第である。

三、宗本寺之寶篋塔貳基

「吾妻郡誌」に「澤田村大字下澤渡宗本寺境内にあり寶篋院塔三基並立す、されど形稱異なり。其一は陰刻の文字一部磨滅して明かならず、試みに之れを補足して判讀せんか、左の如し。(○印は不明の文字)

○次郎入道奉造立也

上野國吾妻郡河戸村内○○○○○次郎入道奉造立也

右志者過去 利益

○○○○○慈父母法界平等○○

康永三己卯月○○

大檀那四郎次郎入道

とある、依つて一日同寺を訪問して、其古塔を見ると塔身の處に欄かんを設け、正面に階段を現はしある。此形式のものは上野には屢々見受けるけれども、我が下野には更に見たことのない珍なものである。郡誌には三基並んで居るとあれど實際は貳基にして其大なる方は高さ約七尺、而して其臺石の高さ約一尺、幅約一尺九寸の正面に、

「上野國吾妻庄河戸村

内山田住人大檀那四郎

二郎入道奉造立塔也

右志者爲去慈父悲母

之幽儀乃至法界衆生

平等利益也

康永三年甲卯月上旬

大檀那四郎二郎入道

と判讀し得たのである、之れを前記の郡誌記載のものと對照すると、誤字脱字を發見し、而して其不明と稱する文字も判讀し得たるのみならず、他の同形の高さ約六尺の臺石の高さ約一尺餘、幅一尺六寸餘の正面に

「康永二年卯月十九日

大檀那沙彌道禪敬白」

と陰刻しあるのを發見したのである、以上を對照して見ると、郡誌には「吾妻郡川戸村内出」と判讀しあれど、郡は庄の誤讀たる事明かにして「川戸村内出」は現に原町大字川戸の小字に内出あれば、斯く判讀せしかと思はるゝけれども、私は「川戸村内山田住人」と判讀したのである、地圖を案ずるに此宗本寺前の川を距てる地點に大字山田あり、而して郡誌に「澤田村大字山田字山の上に、山田城址あり、加澤記の所謂山田の要害は即ち之れなるべし、永祿中山田源太左衛門に至りて之れを毀てりと云ふ」とあり、其詳細は不明なれど、此大檀那四郎二郎入道は、此山田氏の祖先なるべく、而して他の一基の「大檀那沙彌道禪」は、此四郎二郎入道の法名なるべく思はるゝ次に今回私が此墓地内にて掘り出した、小形の寶篋塔の臺石、高さ六寸五分、幅一尺のものに、四方に銘文あれども、面は漸く左の如く判讀し得たれど、

「野州吾妻庄 大檀那沙彌

史跡、名勝、天然記念物



内山田之○人

教○ 敬白

○阿彌陀佛

○○○○○

○○○○

○○○○○

他の貳面は殆んど不明なるは、甚だ遺憾である、然し兎に角「野州吾妻庄内山田之○人」だけ判讀し得たるは、全く拾ひものにて就中上野國を「野州」と稱せし例は他に類なく誠に珍と思はれるのである。

附言 此銘文中「川戸村内山田」に就ては、原町の新井信示・金澤佐平兩氏は未だ「内田」説を主張し居らるゝも、前記の兩銘文を尙一層御熱覽の上、御判讀が願ひたい。

四、吾妻太郎之墓

太田村大字岩井長福寺境内にあり、吾妻郡誌に、五輪塔三基並立す、中に在るもの最も大にして高さ六尺八寸、臺石に「藤原行盛本阿彌陀佛、貞和第五廻五月廿五日子刻死去」右は上石題して御内といひ、左は臣下といふ、稍古様を存するも疑ふらくは其當時の物に非らざるべし。

(岩井村誌)長福寺縁記を按ずるに、本寺は素吾妻太郎行盛の菩提所にして、古くは村の西小字八幡に在り元祿中此地に移すとありて、寺中行盛院殿當寺開基上野刺史岩櫃城主長福圓久大居士、貞和乙丑五月廿五日逝去の位牌を藏す、吾妻郡略記には、長福寺は原町岩櫃城主吾妻太部行盛開基なりと云ふ、昔は村の内に寺地あり、元祿年間山の上に移す古寺場の中にありし塚穴より、元祿四年六月十六日に佛像出づ、金佛一寸八分の觀音なり、臺座に行盛と彫刻あり、之れより塚の上に古き五輪あり、高さ五尺三寸、臺に藤原行盛貞和五乙丑五月廿五日と切付あり、この外無名の五輪三つあり大さ同じと、尙實地につき調査するに、大形の五輪塔以外に小形の五輪塔散在するを見る、以上を綜合して考ふるに、小形なるものこそ舊寺中にありし實物にて、大形は岩井村誌に記せる如く、元祿時代に新造せしものならん、果して然らば吾妻

太郎墓は、古くは岩井長福寺古趾にありしものならん」と記載しあり兎に角吾妻太郎は此地方の豪族故、其墓は見ておく必見ありと、御苦勞様にも同寺を訪問して、其五輪塔を一見せしに、其様式手法決して元祿時代のものに非ず、三基とも四方に、發心點、修行點、菩提點、涅槃點梵ある字を各輪に彫刻しあり、左右二基は全く磨滅して判讀し得ざれど、中央の吾妻太郎之墓と稱するものは臺石に「御内」(何んの意味か不明)と彫刻しあり、而して地輪の高さ一尺三寸、幅一尺八寸の正面に

「藤原行盛法

本阿彌陀佛

梵字(阿字)

五月廿五日子時死去

貞和第五廻己陸月十二日

と陰刻せられて居る。之れによると行盛は貞和五年の五月廿五日子時に逝去せられ、而して十八日後の翌月十二日に此墓を建立せられたことが明かにて、斯く死亡の月日と刻限、又建立月日等を並記したるは、類例少なく誠に思はれるゝのみならず。第五廻と云ひ陸月などと、數字を漢字で書いたのもめづらしく思はれる、然るに郡誌には實地につき調査したと稱しながら、誤字脱字全く多くデタラメの記載には嘔然たらざるを得ないのである、殊に小形の五輪塔散在すと稱しながらろく之れを顧みざるものゝ如く、左の如き珍銘文あるものをお構へなきは、直接此調査に従事せし編纂委員の不熱心不忠實には、少々驚かざらんと欲するも得べけんやの次第である。

私の目についたものは、五輪にあらずして小形の寶篋塔臺石にて、高さ約七寸餘、幅一尺一寸五分の四方に

- (1) 「○○○
- (2) 「○○○
- (3) 「○○
- (4) 「逆修善



〇〇〇 〇〇 〇 根應安  
 〇〇〇 〇〇〇 比丘尼 七甲二月廿  
 〇〇〇 〇〇 〇 從源爲 四日曹江

從源敬誌 (〇印は光明眞言の梵字)

と判讀し得る程のものである(殊に法名の曹江字名の從源とを記した如きは一寸おもしろい)私が此地に行きし時は降雨中にて、自動車の發車時間にせまり、此以上精査することを得ざりしが、他に累積せる中には必ず銘文あるもの存在すべく思はる、故、お近くの新井金澤兩氏の御精査が願ひたいものである。

由來郷土歴史家は、如何なる理由が金石文を輕視する傾向あり、何方の郷土郡誌等を拜見するに、可なり名高き墓碑さへ掲載せられざるもの不少、偶々掲載するも前記の如き地方有名な人々のものさへ誤字脱字多く、實際調査して記載するが如き忠實な編纂者は、誠に少ないやうである。然し地方の文獻は全く少ないものであるから、間接的史料たる金石文は地方の研究者としては忽かせにすべきものにあらずと私は考へて居るのである、茲に郷土歴史家の一考を促す所以である。

五、中之條町林昌寺の板碑

此板碑に就ては、金澤佐平氏より頂戴した「吾妻郡内板碑調査」と題する小冊子に據ると、高さ三尺八寸、巾一尺一寸五分、上部に瓔珞あり、其下に背光ある彌陀の立像あり、大永八年二月日と、左右に花瓶一對が陰刻してあると見え、然かも郡内四十餘の板碑中の最優最大のものとのあるのを見ては、之れを見ざれば罰が當ると、同寺を訪問して墨拓すると、上部瓔珞と稱するは現今電燈の笠に能く見る花の片如き形の瓔珞のない天蓋の下に、輪御光を背にする彌陀一尊が陰刻してあり、年號は大永にあらずして、明かに「文永八年二月日」と現はれしより、御案内下されし金澤氏はこれはくるとば

かり誤讀を自覺し、反つて大に喜ばれ之れが郡内最優最天にして且つ最古の年號のものなりと仰せられた。此外彌陀の種子以上缺損し脇侍の二字以下に「建武〇年とある、巾九寸高一尺五寸の破片を逆に用ひ「正寶滿山」と陰刻したものがあつた、寶滿山とは林昌寺の山號なれば、蓋道するべに建立せしものならん?・後の刻入の標本として墨拓しておいた。

此外金澤氏藏の石器土器及び古墳物を拜見し、原町の古寺院趾岩島村大字行澤の足利初期の佛像、澤渡の板碑、澤田村山田の石器發見地、陶ノ器の大破片、大戸關趾等を見學せしが、餘り長文になる故、一と先づ擲筆する。

(十月三十一日記 足利市丸山瓦全氏)

三五、横尾の水牢

名久田村大字横尾字七日市に在り、俗に忠兵衛屋敷と呼ぶる、場所に近く、今は殆ど埋没して原型を止めず。唯牢の周圍に積みたるものと覺しき小石附近に散在し、石の下より湧水あり。眞田伊賀守之を設けたりといひ傳ふ。名久田村委員報告

三六、淺間山麓避暑地

淺間山麓六里ヶ原は海拔一千尺を超え、一望の平野の中に淺間の噴煙を望み、夏期避暑地として此處に別荘を設くもの少なからず。今其重なるものを左に

一、一匡村

淺間山北麓北輕井澤に天明の淺間噴火の災を免かれ、巨樹鬱蒼の間に清流をはさみて十三戸の文化的建物が點在してゐ



る。醫學博士大村正夫氏を村長とする一匡村と稱する避暑地である。同氏は醫學者や、大藏次官、法制局長官、鐵道省建設技師等の顯官、學者藤原咲平博士、大會社重役細貝正邦氏、文士谷崎潤一郎氏等の上流社會人士の集である。現に金澤前群馬縣知事も此村の同士である。

村名一匡村は帝國大學卒業者集へに一匡社と稱する集あり。これに起ると。

沿革の大要、大正十一年八月、大村博士、細貝正邦氏、一匡社の避暑地を選定すべく、健康上より、教育上より、帝都の距離上より見地として、理想の地を求めしにこの地を得たり。大正十二年七月一日開村。

健康上より見たる六ヶ原高原。高山氣候は低地の氣候と著しく相異つてゐるから人體に及ぼす影響も大に異なる、常地方では凡そ一千米以上のところが高山氣候の特質を示す。六里ヶ原高原は高山氣候である。輕井澤、箱根等は山岳氣候である、高山氣候の特色の重なるものは氣壓の減少、氣温の低下、濕度少き日光の強さ等で。氣壓の低きため、平野から轉地すると肺臟や心臓の鍛練が行はれる、氣温が低い、氣温は一千米登ると凡五度位低くなる。又濕度が少ない。濕氣が多ければ蒸暑く冬は一層寒い。濕度が低いから體温の放散が盛で、體内の燃焼が盛に行はれ新陳代謝が活潑に行はれる。食慾が進んで體重が増す高山氣候は夏冬の温度の差が小さい。

紫外線が強い。波長の短い紫外線は大氣中の瓦斯、水蒸氣、塵埃に吸収され量が最も多い高山地方は空氣清潔稀薄で塵埃水蒸氣が少いから日光が強く、殊に紫外線の量が多い。日照時間が長く、且つ雲量が少い等が日光療法に適地だ。水質よく清澄、水原地十餘町距離あるため酸素量多し。森林の多いこと。平野なること風光秀麗なること等も無論良い。

衛生上は村長大村博士を始め到れり盡せりだ殊に小兒科として隨一の西村伊策博士を當村として依囑してゐる。

教育風教上、先進避暑地には風教上思はしからぬ所も少くないが、當村はこの點に最も留意してゐる。家族的、組合組織で健全なる社會性を尊ぶ、一見簡素、質實、優美の點が直觀的にくる。建築の様式、間取の工合、家毎の垣根は全く無

く。村本位である。和協の美風が偲ばれる、屋根のふき方、壁の一こて一こて風雅である。

大村博士の施療附近村は甚大の惠澤に浴してゐる。

産業開發、本年「マス」飼養を開始、縣水産試驗場技師出張飼養に努力せりと。

水温の適當なる。水原地十町以上にし、流域森林地にして平亘、水量豊にして清澄なる等理想的飼養地なり。仔魚成長の後はこの細流に放流して産業開發の助とならん。近く鮮魚を豊富に供給せらるゝであらう。

(金澤佐平)

## 二、法政大學村

法政大學村は東鐵北輕井澤驛の南にあり、昭和三年法政大學校長司法大臣法學博士松室致氏が、同校職員及學校關係者の爲、避暑地として創立したるものなり。

面積八百八十九町歩、戸數二百二十戸、村長は松室安正氏なり。

昭和三年第一次の建設は水道幹線二七〇餘間と幹線道路六間幅を中心とし、四間幅の歩道を縦横に通じ、九十五戸を設く、第二次昭和四年には七八〇〇坪を開き百二十五名の加入者を得後更に擴張して今日に至れり。所謂鷹山莊は、故松室致氏の別邸にして瀟洒古雅の茅屋なり。

村の東數町にして熊川の清流あり、之に面して俱樂部を設く、善美の文化的設備と、温泉池沼飛瀑之に和して消夏の樂園なり、

北輕井澤驛と俱樂部の中間に、南紀俱樂部あり、繪畫の大家北澤樂天氏之を主宰す

(長野原委員報)

## 三七、長野原町の古塚一束



- 一、大津物見塚 中之條上田線の縣道、草津分岐點北方約七十米、國有林内にあり。眺望廣く西は鳥井峠田代平原西南六里ヶ原、北草津高原東高間高原、六合の各須賀尾横壁川原湯の谷、一眸の下に見ゆ。戰國時代狼火臺の在りし所か。羽根尾氏湯本氏浦野氏等の兵を呼び集めし所ならんと謂ひ傳ふ。
- 二、大津の古塚 縣道上田線と草津線との分岐點より約九十米にして丸小山あり、大日塚と稱す。前方後圓式の古塚らしく、頂に若櫻樹三株、松梨の老木あり。又石宮祠二つあり。
- 三、比丘尼塚 長野原町大字與喜屋字蛇籠の奥の畑中にあり。戰國時代のものか、塚上に五輪塔五六基あり。
- 四、外輪原の塚 長野原町大字與喜屋字下田外輪原にあり、廣さ二十七步、前方後圓式にして、頂上に老松一株並に五輪塔二三基あり。
- 五、大津の經塚 長野原町字坪井小林濱吉氏裏に藥師堂あり。其附近より經文石を出す。  
(長野原町委員報)

### 三八、古墳雜記

郡誌編纂後古墳に關係する事項にして後に傳ふべき主なるものを摘記すれば

#### 一、盜堀せられたる古墳

##### ○太田村大字植栗諏訪社古墳

昭和五年七月十日當古墳を六月中盜堀したるものを附近の小供發見し金環玉石類を拾得したる由を聞き七月十五日之を調査せり。此古墳は未だ人に知られざりし古墳にして大泉寺川に沿ひ縣道より約三丁南に入りたる左手の小山の頂にあり。蓋石三個、一個は其儘にして二個は移動あり其儘石の上に、石祠諏訪社を安置す今回の盜堀以前已に發堀せられたるものと認めたり

櫛の高さ六尺巾五尺奥行約二間、坑道の入口二尺、坑門の高さ三尺なり。櫛内は赤粘土を以て埋められ底部は直徑八寸位の川原石を敷きつめ其上に小石を六寸の厚さに並べありたり、其後調査するも如何なる人の盗みたるものか遺物に如何なるものありたるか全然不明なるは遺憾の次第なり。

##### ○原町大字川戸 天龍の古墳 (下郷)

本古墳は原町古墳中最も大なる古墳にして未だ發堀せられざるものとしありたるに昭和六年七月塚上東方部に穴を明け之より廓内に入り盜堀したる形跡あるを村民發見し、直に原町警察署へ届出で坑道部を開き廓内を調査したるに、廓内高さ一丈餘、巾九尺、奥行二間半に及び頗る大規模のものにして葺石らしく直徑五寸より一尺に至る川原石累々として厚さ三尺もあり北方後壁の部分を掘りたるも何の得る處なく去りたる模様なり。坑道の長さ二間半、實に原町最大の古墳なるを見たり。

#### 二、埴輪人形の手と足を發見

昭和十年六月中之條原町の境山田川橋の架け替へあり其爲道路を擴げたるに中之條地區(以前、鍛冶屋の宅地前は潰れてなし)より埴輪圓筒の破片續々と發掘せり七月十一日同所より埴輪人形の左の足一右の手一個を山田川居住青木倉吉氏發見せり、手の指の部欠損手首に釦をはめ腕關節にて折れたるものなり。是は膝より下して足首に丸き足結びを飾あり、當時位高き女人の腰掛けたる埴輪なるべく吾妻郡としては誠に珍しき發見なりと云ふべし。  
(金澤佐平)

### 三九、吾妻郡に於ける古墳調査

昭和十年八月縣一齊に古墳調査を行ひたり、本郡の調査左の如し、材料は各村小學校より報告を蒐集したるものなり。



中之條町

形 式 圖型三九、前方後圓一、計四〇  
發掘の有無 發掘せるもの八 發掘せざるもの三二  
(但不明のもの二を含む)  
出土品有無 有るもの一一、無きもの四、不明のもの一七、品  
物、直刀、曲玉、埴輪の破片、土器破片、經石  
由來徵證參考事項 無し

東村

形 式 圖型一二、形式不明四  
發掘の有無 發掘せるもの一、不明三、發掘もざるもの  
出土品 無し  
由來徵證 五輪塚小野金善招魂墓と云ふ  
參考事項 稻城塚古塔南面に人形を刻み一側面に大治二年又  
西側に稻城と刻せり

太田村

形 式 圖型二二、不詳一四  
發掘の有無 發掘せるもの三二、發掘せざるもの四  
出土品 曲玉六、切子玉六、小玉多數、金環二、鍊環二、  
直刀五振、朱埴二三分、齒四枚、鐵親鈴一  
吾妻太郎行盛の守本尊一寸八分の金佛像一體  
由來徵證參考事項 無し

原町

形 式 圖型七九

發掘の有無 發掘せるもの七〇、不詳六、發掘せざるもの三  
出土品 直刀十四振、金環一六、銀環三、人骨一、人齒一  
鬘一、馬具五、勾玉二四、管玉五九、埴輪及筒四  
小玉一〇二、土器四、甲冑一、鐵八、槍一  
由來徵證 1 第一四號古墳支室の壁は朱抹と小石とをねり合  
せて塗ありと云ふ  
2 第一七號古墳よりは金環勾玉其他多數出づ  
金井之恭氏の軸物と交掲せりと  
3 第三六號古墳上に老杉あり郷原村の某氏伐りし  
に其夜急病にて死せりと  
4 第五四號古墳よりは虚空藏尊一體現はれたりと  
云ふ

岩島

形 式 圖型三四、方墳一、前方後圓型一、不明一  
發掘の有無 發掘せるもの 三四、發掘せざるもの 八  
出土品 曲玉、管玉、刀、金環、馬具、瑠璃玉、人の齒、  
經石、金佛、圓筒の破片  
由來徵證 鳥居姫の身代りにコノシロを草の中に入れて焼き  
たりと言ふ(第四號)  
參考事項 岩櫃山下には山櫻目通り十六尺六寸高さ五十尺の  
巨木あり(第四六號)

坂上村

形 式 圖型九、前方後圓型一、不詳一  
發掘の有無 發掘せるもの二、發掘せざるもの一〇  
出土品 不明  
田來徵證 1 第一號太子塚は上野口守田口朝臣大戸の墳墓な  
りとの傳説あり  
2 第六號境野塚は大戸城主浦野三河守の臣小林石  
見の墓なりとの傳説あり  
3 第九號安樂寺跡の塚は羽根尾長門守の墳墓と傳  
す  
4 各古墳共塚上に大日如來其他の祠あり里人崇敬  
し祭事供養等を營む美風を存す。

形 式 圖型二、下方上圓一、不明一  
發掘の有無 發掘せるもの一 せざるもの一  
出土品 鏡一  
由來徵證參考事項 無し

澤田

形 式 圓墳五 遺跡二  
發掘の有無 全部發掘しあり  
出土品 曲玉、管玉、刀、土器、金環  
由來徵證 不詳  
參考事項 無し  
名 久 田

長野原町

形 式 前方後圓型一、前方後方型一  
發掘の有無 發掘せられず  
出土品 無し  
由來調證 1 前方後圓型、古老より丸子山五輪塔を粗末にす  
れば崇ると語り傳す丸子山の西部に先住民族の  
遺跡三ヶ發見す  
2 前方後方型、里人五輪塚と稱するのみ外に口碑  
傳説なし  
五輪塔(火球)三ヶ。土球)一ヶ  
無し

形 式 圓型一三、前方後圓一、不明三  
發掘の有無 發掘せるもの一四 せざるもの三  
出土品 不動尊像一 古刀一 甲冑腐蝕片一 土器一  
由來徵證 無し  
參考事項 無し  
高 山

形 式 圓型四 不詳九  
發掘の有無 發掘七 せざるもの六  
出土品 無し  
由來徵證參考事項 無し

嬌戀村

草津町 史跡、名勝、天然記念物

(小池委員調)



#### 四〇、繩紋土器の發見

□先年御來郡指導を得てから、吾妻の考古界も擡頭して來ました。殊に本月初め御承知の岩津氏が來郡東部の古蹟視察に御出下されて、其狀況を上州紙に御掲載下されたので一般に此方面の趣味を喚起した事の様に思はれます、此後も各位の御指導を仰ぎ吾妻の考古的研究を進めたいと思つて居ります。

□就て一つ御研究を願ひたい事が有るのですが、夫は御承知の岩櫃山、其岩櫃山の中腹、俗稱鷹の巢と云ふ洞窟から、彌生式土器其他を發見したのですが、其洞窟は今も只行くにも頗る危険な處なのですが、大古此洞窟内に民族が居住して居たものでせうか、又は又其時代は此中腹迄土地が續いて居たものでせうか、研究の價值のある事の様に思はれるのです、以下發見の時の狀況と出土品の大要を申上げて、御教示を得たいと思ひます。

□今度岩櫃山の地元、平塚新井上野の區民が發起して、岩櫃山登山道を修理すると共に、頂上へ岩櫃神社を造營して一般郡民の參詣を求め、吾妻の名山の復活を計ることゝなつたのです。そこでも此の十五日に地元の青年達が道路修理に出たのです、そして其連中が鷹の巢の洞窟に瓶があると云ふ話を聞いて行つて見たのです。

□鷹の巢の洞窟は高さ二丈八尺位奥行僅かに二三間で、平地が十坪許りしかないのでありますが、其平地へ約百年も經たと思ふ檜の木と夫より若い雜木が三四本生へて居るのです、其一番大きい檜の木が三四年前に風の爲か岩盤から根が離れ掛けたのださうです。其根本に赤い珍しい瓶が口を出して居たので、平澤の人が掘つたさうですが、それが掘り出すと直ぐにぐづぐづと壊れてしまつたと云ふ事です。

□此の洞窟へ此の十五日に青年達が來た處が其枯檜の根本にまた瓶が出て居たさうです。夫を掘ると其又隣に一個大きな瓶が並んで居たので、先のは壊れたので後のは壊れない様に丁寧掘つて原町の關氏が持つて歸つたのです。

□私は十八日に此話を聞いて其瓶(高さ一尺六寸、胴周二尺三寸、口径四寸五分、圓周九寸二分、底部徑四寸周一尺一寸、其他破片二三あり)を見せて貰つた處が、それが先年西中之條から出た彌生式土器と同じ様な物です、直ぐ其日の午後關氏の案内で現地へ行つて見たのですが、もう其他には瓶は見當りませんでした。破片は次の様に色々の物がありました。又人骨も澤山有りましたが、其内に角器の破片と思はれるものと鮑の貝の二錢銅貨大の破片がありました、角器は刀の柄にでも使用したものか市松形の彫刻がしてあります。

□土器の破片も繩紋の付いたものや、出奥らしいものや、色々ありました。何れにしても珍しいものゝ様に思はれます。實地御視察を願へれば結構と存じます。

□私も尙詳細に研究して見たいと思つて居ります。

(金澤佐平)

#### 四一、先史時代遺跡及遺物

最近考古學研究熱高まりたる結果先史時代遺跡地の發見各地にあり郡誌編纂當時已に各町村共數ヶ所を見たるが其後土地開墾道路開鑿等により漸次其數を増し遺物の發見亦著しきものあり。

其後の發見地に主なる遺物

○中之條大字伊勢町只則俗稱塚間の高地約二丁歩より磨製打製石斧石匙砥石繩紋土器彌生式土器の破片を出す。

○大字中之條清見寺南耕地

之より磨製石斧及石鏃及繩紋土器破片を發見す當地は古く中之條町のありし地にして西中之條臺地より流し込みたる土



地には非ざるか。

○泉澤粧屋附近林道門鑿の時石斧石鏃繩紋土器破片を多數出土せり同地青木源吉氏保管

○坂上村大字萩生字

開田中多數の石器及繩紋土器の破片を出す、其中石棒高さ約二尺のもの及之に附屬する石臼を發見せり。

○坂上村大字本宿上の原

開田中高さ一尺八寸の大石棒及繩紋土器の破片多數發見

○坂上村大字須賀尾矢久平

同地も開田作業中發見大石棒石臼斧石匙土器の破片多數發見

住居地の埋没したるものと思はるゝ断面ある場所あり穴の直徑底部二間其中央に木炭の粉末堆積しあり夫より少し離れて丸石直徑一尺位のもの此の爐を取り圍みめるを想像し得らる。

○長野原大字應桑狩宿

舊狩宿關跡の西部高臺より石器土器を出す石匙の完全なるもの打製石斧等拾集せり。

○方今暮坂牧場

先年暮坂牧場と高間牧場との接續地外柵工事を施したる溝の中に黒耀石の石鏃を發見續て牧場事務所へ下る中間に於て頗る雄大なる黒耀石製石鏃を拾得せり。

○澤田村太字上澤渡蛇野

同部落西方畑地を開田中各種石器及土器の破片を出す。石器中有頭石棒石貨らしき徑二寸位扁平圓形の石器多數發見し

○澤田村太字上澤渡蛇野

同部落西方畑地を開田中各種石器及土器の破片を出す。石器中有頭石棒石貨らしき徑二寸位扁平圓形の石器多數發見し

たるは他に類例のなき貴重なる材料なりと信ず。

○伊參村大字五反田白久保

山の東白久保部落の南方に寺屋敷なる平坦地あり之を開墾して桑園とせしに多數石器及土器を出す。蜂の巢石底部嵩に木葉紋葉ある毒つば等貴重なるものなり。

遺物

(長野縣委員報告)

一、石 棒 横壁字中村金子壽太夫氏畑地下一尺の處より長さ七五兩頭の石棒發見

一、石 匙 大津字赤羽根畑地下一尺五寸の處より石匙土器の破片爐の跡らしき炭のある部分を發見す

一、土器破片 大津字番場寺澤橋の附近にて敷地々均中地下一尺の處より繩紋土器破片發見

一、石 斧 大津松木水田開墾の際地下一尺の處より打製石斧二ヶ繩紋土器の破片發見

一、石 棒 長野原小坂一本松宮崎齋太郎氏畑より七五兩長さの石棒石匙打製石斧を發見

一、土 器 同地篠原桑次郎氏畑より繩紋土器破片多數發見 (高山村委員報告)

一、中山字清水谷より打製石斧石鏃石匙土器破片發見

一、同西清水谷より住居地の跡並に打製石斧石鏃玉石等發見

一、同東町より石鏃一ツ

一、同上の原より石斧石鏃垂石黒曜石石鏃を發見

一、同古戸より石斧石鏃石棒繩紋土器彌生式土器の破片を發見

一、同細尾原より石斧石鏃玉石彌生式土器の破片發見

(金澤佐平)

#### 四二、行澤渡觀世音像に就て



渡觀音像について私と豊國覺堂氏との往復文を左に。

第一信 (金澤より豊國氏へ)

(前略) 寫真在中にて申上候、この寫眞の佛像は岩島村大字矢倉字行澤の渡(ワタリ)觀音堂にある秘佛に有之、行基菩薩の作と稱し居り候が此夏寫眞に取り候儘御目に掛け申候、足利時代のものには無之哉、高サ臺共六尺位有之、その彫刻はなか／＼達者にて保存の價値ある様に思はれ候が御意見承り度と存じ候。

なほ此の渡觀音堂は大永年間に中之條より移したるものにて最初は中之條にありたるものとの事に候、尙貴意に因り又々可申上候。

第二信 (豊國氏より金澤へ)

先般は失禮仕り候、御書面に依り早速御報申上度、本日岩島村に向き渡觀音像に就て調査をいたし候處、別圖の如く(記者曰、別圖は略す)表面より見れば一本の杉に手を附したるものにて其中一尺五分有之此の年輪五百餘を算し、全く目つまりの杉に有之候、右の方面は一寸の處に二十七八年なるも中央は四十四五年を數へ、左端に至りては百年を數へ申候。

首も一所に刻みしものが缺損して後に附けたものか又初めより別に刻みて挿入したものか不明なるも、漆液にて塗着せしめ居り候、大體想像するに一本の木を始め二ツ割りとし、之に表裏を刻み中を空洞とし重量を軽くすると共に腹籠りの觀音か、經文を收藏する場所を作りたるものかと存ぜられ候。

それが後年に至り縦に表面裏面共ヒビが入りしため鐵のカスガイにて之を止め置き候  
手も手首・ヒヂの所ツギあり、足も左右のツギ方相違しあり、頭部髪毛は別の板にて刻み、三片づゝ鐵の釘にて止め置き候。

口腔・唇は赤色に染まり居たるを今は口中へ白色の塗料にて塗られ居り候  
眼の玉及び眉毛は墨にて黒く入れあり候。

臺は丸く二重になり居り、自由に左右へ廻轉する装置になり居り、下の臺のヘソは餘程すれ居り候。

兎に角六尺に近き大型なると此の杉の目づまりには一驚仕り候尙之が縁起書とも見るべきものも有之候に付、寫して送付致すべく候。御調査下さる様御願申上候。(十月九日) (覺堂曰、金澤君も多忙のお方故、未だ縁起書の寫し參らず)

柴田先生の來示

豊國覺堂曰、前記の書面と寫眞とを柴田常惠先生に送致して御教示を請ひたるに、左の如き來示に接した。

御示しの觀音像拜見仕候、實地に就て拜見の上ならでは確たる事は申上兼ね候へども、寫眞に依つて推察仕候處にては近頃珍らしき御像と存ぜられ、群馬縣として古佛像の優秀なるもの極めて稀なる地方とて、珍重すべきものと存ぜられ候時代は御高見の如く。

鎌倉時代と致し候へば無難に

思はれ候が、左りとて其末期まで降す理由は無之様に存ぜられ、寧ろ

初頭に近き頃まで上げせ得べき

ものかと思はれ候、若し右の如き小生の卑見が、實地拜觀致候て過誤無之様に候へば

國寶指定の事も考慮さるべき

ものと存ぜられ候、後世の補修等は無御座候哉、此等の事も注意を要する事と存じ候。(後略)

覺堂曰、右の如く柴田先生の御意見もあり、後世の修補と云つた様なものも殆ど無い様子であるから、近く國寶指定の申請を同村の當時者から其筋へ差出す事とならうと思はれる。



尙又岩島村大字矢倉の渡軍平氏藏古文書、「行澤觀世音棟札之覺」の中に左の記録がある左に掲げて参考に供する、大永七年即ち約四百餘年前には已に此觀音が奉修せられあることがわかる。

(金澤佐平)

馬頭觀世音三面六臂吾妻郡三拾三所順禮之初二十一番行澤寺本願岩下村權律師行連

□大永七歲丁亥六月□元錄十二歲已卯迄百七三歲成

奉勤修守

於中條海藏寺堂開眼供養並馬頭明王□所□修三十三所六觀音法所時代齋藤越前守

大永曆丁亥六月十三日此迄已前之所也

札 日天子 梵天帝釋  
月天子 四大天王

爰南閣浮提大日本國上州群馬郡吾妻莊西條之郷岩下村行澤寺觀音堂建之一字元本願宗慶讚書記室禪師同渡右馬助家次夫婦染物一帯一筋大且那滋野朝臣長門守幸光

干時永祿十二歲十月二十七日

(次に職人、合力の名前あれども略す)

奉破造佛琳岩下村矢倉村爲男女二世安樂也

干時延寶未三月吉祥鳥作主義傳子

南閣浮(提)大日本上野國吾妻郡行澤村爰吾妻三十三所内二十一番有馬頭觀音之堂已及敗壞處深心佛子欲令再興善哉衆生奉怨速成就者手具切功德慈眼視衆生福聚海無量故應頂禮謂此依大悲又佛力別願兼諸橋佛是菩提子彌長久安全之所

茲時天和三乙歲極月十八日別當長寶院

(次に、大工、合力の人名あれども略す)

水月堂再建引

上野國我妻郡岩下郷行澤寺行澤寺者馬頭觀音靈場特行基御作而闔國崇敬之勝區也雖然今也物換星移昔盛所之佛閣塌傾頽而

風雨洗尊像眞實十月所視十指所指更難措因茲予欲再造之□力貧窮而不逮晨勤夕香思且休而已故藉郡力普募衆檀欲滿素願蓋

大山起於微塵江河生於滴水以隨喜施財之惠成斯誓願者乎

茲時元文五龍集<sup>庚辰</sup>申曆五月<sup>吉辰</sup>上州我妻郡行澤村願主貞仙

(次に合力の人名あれども略す)

馬頭觀世音葺替安永九子年十一月初八日仕廻同十三日入佛有之候伊勢町より葺手應永様渡し仕候人足行澤より出る

餅は行澤矢倉にてしろめ集高三斗有之候爲後日如件

萱麻柄矢倉村四拾駄岩下村にて都合六拾駄餘餅宿當村伊兵衛にて此節は無住なり (以下記録なし) 以上

### 四三、高山村仙勝寺趾につきて

昔、困る人にお膳を貸したと云ふ高山村の堂々淵の西北山に沿ふた平地に仙勝寺の跡がある。何れの時代に出來た寺だか不明であるが今は龍仙寺持ちとなつて居て方二間の阿彌陀堂が建てられて居る。堂の前の桑畑が昔の本堂跡だと思はれる。其前を東西に用水が流れて居て其流れを越して今中山へ通する道路に向つて參道が残つて居る。其中途に山門の跡だと思はれる處があつて、其附近二十坪許りは荒地地となつてゐる、中央に一基の五輪の塔と板碑の破片が残つてゐる此附近を耕すと必ず祟りがあると云ふて誰も開墾しないで荒れてゐる。

史跡、名勝、天然記念物



阿彌陀堂の東に二十間許り離れて五輪の塔が十幾つか残つてゐる。此寺に關係のあるものと思はれる。其東北、山の腹に千體佛堂の跡だと云ふ二十坪許りの平地がある。此附近の畑地から誠に珍しい土焼きの丈一寸位の佛像が澤山出たと云ふ話である。

此地川原田佐四郎氏は此佛僧を二體拾集して保存してゐる。其顔の美しく出来てゐる處から考へて相當の埴師の製作したものである。此寺に關係した古文書は一つも見當らないさうだが口碑に残つて居る處によると

昔奥州阿倍の一族である某なる者罪あつて奥州を追はれ諸々方々と流浪する内隠れ住むに適當な此高山に足を止め一字の堂を建て、此附近の民の訓化に努めて居たと云ふ。

偶々八幡太郎義家が奥州征伐の爲當地を通行した時復讐の目的を以て其先手に加り大武功を立て、凱旋し堂の改築を行ひ其威を振ふ様になつた處が阿倍の一族此様子を探なす爲に間者を放つた處其間者利根奥より沼田に出で此地に入り込み或夜火を放つて寺を焼いて歸つたと云ふ某も永く此地に止るの不利なるを悟つて何處ともなく旅に上つてしまつたとの事である。

其後奈良より雲水の僧來り此廢寺を惜み再び堂宇を建立して大に佛法流布に努めたと云ふが織田信長の奈良地方平定の話聞き郷里なる奈良へ歸り大に活動したとあるが其留守中又々焼かれてしまつたと云ふ。

其後又々再興したが天和元年八月の大暴風雨に山崩に遭ひ流失し遂に廢寺となり今に至れりと云ふ。

現在寺地山林一町歩田七反畑三反計二町餘あり。

堂宇の配置、土製の佛像、膳食しの傳説等より推して佛教全盛時代に建てられた吾妻でも昔を物語る貴重な史跡ではあるまいかと思はれる。

(金澤佐平)

## (八) 人物

### 一、修驗圓聖

——二百年前に於ける郷土研究家——

#### 一、私の圓聖を知るに至つた次第

修驗圓聖は吾妻郡原町瀧峨山金剛院第十五世の別當でありまして今より二百六十九年前の寛文四年に生れ今より百八十六年前の延享四年十一月五日に八十四歳の高齡を以て歿した人であります。

私は一昨年郷土史研究の一資料として「吾妻原町記」といふ一冊の古寫本を某君からお借りしました。此の寫本の表紙に「圓聖綴之」と書いてあり卷末に「維時文化五戊辰歲孟夏吉辰吾妻邑山人桂堂書之」と記してありました。つまり圓聖と人ふ人は編著者であつて桂堂と云ふ人は寫した人なのであります。私は此の圓聖といふ人名に初見參でありましたので其の時以來機會の有り次第尋ねましたが中々分りませんでした。

昨年某方面から「原町岩櫃城記録」といふ古寫本を借りて讀みまして其の或る部分は文體と云ひ。内容といひ吾妻原町記の一部分にそつくりであることに氣付き、後又他の方面から「寫本再編吾妻記坤の卷」を借覽して之も著者名は書いて有りませんでした。その筆致や内容が一層吾妻原町記に似寄つてゐることを發見して此の二書共或は矢張り圓聖と云ふ人の書いたのでは無からうかと疑ひ、もしさうであるとすれば圓聖といふ人はかなりの郷土研究家であつたと考へて居りました。

之は後に分つた事でありましたが前記三書共「吾妻記」を原據として居ります爲に全く同じい點が有りましたのです。



併し吾妻原町記と再編吾妻記との間には右の外此の二書にのみ共通な類似點を多分に有して居るのであります。所が其の後間もなく原町金剛院に古記録の拜見に参りましてその寶物として祕藏して居られる古寫本の全部が悉く圓聖自筆の編著であることを知り且つ圓聖の自署の所を見まして圓聖と云ふ人は此の金剛院第十五世の院主であつたことを知りまして非常なる愉快を覺えたのであります。即ち現に金剛院所藏の圓聖自筆の編著と申しますのは

- 修驗 岩 櫃 語 上中下の三卷 修驗 圓 聖 記 一卷
- 天 狗 神 佛 論 一卷 拔書諸大事符形書並序 一卷
- 五流神道兩部習合拔書 一卷 本山自身引導書 一卷

の六種八卷であります。之で圓聖と云ふ人物の存在が明瞭になり大に敬意を表して居りました所、本年二月岩島村春原氏所藏の乾坤二卷揃つて居る再編吾妻記寫本を拜見するに及び之がまた曾て私の想像した通りに圓聖の著述で有つた事が分り益々圓聖といふ人に敬服し且つ親しみを感ずるやうになつた次第であります。

然るに同院には斯程に偉大であつた圓聖に就いて書き傳へてゐるものは全くなく只過去帳に「權大僧都法印圓聖延享四十一月五日」と記して有るだけであります。併し圓聖自身書遺した著書の端々に依りますと或る程度迄は同人の事蹟を髣髴せしめることが出来るのであります。

即ち自筆の修驗圓聖記の序文に

……當院ノ主圓聖沙門當初ニ高祖父ノ俗姓西山氏豐前重久ノ末ニシテ……

とありますので地位及出身が分り又圓聖自筆の天狗神佛論の卷末に

北上陽吾妻郡府岩山郷原之町瀧峨山修驗沙門圓聖綴之 時享保十二丁未年四月八日今年六十四歲書ス

とある事に依りまして圓聖の生れ年は寛文四年であると云ふことが推定され、又同人自筆の本山自身引導書に

時元文中同郡大柏山ノ院主權大僧都光藏寺法印源空修驗宿因内ニ催シ機熟外ニ顯レ初學等ノ爲メニ再三懇望セシムルニ依リ予暫之間ニ之ヲ綴リ遣ハシ置ク者也瀧峨山十五世沙門七十五歳綴之書傳

とありますので其の聲望の高かつた事が想像され、且つその元文中といふのは同人七十五歳の年であるとすれば、元文三年に當るといふやうなことが分り過去帳の年次から見ても八十四歳の高齡を保つて歿したことも分るのであります。

### 二、圓 聖 の 父 祖

さては圓聖の父祖は如何なる人々で有つたかと申しますに、すべて圓聖自筆の著書の中にあるほんの僅かな記事と金剛院にある過去帳面の簡単な記録とに依つて知り得るだけのものではありますが、彼れの父は瀧峨山第十四世の妙潮法印と申しまして原町善導寺第十七世典譽教吞上人や同第十八世圓譽良山上人に就いて學問を修め屢大峯山に入峯して修業を遂げた人で圓聖は此の妙潮法印二十五歳の時に生れた子になつて居ります。圓聖自筆の修驗岩櫃語下卷に「妙潮法印之事」といふ一項があります。

慶安年中ノ比ヨリ妙潮幼年ニシテ教吞上人ノ弟子トナリ又有時ハ善導寺ノ良山上人ヨリ圓頓止觀ノ掛物ヲ一幅玉ハリ是ハ東叡山南光坊僧大ノ御自筆ト申ケル去レバ妙潮沙門之人ハ寛永十七年庚辰ニ生レテ成ス其父重源法印ノ云ク先祖西山豐前重久ノ諱名傳ントテ初名豐前トハ名付タリ後ハ大藏坊トシテ寛文三年ニ大峯ノ出世ヲ勤テ金剛院ト號ス後ノ入峯ヨリ西光寺妙潮法印ト申タリ是ハ瀧峨山十四代ノ院主ト

圓聖の祖父は重源法印と申しまして伯父滿福院東學の後を承けて瀧峨山第十三世の院主となつた人で、岩櫃山の頂上に天狗の宮を祀り其の麓に同里宮を創建し又善導寺十七世教吞上人の爲めに其の隱居寺宗安寺創建の資を供して盡力したり。晩年には瀧峨山不動堂の改築を成就したりなどした人であります。

さてその祖父の先代即ち瀧峨山第十一世滿福院東學と申します人は岩櫃城主齋藤越前守基國の忠臣西山豐前重久の孫に



當りまして、其父西山平八良重賢は富澤源五郎信房と共に齋藤越前守基國を守護して越後へ落ちたと傳へられてゐる人であり、此の十二世滿福院東學の時に岩櫃の城は取毀され城下町平川戸宿は下の觀音原と云ふ處へ引移されたのでありましたがその引移の時吾妻郡代出浦對馬守幸久に仰付けられて吉日良辰を卜定したのは此の東學でありました。圓聖著吾妻原町記の中に

情根元の古を尋ぬるに慶長十八年暮霜月檢地（中略）去る程に吾妻の諸司代出浦對馬守殿より瀧峨山滿福院東學の方へ被仰付吉日良辰を撰定して原の町を立初む其時出浦御奉行として東西は七町餘間に市町の町割屋敷割出來して翌年春元和元年乙卯如月彌生の月の花やかに各尋常の屋作り上下既に神妙也云々

と書いてあります。東學は重源の伯父に當りますが其の血統上の關係は、圓聖自筆修驗岩櫃語中に述べて居るところを綜合して見ますと

西山豐前重久―西山平八郎重賢―滿福院東學

―西山孫左衛門尉重永―重源

となりまして重源の子が妙潮、妙潮の子が圓聖であります。

修驗圓聖記、修驗岩櫃語諸、大事符形書序及過去帳に依つて瀧峨山金剛院主を世代順に表書きにして見ますと次の様になります。

瀧峨山金剛院

開山 金剛坊法印圓學 正應永仁頃

徳治二年岩櫃城主吾妻太郎行盛城内安全武運長久の祈

願として大聖不動明王を城の東北の靈地に祀る即ち瀧峨山金剛院の創めなり

第二世第三世第四世不明

第五世 大專坊法印良專 明德應永頃

第十三世 金剛院西光寺重源法印（權大僧都法印重源貞享

第六世第七世不明

三年六月十三日歿）

第八世 頼 詮

先代東學の甥なり、西山重久の曾孫に當る。重久より

第九世 金剛寺法印頼盛 大永前後

傳來の大和關の刀あり、寛文十年天狗里宮創建貞享元

年不動堂改築

盛使用の銀錫杖現存す

第十四世 金剛院西光寺妙潮法印（權大僧都法印妙潮元祿

第十世 大光寺法印法弘 天文 頃

十五年十月晦日歿）

岩櫃城主齋藤越前守基國の代參として入峰九度に及ぶ

重源の子、善導寺の上人に就て學ぶ

第十一世 徳藏院良圓

第十五世 妙法院圓聖法印（權大僧都法印圓聖延享四年十

加澤記卷二の初に「徳藏院と申山伏を召て一々に記

一月五日歿）

之」とあるは此人ならん。慶長六年岩櫃城代彌津志摩

妙潮の子、著述數種あり現存す、此代瀧峨山に百體の

守幸慶不動堂を改築す。（以上三善氏、徳藏院子無く

觀世音石像安置せらる

三善氏の正系斷絶し從兄弟西山氏に入りて嗣ぐ）

第十六世 東學院圓潮法印（權大僧都法印圓潮延享六年十

第十二世 中興滿福院東學

二月二十八日歿）

先代徳藏院と從兄弟、西山氏なり慶長十九年原町町割

圓聖の子、正徳三年父と共に上洛入峯す。（以下略す）

に關係す

三、圓聖の事蹟事業

圓聖の事蹟事業に就ては特に之を書き傳へてゐる文献も語り傳へてゐる言葉もありませんが彼れの著述そのものが何よ



り雄辯に之を物語つて居ります。

彼れの父は檀林寺格でありました善導寺の和尚に就いて學んだといひますから相當教養の高かつた人である事が想見されます。而して彼の祖父は我子の師である善導寺の和尚の爲めに土地を寄附して迄もその隱居寺創建の世話をしてゐる程の人である上に、その祖先には岩櫃城主齋藤越前守の重臣で而も忠臣であつた西山豊前重久（重源の曾祖父）が有り同越前守没落の際重圍を脱し千辛萬苦を嘗めて越後迄守護して行つたといふ西山平八郎重賢（重源の祖父）が有り岩櫃城破却城下町移轉の際關係して居る滿福院東學（重源の伯父）があつたりしましたので必ずや相當氣概も氣節もあつた人であらうと想像されます。此の重源が岩櫃山頂に天狗の宮を祀りその麓に里宮を創建したりしたのも或は父祖や舊城主を追慕する心の一つの表はれでは無かつたかと想はれます。圓聖は此の如き祖父を持つて居りました。而してこの祖父は圓聖の二十三歳になる迄存命してゐたのでありますから、圓聖はこの祖父から單に修驗者としての教育を受けたのみならず必ず岩櫃城に關し郷土に關しての澤山の昔話を聞かされたに違ひ有りません。それから又父妙潮も相當の教養のあつた人でありましたからその子である彼れ圓聖も自然可なりの教育を授けられたに違ひありません。圓聖の遺著に依つて見ますとその文體は吾妻鏡式な一種異様なものであつたり時には主語と補語との關係的位置の狂つてゐる漢文であつたりしますが、彼れ自筆の修驗圓聖記の中に收めてある役行者一千年忌諷誦文や、自身引導諷誦文などを讀んで見ますと、彼れの時代にしては而して此の山間僻陬にしては中々高い教育を受けたものである事が推想されます。而して彼れが特に史的趣味を大に持つてゐる筆まめの研究家であつた事は特筆すべき所でその遺著の數多有ることが何よりの證據であります。

参 考

圓聖の修驗岩櫃語中に宗安寺山ノ開事といふ註書きが有りまして「中代昔善導寺隱居ト號シテ教吞和尚ヲ取立ヲ寛永十四丁丑年寺ヲ立宗安寺ト號ス其時三人ノ施主アリ西山氏ノ沙門金剛院重源法印、見城氏庄兵衛、吉田氏五郎右衛門、何レ

モ畠ヲ出シ寺地ニ寄附ス」と見えて居ります。

さて圓聖は二十一歳の時早くも「拔書諸大事符形法並序」といふのを編して居ります。二十九歳の時に「五流神道兩部習合拔書寫」といふのを書いて居ります。而して元祿十年三十四歳の時になりますと遂に彼れの最大の著述——と申しましても薄い三冊物に過ぎませんが——「修驗岩櫃語」上中下三卷を書きました。その序文を見ますと例に依つて妙な文章で

修驗岩櫃語 吾妻記之略註朱書

夫凡尋<sup>ニ</sup>役氏之携<sup>ヘ</sup>ニ法流<sup>ヲ</sup>ニ修驗道<sup>ヲ</sup>勤行<sup>ス</sup>殊更瀧峨山不動尊ノ靈跡<sup>ヲ</sup>相續<sup>シテ</sup>須<sup>ク</sup>古今之欲<sup>レ</sup>結<sup>ニ</sup>來緣<sup>ヲ</sup>或<sup>ハ</sup>役君諸説ノ事並當院根元ノ次第<sup>ヲ</sup>顯<sup>ス</sup>耳或<sup>ハ</sup>又岩櫃舊跡等ノ雜談<sup>モ</sup>尙豫<sup>テ</sup>先祖三善氏西山姓司<sup>レ</sup>之其外古人ノ傳説<sup>ヲ</sup>増補<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>再編<sup>シテ</sup>修驗岩櫃語<sup>ト</sup>號<sup>ス</sup>是全他見不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>□爲<sup>ニ</sup>子孫見聞<sup>ニ</sup>謂<sup>レ</sup> 恰<sup>ト</sup>謂<sup>レ</sup>恰<sup>ト</sup>而<sup>モ</sup>文言任<sup>ニ</sup>愚懷<sup>ニ</sup>一座之嘲<sup>ヲ</sup>恥<sup>ガ</sup>ルニ非<sup>ス</sup>者乎

于時元祿十丁丑年四月中旬

役氏客僧法印（圓聖の華押）

上陽吾妻瀧峨山修驗沙門圓聖綴之

と書いて居ります。此の著は彼れが晩年に至るまで幾回も補修し書直したものであつたのであります。初めに述べた、「吾妻原町記」とそれから未だ見つかからない「瀧峨山記」との二書も恐らく此の頃の作であらうと思ふのであります。元祿十四年三十八歳の時には「修驗圓聖記」といふのを書きました。之は子孫の爲に家の來歴と修驗者として心得置くべき修驗道史や行法などを書いたものであります。その翌年三十九歳で父に別れてから後十數年間は著述もないやうでありましたが彼れの史的趣味と之に關聯する郷土研究癖とは決して失はれてしまつたのではなく享保五年五十七歳で「再編吾妻記 乾坤二卷を書いて居ります。その序文は

再編吾妻記序

人 物



夫從昔古人之書傳侍る根本我妻傳書之説を引て此書綴る尤末代之爲鑑益吾婦事とも委明にして不知を不知となし全後代之影見共なれかしと秃筆を走し顯す處也去レば其昔日本武尊東夷を平け給凱陳之御適當國に御縁有之宜ナル哉日本武尊御戲之陸語により吾妻と曰御言葉有之因縁之以吾妻と言關東をも左のごとく唱る根本出來す其外異説之類雖多併世人の評論是非を不決者也と云々

瀧峨山十五世

圓聖謹誌

時享保五載子春三月古日

といふものでありまして吾妻記を基とし研究を交へて編述したものでその坤卷は岩櫃城史として要を得て居るものと思ひます。而してこの「再編吾妻記」は修驗岩櫃語「吾妻原町記」と共に吾妻郡の郷土史研究上必讀の書物であると思ひます。それだけに編者圓聖に對して感謝する次第であります。

享保十二年には六十四歳で「天狗神佛論」といふ奇抜なものを書いて居ります。之は祖父の重源法印が岩櫃山に神照坊大権現を主神とする天狗の社を祀り子孫相承けてその祭祀を掌つてゐるので修驗者の見地から研究した天狗に就ての蘊蓄を披瀝した頗る面白いものであります。それから天文三年彼れの七十五歳の時には金剛院と共に圓城寺末である所の吾妻郡大柏木村岩本院の後進の爲に「本山自身引導書」といふ薄い一冊ものを書いて居ります。之が恐らく圓聖の書いた最後のものでありませう。

彼れはかふいふ編著に精力を傾けた外に如何なる事を爲したでせうか。それは誠に分つて居りません只彼れ五十歳の時即ち正徳三年に愛子東學坊圓潮を携へて上洛し本山聖護院に詣つたり大峯山に入峯修業したりしてゐることだけは明かでありませう。彼れの自筆の修驗岩櫃語下卷妙潮法印の條の頭書に（享保年間の書込ならん）  
妙潮法印元祿年中より有圓聖沙門一子二妙潮ノ爲ニハ嫡孫ナリ初名ヲ傳テ如先例高祖父爲ニ東學法印一玄孫ニテ初名ヲ豊

前トハ申ケル西山氏ノ正孫也偕寶永年中ニ右之初名ヲ改テ東學坊ト號ス正徳三年巳ノ七月上京シテ父子諸共ニ入峯修行勤之御本寺ヨリ出世ノ免許蒙之位官ヲ頂戴ス時ニ先ツ東學坊ト令補任所也彼ハ是瀧峨山十六世ノ院主トシテ金剛院ヲ相續スル者也

とあります。思ふに當時悴圓潮の年齢が二十幾歳かになりましたので己れの相續者として確かりした修行をさせたいし本山にも認めて置いて戴きたいししての事であつたでせう。圓聖は修驗者の習として大峯入峯の如きは何回となく試みた事でありませうしその他の名山大嶽にも登攀した事でありませうがそれはどうも分つて居りませぬ。

#### 四、瀧峨山の百番觀音安置と圓聖との關係

それから圓聖の家で祖先以來別當を奉仕してゐる瀧峨山不動堂を周る所の一大岩山即ち瀧峨山には坂東三十三番西國三十三番秩父三十四番合せて百番觀世音の石像が山中一帯に大小の巖窟又は岩頭に安置して有ります。百體の内今日見えなくなつたものも若干有りますが、尙ほ八十體許數へることが出來ます。之は何年に誰人の安置したものか判然して居りませぬが瀧峨山の入口でも有る善導寺大門に大ききといひ様式手法といひ石質といひ古さといひ誠によく山内安置のものに似て居る觀音の石像が一體ありまして、その細長い五尺近くもあらうと思はれる臺石の正面に「百番觀世音菩薩供養塔」とあり右側面に「經曰、具一切功德、慈眼視衆生、福聚海無量、是故應頂禮」と有り左側面に「延享四丁卯年二月吉祥日」と有り脚部の臺石三面に施主か世話人か知れませんが二十四人の氏名が刻まれてあります。もし之が瀧峨山百番觀音の安置に關係があつてその安置を終了した時、その記念の爲且つは道標の爲に此に建てられたものであるとしましたならばその年代は正に圓聖の晩年に當つて居りますから瀧峨山百番觀音奉安の事に瀧峨山の別當である所の圓聖が萬々無關係であつた筈はありません。思ふにある驚くべき百體觀音石像安置といふ大事業も或はこの圓聖法印晩年の大誓願であつたのではないでせうか。私は之が圓聖の事業であるといふ確證の擧がる日を期して待つものであります。